

清水長一郎遺文集(7)

清水長一郎遺文集(7)

目

一、ハイ釣り	1
一、釣りし のぶ	2
一、日高川の筏流し	4
一、日高川のプロペラ船	6
一、堀勝先生のことども	7
一、天木香樹	9
古田武光	
一、二階俊太郎氏の追想記に寄せて	11
一、田淵豊吉の方鱗	13
一、由良守応翁	14
一、荷車（大八車）	15
一、句集「あここの根」	16
一、人力車	19

次

一、餅つきき	20
一、人力車・荷車余談	22
一、自転車	23
一、名前のはなし	25
一、「80年間の思い出」を拝読して	27
一、自転車旅行	29
一、辞典に寄せて	30
一、「私の履歴書」を書き終わって	32
岡本勇	
一、オートバイ私談	34
一、院の庄と高野神社	35
一、江戸時代の物部有嗣	37
一、不幸な従兄弟のこと	38

一、麦 秋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

一、田淵豊吉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

一、歌集「花葵」によせて・・・・・・・・・・・・・ 44

一、峠のはなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

一、トンネルの話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

一、散りぬる人（藤田武蔵君）・・・・・・・・・・・・・ 48

一、二・八月・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

一、御坊の古本屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55

一、続・御坊の古本屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

一、南海醋酸株式会社移転問題・・・・・・・・・・・・・ 59

一、昔の交通事故①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

一、昔の交通事故②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

一、私の昭和52年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

一、「馬」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65

一、道成寺の絵馬・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

一、昔の交通事故③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69

一、去年・今年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

一、千羽鶴図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73

一、自転車今昔談・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 75

一、由良守応のこと・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76

一、春 愁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77

一、昔の交通違反・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

一、昔のハイヤー料金・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80

一、紀勢線の工事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82

一、飛行機見学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83

一、谷口飛行士・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84

一、日照り・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

一、平家落人部落と王丸谷の牢獄・・・・・・・・・・・・・ 87

小谷 緑草

一、車の先曳き犬	98
一、写本をみて	99
一、馬力車とトラック	102
一、荷入れ	103
一、写本をめぐる話	104
一、一冊の本	106
一、都市と田園	107
一、昔のダム補償問題	108

一、強力者の話	109
一、道成寺の石段	110
一、会者定離	111
一、旅の伝説	113
一、だりにつかれた話	114
一、古書談義	115
一、紀行「花扇子」	116
一、昔の旅日記から	118

「ハイ釣り」

「紀州新聞」昭和五十一年六月二十二日掲載

大阪管区気象台は今日四日に、近畿地方の梅雨入りを発表した。年によっては空梅雨とか梅雨の中休みということもあるが、まず来月の中ごろまでは、ぐずついた天候が続くものと予想される。

梅雨空のうっとおしいのは、わが国の自然現象としてあきらめもつくが、昨今の政界の動きや社会情勢も考えてみると、梅雨前線の梅雨前線の停滞以上の暗鬱さを覚えさせる。こんな折から先日の本紙に出ていた小さなニュースだが、ひと時の梅雨の晴れ間のように、さつと私の心を明るくした。

このごろは、どうしたことか物忘れがして、肝心のその記事がのった日も失念したが、記事の要点は、中津村子十浦小学校の男女児童が先生につれられて、校舎に近い日高川で、「ハイ釣り大会」を楽しんだというもので、その日の成績まで細かく報道されていて、読んでいるうちに思わず笑いがうかんできた。

私は日高川の側で育ち、今もそのほとりに住んであるが、村人たちは日高川のことを、古くから大川とよんでいる。村人たちのいわゆる大川と陋居ろうきよとの間に、これまた中川と云い上川と俗称している、かなり大きな灌漑用水溝が二筋ある。つまり私は日高川と合わせて三本の流れを朝夕ながめて、いつの間にかこの年令になった。日高川は西洋風に表現すると、日高平野の父なる川とでも云うべきであろうが、私にとつては年来の友人の一人に数えてもよい。

昭和二十八年（一九五三年）の水害から、日高川下流の景観もすっかり変わったが、以前は私の部落の前は広々とした河原であった。河原には早春になると猫柳が咲き、続いて土筆が芽を出し、間もなく野苺が芳香をただよわせ、やがて宵待草がしほらしい姿を見せた。また秋は「グミ」が渋い味に似ず赤い可憐な実をつけた。草いきれのむんむんする草むらには、「バツタ」や「キリス」がかくれ、時には縞蛇がひそんでいたものの、やはり河原は腕白どもの、最も魅力にみちた、しかも安全な遊び場であった。勿論スポーツ施設などある筈はなく、子供たちはそれぞれ手製の玩具で遊び、昆虫を追い回したが、何といっても夏がよかった。

プールはまだこの学校にもなかったが、七月に入ると全校児童が先生につれられて日高川で泳いだ。夏休み中は増水や雨でさえなければ、いわゆる大川で遊び上川でも唇の色が変わるまで泳いだ。

小学校の何年生ごろだったか「ハイ釣り」を覚えた。村の駄菓子屋で糸と釣り針を買い、竿は自分でつくった。水が澄み切って泳いでいる魚が岸からでもよくみえた。ハイはスマートな姿をしているが意外な大食家で、米粒や小さな虫でよく釣り上げた。中田宇南の随筆集「垣のうちより」の中に「釣り」と題する一篇がある。周知のように中田氏の随筆には余人のまねすることのできぬ、お人柄そのままが滲み出た豊かな滋味と、心にくいばかりに巧みな表現

が、至るところにみられるが「釣り」の一篇は、とりわけ私の愛読する好篇である。そこには麦秋の印南川で糸を垂れる宇南大人と、針にかかった小魚が、どちらが釣り人か何れが小魚か分からぬほど渾然と描かれている。

ハイ釣りと同じころ川エビ掬いにもよく出かけた。一個十銭ぐらいの小さなエビ網と、米ぬかを田圃の泥とねり合わせてつくった握り飯大の団子をもって、川エビのありそうな岸辺を選んで、土団子を水の中へ投げてやる。やがて米ぬかの匂いに誘われた川エビが、大きな手をふりかざしながら団子の周りに集まってくる。そこをすかさず上から網で伏せる。昔から私の地方で「蟹は勝手に横に這い、エビは遠慮して後へさがる」という言葉があるが、この習性を利用して網を操ると、百発百中エビは網の中にすべりこむ。

鮒もとつたし鯰もとつた。子供というものは仕方のないもので、田圃へ水を入れるためにつくった堰をこわして水を落とし、鮒や鯰を手掴みにして大手柄をあげた気になり、家人が留守にしている友人の家で鯰を焼いて食べた。今から考えるとよく食中毒をしなかったものである。

またある時は稲がようやく伸び始めた田圃に入り、大事な稲をふみつけた。この時は運悪く耕作人にみづかり、目から火の出るほど叱られたのが、六十年を経た今も忘れられない。

気象学者にきいた訳でないため、たしかなことは分らないが、私たちが子供であった時の方が、今よりも冬はずっと寒かったような気がする。朝はいつも厚い氷が張ったし、水の落ち口には太いツララが垂れて一日中とけなかった。晴れた冬の陽にはえるツララは水晶のように美しく、ついそれらにひかれて高いところから逆しまになってツララをとって家に帰った。誰も見ていないと思ったのが家の表から母が見ていた。家にもどると同時に母から、風呂焚用の火鉢をたたきつけられた。

野蛮な遊びはもちろん困るが、テレビとマンガと塾通いに終始する現代っ子は、成長して、はたしてどのような思いを故郷にもつてあろうか。

子十浦小学校の「ハイ釣り大会」など、たとえひと時の野外教育とは云え、児童たちが卒業後やがて都会に出るであろが、折に触れてあの美しい山々の翠と清らかな日高川の流れ、竿にかかった小さなハイの手ごたえを、きつと瞼の裏に思いうかべる日があるに違いないと私は思うのである。

釣りのぶ

「紀州新聞」昭和五十一年七月二十二日掲載

古い話であるが私が子供のころ、居村小熊から御坊へ行く場合、若野井溝ぞいの村道を歩いて、村人が関門とよん

でいた東郷井樋の所で、今の県道初湯川―御坊線に入り、藤井・出島を通り右折して、大洋化学本社前を経て島に入ったものである。

もっとも、もう一つ村の農道から日高川の小熊堤防へ出て、東郷井樋の少し下で、土生川に並べた飛び石の上を渡って、初湯川―御坊線に出る近道もあった。人々はここを越えることを「まっち」を渡ると俗称していた。どうして「まっち」を渡るといふのか、長い間疑問としていたが、後年、故和田喜久男氏著の未刊本、「和田村小字考」を読んでいるうちに、小字「千町（ちまち）」を説明して

―今の人は市街を町と思うのは常識であるが、この町は間路で田の区切り、いわゆる畦畔を云うのであり、藪・財部・丸山等到大町があり、玄子に春畝町があり三百瀬に裏瀬町がある。

と、わが国の古い百科辞典「和名類聚鈔」を引用したり、古歌の用語例を示しているに出くわした。成程そう云われてみると、村人がふだん何気なく使っていた「まっち」を渡るといふ言葉も、古語の間路の転訛であったのかと納得した。

さて東郷井樋附近で当時の船津街道に出ると、藤井の一番かかりが谷口吉兵衛さんというお家で、たしか藤井和紙をつくっておられたように記憶する。私はここで藤井和紙の歴史を述べるつもりはないが、藩政末期に初まった藤井和紙は、日高川の清流にも近いという地の利もあって次第に発展を遂げ、明治四十四年に完成した天野稻楠編集の未刊本「藤田村郷土誌」に

当村三百戸の戸数中約四分の一は当業（製紙業）に従事し、製造額凡そ一年間一万二千八百五十締。此の金額三万六千七百五十一円

とある。但しこの数字は明治四十二年のもので、最盛期であった大正初年^{（一九一二年）}ごろには製紙業者も製造量も、もっと多かったのではないかと考える。

ともあれ其のころ藤井の大方の家々の表には、晴れた日にはすきあげた白い和紙を張り板に張りつけ、こぞって天日で乾かしていた光景が、何かの折に今も鮮やかに思いうかんでくる。

ところでこの吉兵衛さんの家では、毎年晩春・初夏の候がくると、きまって軒下に「釣りしのぶ」をつるしていたことも忘れがたい。第二次世界大戦後、わが国が敗戦の痛みからようやくやくたち直ってきた前後にかけてあちこちで、ちよいちよい「釣りしのぶ」をつるした家を見掛けるようになった。「釣りしのぶ」は広辞苑によると、

忍草をゆがねて、涼味を添えるため軒下につるすもの。
とあり、さらに「忍」のところには、

うらばし科の羊齒（しだ）植物、茎は地上をはい淡褐色の鱗毛を密生。葉柄は淡褐色で、長さ約五―一〇cm葉は

数回羽状に分裂、各裂片は長楕円形、夏の観賞用として根茎をからみ合わせてしのぶ玉を作り軒下などに吊す。
和名シノブ。別称しのぶぐさ。しぬぶぐさ。しぬびぐさ。

とある。

「釣りしのぶ」は広辞苑にもあるように炎暑にあおぐ日々、みるからに涼感をよぶ夏の風物詩である上、もともと羊歯の一種なので、乾燥を防ぐため散水さえ忘れなければ、少々のことには枯れたりはしない。つまり無精者の私にはうってつけの観葉植物である。それに子供の時分に吉兵衛さんの軒先で、毎年みかけたなつかしさも重なって、何とか手に入れたいものと心がけてきた。

私は和歌山市へ出かけて時間が余ると、よく紅葉谷から岡口門や一の橋あたりをぶらぶらする。市内ではめずらしく各種の木々が生い茂り、県下一といわれる樟の巨樹を眺めているだけでも結構たのしいのだが、城内には植木屋もあって、夏は「釣りしのぶ」も売っている。もとより値段の方も大したことはないのだが、何にしても「しのぶ玉」はまわりが軟らかい葉におおわれているため、乗り物の棚におく訳にはゆかず、といってバスから汽車へとぶら下げて持ち帰るのも大変なので、何度となく思案をしながらも、買うのをあきらめるよりほかはなかった。

然し世の中はよくしたもので、ちょうどそんな折から、「待てば海路の……」の何とかやらで、日高川食堂の切目重夫氏（一九七二年）から中井陶光画伯と八斗蒔の紅葉見物に行くのだが、一緒に車に乗らないかと誘われて同行した。昭和四十七年十一月九日のことであった。途中、李で紀藩の政争の犠牲となつて、此の地で果てた牧野兵庫頭一族の古碑を拝み八斗蒔についた。ここはこれまで幾度か訪ねたことがあり、頂上からの景観のすばらしかったことは覚えていたが、肝心の紅葉がどうであつたか四年も前のことで、すっかり忘れてしまった。小憩後、大熊へ出て龍神温泉を経て帰つたのだが、道中の大熊の路傍で副業に、石南花や米つつじを並べている一軒が目につき、私はここで待望の「釣りしのぶ」を買った、季節が季節なので葉はすでに枯れはて、切目氏の車の中に転がしておいた。「釣りしのぶは」早速庭の金木犀の枝につるし、以来年ごとに可憐な葉をいっぱいにしげらして、私の貧しい庭に風情をそえている。そのうち、せめて米のとぎ汁ぐらいはやらねばなるまいと考えている。

交通雑話

日高川の筏流し

「交通と公害」昭和五十一年八月二十日掲載

「佐井の鳴滝、山路の桧皮、筏乗りこそみて通れ」。これは古くから日高川を下る筏師の間で唄われてきた歌で、鳴滝も桧皮も日高川の難所中の難所として知られ、ここを無事に乗りこなすと、はじめて一人前の筏師として認められた。

有吉佐和子には名作「日高川」の中で、ヒロイン知世子が竜神から叔父の筏に乘せて貰い、桧皮と鳴滝を下るスリルみちた光景を描いた一節がある。筏は普通六尺幅に組まれた材木を床とよび、先頭の床を端床といい、以下二番床・三番床と続き、最後の十五番床を尻と称し、これで一枚の筏となり一人あるいは二人で一枚の筏を操った。筏一枚の長さは三〇間ほどで、石数に換算して七〇〜八〇石、トラック二台の積載量にあたる。

筏は奥日高から船津まで二・三日で流し、船津には二軒の筏問屋があり、上滝本の淵に繋いで、ここで船津組筏師に交替して村に帰った。船津・御坊間の流筏に要した時間は、午前五時に出発して午後三時から五時ごろまでだが、水のおおい時は午後一時すぎにつくこともあり、冬の渇水期には二日にまたがり、川辺町和佐の旅館に泊まった。

また一人前の筏師になるには、小学校を終えて二年間は炊(かしき)と云い、飯場で一番早く起きて食事の用意をし、仕事場にかけてつけて、火を燃やし先輩たちの来るのを待つ。

次の三年間は「しらない」と称し筏乗りを実習するが、操作がまずいと長い棒で殴られ、メツパ飯も川に放りこまれるというきびしいものであった。

私たちはよく日高川を下る筏を知っているが、側からみるほどのんびりしたものではなかった。時には筏が浅瀬にかかって苦労している場面や、端床が岩に乗り上げ二番床・三番床と畳み重なって難渋しているのもみかけたことがある。

また冬の渇水期には筏に組んで流せないため、「バラ流し」と称して一本一本バラバラにして大勢がかりで流したが、熟練した筏師が一本の丸太材の上で棹を操っているのには感心した。バラ流しの一行は日高川ぞいの村々へ宿をとったが、私の家でも暮らしの助けにしたのであろう、子供のころ数回その宿をしたことを覚えている。

こうして日高川の急流で訓練を積んだ筏師は、十津川・北山川・吉野川あたりまで進出し、明治四十一年以降、毎年二百〜三百名と北鮮の鴨緑江まで渡って流筏に従った。

こうして久しく続いた日高川の流筏も、昭和二十八年^(一九五三年)の水害後、道路の改修の結果トラック輸送にその座をかえて、途絶えてしまったが、今も日高川を下る筏や長い棹を肩に船津街道を家路にいそぐ筏師の姿をおぼえている人も少なくあるまい。

後記、本稿は主として「続日高郡誌」第三篇産業誌によりました。ここに深謝します。

交通雑話

日高川のプロペラ船

「交通と公害」昭和五十一年九月二十日掲載

現代、熊野川の瀬峡観光船はウオータージェット船になったが、ジェット船がはじめて熊野川に就航したのは、昭和四〇年^{（一九六五年）}一月一日のことで、それまではプロペラ船が熊野川の花形として活躍していた。

私は田舎者でまだジェット船に乗ったことがないので、その乗り心地はわからないが、プロペラ船なら二、三回乗船した経験がある。何しろ古いことでその記憶も、もうさだかではないが、熊野川の急流を遡行する船の姿は、よそ目には颯爽として美しいものの、事実を云えばプロペラの爆音が船内まで、すさまじく響き渡り、普通の話し声では隣席の人の言葉も聞きとれない程であつたことをおぼえている。

しかし、このプロペラ船ができるまで、新宮・本宮間の運行時間が約一二時間であつたのが、プロペラ船の出現によって、わずか三時間に短縮され、大正九年^{（一九二〇年）}一月その第一船「飛鳥号」――三二馬力――が就航すると、乗客がドツトばかりに殺到した。

こうして大正九年^{（一九二〇年）}一月熊野川に初登場したプロペラ船は、早くもその二年後の大正十一年^{（一九二二年）}一月頃日高川にも姿をあらわし、御坊・舟津間を運賃一円で貨客の運送を開始した。これは大正七年^{（一九一八年）}二月二十七日、日高川沿線の開発を目的に日高川運輸株式会社設立され、社長に湯川熊二郎・専務取締役役に中田直助が就任し、本社を高津尾において川船一〇隻をもって開業の上、商号を「ヒ（かねヒ）と称したが、同社の専務、中田直助が新宮から購入した定員二〇名のものであつた。

中田直助は明治一一年^{（一八七八年）}八月一日野口村熊野（現御坊市熊野）、東秀助の二男に生まれ、明治三十四年^{（一九〇一年）}八月十四日、早藤村三百瀬（現川辺町）中田家の養子となり、昭和二十八年五月三十一日長逝されたが、私も二・三回お目にかかった。おぼろげな記憶によると、みるからに精力的な商才にすぐれたお人のような印象が今も残っている。

さて話は少し脱線したが、大正十一年、田中直助によって新宮から移入したプロペラ船も、その後故障続出のため翌十一年八月頃、ついに廃航のやむなきにいたった。大正一一・二年^{（一九二二・二三年）}という、ちょうど私が小学校を卒業して高等科に在学中にあたり、旧矢田尋常高等小学校の校舎の窓から爆音を響かせながら、日高川を上下するプロペラ船の当時としてはスマートな船容に、驚異の目をみはつたものであつた。

ところで、このプロペラ船の乗船場は川沿いの字々に、細かく設けられていたものか、川上村熊野川（現美山村）から商用で御坊へきて、拙宅に一泊した母方の祖父を翌日の午前、プロペラ船の村の乗船場まで、広い河原を歩いて見送ったことが、今も昨日・今日のような鮮やかさで思い出される。

何れにしても日高川においてのプロペラ船の就航期間は、一年足らずの短期間であつたため、現代これを記憶している人は、ほんのわずかな老人のみとなつた。

後記、文中各氏の敬称を省略しました。また参考文献として新宮市史（昭和四十七年刊）・続日高郡誌（昭和五十年刊）・百年百思（昭和五十一年間）を使用しました。

堀勝先生のことども

「紀州新聞」昭和五十一年九月二十二日掲載

もう随分ふるいことである。そのころ私は毎日お茶をのんでは高尾光勇氏と無駄話にふけていた。

突然ここで高野光勇氏と書いても、大方の読者は存知ないかと思うが、氏は印南町印南原で生まれ、頭のよい器用な性質（たち）で、当時、定職につかず巽三郎国手の考古学研究の手助けをしたり、私の碑巡礼に協力してくれたり、昭和三十八年八月十五日、日高地方公民館連絡協議会が「紀伊日高民話伝説集」を公刊した際には有力な編集委員として、旧稲原地区を中心に郡市内各地の民話伝説の採集に精力的な活動を続けられた。

その高野氏がある日の雑談の中で、最近、大阪市立自然科学博物館を退職された人が郷里の志賀の生家に帰っておられると語った。勿論それは私には初耳であつたし、高野氏もまだその時はそれは誰とも、また何を専攻しておられる方とも知らなかつたようである。

しかし間もなくその人は生涯の殆んどを、植物分類学の道を一筋に歩んでこられた堀勝先生と分かつた。やがて先生と御坊市周辺の人々との接触がはじまると、その重厚で飾り気のないお人柄と、植物を中心にした深い学識が忽ち多くの人々の敬慕を集め本県文化財専門審議委員になられ、前後して和歌山県文化財研究会御坊支部長に推されたほか、御坊市と日高町の文化財保護審議委員、御坊市史・日高町誌・川辺町史や県下三・四の町村史の編集委員、或は顧問を委嘱され、また本紙の随想同人として毎月健筆をふるわれ、極めてありふれた言葉であるが、日高地方の文化向上に大きく貢献された。

私ごとで恐縮するがここ十年ばかりの間、私は色々の会合で毎月のように先生の温容に接する機会を得た。

話は前後するが帰郷後まもなく、先生は夙川女子短期大学教授に就任され、月に何回か夙川へお通いになったが、或はそのように定期的に若い女子学生に接しておられた影響か、または青年時代から植物調査のため山野を跋涉して体を鍛えられた結果か、先生はいつも御年令より若々しくお元気で、御坊步こう会にも屢々参加されたし、文化財研究会の見学旅行にも、遠近を問わずお出かけになつて会員のご指導に当たられた。

こうして先生の晩年の十年足らずの期間であつたが、私がお逢いした先生はいつも温顔で、どの会合でも厳しいお顔をみせられたことはなかつたし、先生がご出席の会場には常に明るい空気が溢れていたのも、やはり先生のお人柄が醸し出されたものだったのである。

昭和四十四年十月二十日御坊步こう会の一行が有田郡広川町落合から川辺町へ室河峠越えをした際、七十翁とは思えない足どりで先生も参加された。落合谷の峡田をすぎ雑木林や植林地の一部が尽きたあたりから、ゆるやかな山の斜面をS字型に登ってゆくのだが、細い峠道の両側には芒の穂が靡き雑草が晚い花を咲かせていた。その中の一株が余りにも小さく可憐な花をつけているのに私は思わず足を止め、何という花かと先生におききすると、「せんぶり」の花とお答えになった。

今先生の遺著「原色植物図鑑―昭和四十八年十月二十日・保育社発行」の「センブリ」の項を開くと、

りんどう科

日当たりのよいやせ山に多い一年生または越年草で、茎は直立して一〇―二五cmとなり、四角で黒紫色である。葉は対立して狭く、紫色を帯びている。茎は上の方で枝を出し、枝先に花をつける。花はがく五枚、花びらも五枚に深くさげ、おしべ五本、めしべ一本である。

茎・葉・根はたいそう苦く、昔から有名な胃腸の薬である。薬にすると千回降り出しても、なおにがいという意味で千振りという。

とある。私は重ねて家の家の庭でも育つてしようかとお尋ねしたのに、「少し難しいかもわかりませんよ」というお返事であつたがあきらめきれず、一株を茅屋の庭へ移植したものの、これはついに失敗に終わった。以来もう七年になるが、あの日のお元気であつた先生のお姿と、「せんぶり」の小さな白い花の色が、今も鮮やかに臉の裏に浮かんでくる。

このように御健康であつた先生も昭和四十九年頃から、やゝ体の不調をもらされるようになり、昨年十一月奈良県内の病院に入院され、十二月には先生のご希望で自宅で療養を続けておられた。先生のご病状が重いときいて、今年一月二十六日の午前、川辺町誌関係者がお宅へお伺いしたが、先生は私たちが人づてに耳にし勝手に想像していたよりもお元気で、臥床しておられたが色々とお話を承つて辞去したことであつた。

八月二十七日、所用でたまたま日高地方での先生の愛弟子・吉田謙氏に会い、先生が今日午前長逝されたと知らされた。

先生の告別式の八月二十九日はまだ残暑の厳しい折柄であったが、式に参列した人々で広いお家の周辺は一杯になった。日高地方はいうまでもなく先生が壮年のころ教鞭を執られた大阪方面の、わけでも近畿植物同好会や堀会の方々の参列と、その弔詞に心を打たれた。世間には教育家も学者も大勢いるが、卒業後、恩師を囲む「堀会」をつくり何十年も続いているという姿は珍しい。この一事からでも先生の御人格と学殖の程が偲ばれる。

この文章のはじめに書いた高野光勇氏も今はすでに亡くなられている。告別式から帰る途中、先生が生前深く愛され、幾度か観蓮会を催された邸前の池の蓮は、まだ所々に残りの花を咲かせていたのは妙に忘れ難いことであつた。

天木香樹

「日高新報」昭和五十一年九月二十一日掲載

古田 武光

昭和四十六年夏、由良白崎の万葉歌碑が除幕された日のことである。除幕式が終わって、堀勝先生とご一緒に車で帰ろうとすると、大阪から御参列になっていた境田先生（大阪府立女子大名誉教授）が、車の窓を叩いて私に「一緒に食事しないか」と仰言る。私はいいが堀先生の御都合はどうだろうかと先生にお尋ねすると、「出来たら私も是非とも一緒に」と申される。堀先生はその時まで境田先生と御面識がなかったようである。

境田先生らの休憩所にあてられた白崎荘は、白崎の海を見下ろす山の中腹にある。車を置いて堀先生と日盛りの坂を登ってそこへ着いた時には、境田先生はもうお連れの方と先に到着されていて、そこで私は堀・境田両先生を交々紹介した。

食事をしながらの話題は歌碑除幕式のあとだけに、各地の万葉歌碑のことや、境田先生の万葉紀行の思い出話であったが、私はこんな機会にこそ、万葉学の境田先生と植物学の堀先生との対話が聞きたくて、失礼を承知で境田先生に、

「先生、万葉集の研究もいつまでも国文学の枠内で止まっていなくて、史学は勿論、民俗学・考古学、或は堀先生の御専門の植物学や動物学など、いろんな学問の分野の成果を取り入れて、総合的に研究する時期に来ているんじゃないんですか」と申し上げた。

「それはよく解っているんですが、学者というのは自分の専門外のことについては到って狭量でしてね」

境田先生は苦笑された。

その時堀先生は始めて

「私は万葉集についてはズブの素人で何もわかりませんが……」
と、いとご謙遜されながら大伴旅人の歌、

吾妹子が見し輓の浦の室の木は常世にあれど見し人ぞ亡き (四四六)

を誦されて、この歌のムロの木についての先生の日頃のお考えを述べられた。

境田先生と別れて帰る途中、堀先生は幾度も私に「今日はお蔭で」と礼を言ってお下されたが、勿論先生からお礼を言われる理由には私にはない。ただ、この日のことが堀先生と万葉学界とをつなぐ機縁となったのである。

その日の境田先生の懇望によってお書きになった堀先生の「万葉集「ムロノキ」考」は昭和四十七年二月の「万葉」に掲載され、更にその年の十月、境田先生の御紹介で奈良県橿原市で開かれた万葉学会の年次大会で、堀先生は「万葉集「ムロノキ」について」と題して御講演された。先生の御講演のあった翌日の讀賣新聞には、先生の大きな顔写真と共に「老学者執念の新説」という見出しで、先生のムロノ木Ⅱイブキ説が紹介された。その日聴講した読売の記者には、学問上の誤りを正そうとする先生の異状な熱意を「執念」とも感じたのであろう。

しかし堀先生の両度の御発表に対して二、三度の反論が現れた。先生はその反論に反論する為、大伴旅人がムロの木を詠んだ輓の浦にわざわざ現地調査をされた。そして反論の反論をお書きになった段階の昭和五十年の初めであったと思う、文化財研究会御坊支部の主催で、先生のムロの木Ⅱイブキ説についての御講義があった。この種の講演を聞く時多くの場合、居ねむり隠しの為末席に坐る私もこの日は最前列に席を占めた。

先生は御講義の前置きに、「私の死んだあとに間違った学説が遺っているのは死にきれない」とも申され、ムロの木Ⅱイブキ説を「一枚起請文」にも譬えられた。だが、静かな情熱に満ちた御講義に反して、黒板に字を書かれる時のうしろ姿はきびしかった。

昨年の秋、大阪の境田先生から電話がかかって、今年も万葉学会のあと三十名ばかりの会員を連れて御地へ行くから、堀先生にも伝えてほしいとのことであった。当日堀先生を志賀のお宅までお迎えして、日ノ岬碕国民宿舎で境田先生らご一行と落合ったのであるが、先生はお家から持って来られた幅十糎、長さ七、八十糎のイブキの材を一行に示され、イブキは枯れてもなお香氣があり、ネズの木にはそれがいいことを強調された。万葉集にムロの木を表す文字として室木(巻四四七、四四八)牟漏能木(巻三六〇〇三六〇一)の外に天木香樹(巻四四六)或は廻香樹(巻二四八八)の文字が使われているからである。

堀先生のお話のあと、一行とともに国民宿舎のうしろの高地に登り、私はそこで堀・境田両先生に並んで貰ってお

二人の写真を撮った。よく晴れた日であつたので、その写真には背景の遠い白崎の海や白亜の島が美しく写っている。
天木香樹という名の喬木。今は堀先生のお姿とも思える。

二階俊太郎氏の追想記に寄せて

「紀州新聞」昭和五十一年十月二十二日掲載

故・二階俊太郎氏の「追想記」が刊行された。前にこの企画が進められていると聞いて、私も何か思い出を書かして貰うつもりでいたのであるが、例の怠け癖から遂に機会を逸したのが、今さらのように申し訳なく、かつ深くやんでいるこの頃である。

本書の中で故人の遺稿「小学校時代の思い出」や「和歌山県議会議事録」の中から、二階氏の質問演説を抜粋した部分、あるいは御遺族の筆になる真情の浸み出た数編は別格として、一般の寄稿者六九名の分を拝読し終わって、第一番に感じたのは此の種の出版物にあり勝ちな、故人を過賞した原稿が割合に少なく、執筆者がそれぞれの立場から、比較的いいたいことを自由に述べられている爽やかさであつた。しかもこれだけの数多い原稿を整理検討し、A五判二五〇頁にまとめあげられた、編集委員各位の御苦勞に改めて敬服した。

さて本書の全篇を通じてその底を流れている二つの大きな流れは、山本好一氏の「純情の人」や林松二氏の「底拔けに善良だった人」など、故人の人間性をとりあげた緒編と、黒川貞雄氏の「忘れられない王子川改修」・橋本実春氏の「豪放磊落の神器」・宮下金次郎氏「名田灌漑の恩人」、その他にみられる氏の政治家としての面ではないかと思われる。なお源地武夫氏の「紀州新聞生みの親」では、これまで余り他人に知られていなかった、日高地方の文化史上にしめる故人のかくれた業績が語られているのが忘れ難いし、小竹林二氏の「柔軟でリベラルな二階さん」や藤田武蔵氏の「二階氏と菊江夫人」の二編は、底抜けの善人だった故人にも、やはり世故に長けた、もう一つの顔のあったことを、チラッと窺わせて、思わず微笑をこみげさせた。

故人二階俊太郎氏の私の思い出は、氏が御坊に移られて間もない「日高日日新聞」か「紀州毎日新聞」記者時代の、ちよつと愉快的エピソードからはじまるのだが、それは別の機会にゆずるとして、昭和四十二年（一九六七年）の一月の中ごろであつたと思う。

ある日・氏から御坊市北塩屋の「名田畑地灌漑竣工記念碑」を、一度「碑巡礼」でとりあげてみないかとお電話があつた。その「碑巡礼」は同年五月十七日に本誌上に掲載されたが、氏はこれを心からおよろこびになった。「夫レ治水ハ治世ノ要諦ナリ 治水ハ水ノ害ヲ防グトナスハ粗ナリ 畜ニ水ヲ利シテ万物ヲ化育スルニ止マラズ 治水ハ水

ノ心ヲ心トナスニアリ……」に文を起こした碑文は、実に和歌山県会議員・二階俊太郎氏の撰文だったのである。以下堂々三七八文字はさすがに昔とつた杵柄で、見事な名文である。恐らく日高郡市内の記念碑中あれほどの碑文は、そう多くはあるまい。

それにしても自分の撰文した記念碑を、わざわざ私のような者にまでお知らせになり、それが新聞紙上に発表されると、まるで子供のごとく手放しでよろこばれるなど、いかにも氏は「純情の人」とおよびするにふさわしい。

昭和四十八年^{一九七三年}二月、小山仁示関西大学教授が「田淵豊吉議会演説集―第一巻」編集公刊された時、私は中町の二階邸へその一冊をお届けした。私事で恐縮するが小山教授（当時は助教）がこの書の編集にあたって、田淵豊吉代議士（田淵仙人ともよんだ。和歌山県第二区選出の代議士で、偉れた哲人政治家）の資料を得たいと、御坊まで足を運ばれた。たぶん畏友・山中不艸君が御坊市立図書館長であった時と記憶するが、同君からの連絡で私は田淵代議士の御一族にあたる田淵優氏と共に、図書館内でしばらく同教授とお話を交わした。その二・三年後に「議会演説集―第一巻」が発行されたのだが、肝心の地元の人々の殆んどが今は忘れ去った田淵豊吉を、他県の大学教授によつて、ようやくその真価が問い直され、その演説集さえ発行されたのは、日高人としてはたして喜ぶべきか、あるいは恥じるべきか私には何か複雑な気分を味ったことを覚えている。

ともあれ私は小山教授の労にいくらかでも酬いるのが日高人の義務であると妙なところに力瘤を入れて、数拾冊の同書を郡市内の各方面に売りに回った。

中町の二階邸を久々にお訪ねしたのも、そうした経緯からであつた。当時悠々自適中の故人は、快よく一冊を購入された上、話があれこれとはずんで、楽しい一ときをすごした。次いで同書の第二巻・第三巻が出た際も欠かさずお届けした。

その後何かの折りに氏をお訪ねしたとき、

「先生・もう此の辺でも田淵仙人をおぼえている人は、年と共に少なくなりましたが、まだ今なら田淵さんに親灸し、私淑した人が市町村に健在しています。一つ二階先生を中心に「田淵豊吉を語る会」をしたいと考えているのですが……」

とお話すると、氏は即座に

「それはよい、大賛成だ。是非やりましょう……」

と快諾されたが人生は無常である。ついにそのお約束を実現しないうちに急逝されて、もう一年余りになる。嗚呼。

訂正 「二階俊太郎氏の追想記によせて」四行目、二階氏の質問を抜粋演説した部分は、二階氏の質問演説を抜

粹した部分に、「夫レ水ハ水世ノ要諦ナリ」を、「夫レ治水ハ治世ノ要諦ナリ」の誤りにつき訂正致します。

草の根文化シリーズ 人物編

田淵豊吉の方鱗

「御坊青年会議所」昭和五十一年七月一日掲載

田淵^{（一九二〇年）}仙人と言っても知っているであろうか。仙人とよばれた田淵豊吉は、御坊市新町の田淵酒造の家に生まれ、大正九年^{（一九二〇年）}三八才で国会議員に当選し、昭和^{（一九四二年）}一七年、東条内閣の総選挙で敗れるまで、深い学識と高邁な政治哲学をかかげ、どこの政党にも属せず独立独歩、無類の雄辯とまれにみる直感力で活動した、日本の良心ともいうべき政治家であつた。

「春になって沼で蛙が鳴きはじめた。やかましいぞと石を投げると蛙は鳴くのをやめた。しばらくするとまたガヤガヤ鳴き出した。静かにしろと再び石を投げると、今度も鳴きやんだが時がたつとまた蛙が鳴いた。うるさい。三度目には大きな石が投げられ、蛙の群はその下におしつぶされた。諸君はいま民主主義に酔うているが、将来この蛙の如くならざれば幸いである」

大正八・九年^{（一九一九・二〇年）}わが国で民主主義の気運が次第に高まりつつある時、田淵豊吉はこう警告した。後年わが国は急速にフッシュン化し、やがて不幸な戦争に突入した。

「世界に三人の大馬鹿者がいる。曰くヒットラー・曰くムッソニー・そしてわが東条英機である」と終始、東条内閣を批判し続けたのも田淵豊吉であつた。

「ライオンはこわくないが燕はこわい。ライオンは海を渡ってこないが、燕は海を渡ってきて日本の上に沢山の糞をまく。それを防ぐには日本を埋める程の飛行機が必要である」

聴衆は燕が飛行機で糞は爆弾を意味するとは分からなかった。例え分かったとしても当時の状況から、日本が空襲されようとは夢にも思わなかった。

政治にうとい私であるが、昨今の政界の動きを見ていると、御坊が生んだ清廉な哲人政治家・仙人田淵豊吉のことがしきりに思い出される。

（終）

交通雑話

由良守応翁

「交通と公害」昭和五十一年十一月二十日掲載

由良町門前に由良守応という人があった。守応は「もりまさ」とよむのである。文政十年（一八二七）十二月二十五日に生まれ、明治廿七年三月十日、和歌山で病没している。

これだけなら只の平凡な人にすぎないのだが、実は日高郡市内で初めて洋行した人である。時に明治四年十月八日、明治政府がようやく成立の緒についたところ、岩倉具視を団長とする欧米先進国視察団一五〇名の中に加わって、宮内省御用の馬を購入する使命をおびていたのである。

明治六年九月十三日視察団一行が帰朝すると、守応は直ちに皇室の車馬を管理することになった。年月はたしかではないが、明治両陛下ご乗車の馬車を御して千代田城紀尾井坂御門にさしかかった際、どうしたはずみか馬車が横転し、両陛下はお濠へ転落された。守応は夢中で濠へとびこんだ。豪気な天皇はすでに岸に上がっていた。守応はあわてて皇后を抱いて救助したが、その責を負うて即日宮内省出仕を辞任した。

この事件のとき皇后を救助するに当たって守応は気も転倒したのか、皇后を背からお抱きすればよいものを、前からお抱きしたため責めを問われたのであるというが、もちろん真偽のほどは雲上のことで知るべくもない。

さて宮内庁を退職した守応は間もなく東京浅草―品川間に定期馬車を走らせ市民の交通の便をはかり、本社を千里軒と称し数十台の馬車をもち事業は大いに繁栄した。わが国で初めての試みであった。千里軒というのは千里を走るという意味で、世人がその事業を賞讃すると、

「たった浅草―品川間ぐらいは云うに足りぬ、ほんの小手調べである。今に日本中に定期馬車網を布設すると豪快に笑った。」

また守応は先の欧米旅行の新知識を活用して、米国から数十頭の乳牛を購入の上、早稲田で牧場を経営し、銀座に進出して牛乳店をかまえた。いわば由良守応はわが国交通運輸業と酪農の先駆者であるが割合、日高人には知られていない。享年六十七才。昭和十九年五月三十一日、守応を敬慕する人々によって由良町門前のその旧居の跡へ、「正七位、由良守応翁誕生地」の碑が建立され、その後さらに興国寺参道の脇に堂々とした翁の顕彰碑も建立されている。

（本稿はほとんど「続・日高郡誌」によったことを感謝します。）

交通雑談

荷車(大八車)

「交通と公害」昭和五十一年十二月二十日掲載

敗戦後、間もないころアメリカの家庭には、必ず一台以上の自動車があり、道路という道路は、すべて舗装されている。それにくらべると日本の道路は、あれは道路予定線であって道路ではないときかされて、事情を知らぬ私どもは、随分大げさなことをいうものだと考えたが、今はわが国も交通状況は、そうかわりのない所まで近づきつつあるらしい。

しかしかえりみると、わが国の各戸に現代のように自動車普及し、農道まで舗装されるに至ったのは、せいぜいここ二十年位の間のことで、つい最近まで県道も市道も町村道も、石ころの多い凸凹道ばかりであった。そのような時代、明治末年頃から昭和十二・三年代にかけて、農山村の物流や生活物資の輸送の花形であったのは、中距離輸送では牛・馬車。近距離では荷車Ⅱ別に大八車あるいは台八車ともよぶⅡであった。

戦前の農村の産物の王者は何と云っても米穀であったが、この運送または荷造りの単位は今のようにはキロでなく俵で、米一俵の目方は大体十六貫(約六十^キ)、桝目にして四斗にあたり、これを担いで牛・馬車や荷車に積みこんだ。農村ではこの一俵を担がないようでは一人前の男として通用しなかった。自分の恥をさらけ出すことになるが、私は青年時代にも米俵を肩にすることができず、とうとう一人前の仲間入りができないまま、この年令になった。

さて、荷車には平坦な道路では米五俵から七俵を積んで挽くのであるが、もともと荷車は木製で檜の車輪と、車輪の中央部と外部は鋼鉄でできているため、空車でもかなり重量がある。その上、当時の道路は石ころの多い凸凹道であつたから、二百^キ三百^キの重量物を積んで挽くのは、まったく重労働であつた。

私の知人が昔、川辺町小熊から美浜町三尾までこの荷車で米五俵を運んだが、いまの吉原の「尾上橋」の坂がどうしても登りきれず、まず一俵づつ二回、二俵を担いで行つて橋の欄干にもたらせ、残りの三俵を挽いて上り、橋上で二俵を加えて三尾まで行つた苦心談を語ってくれた。

こんな話がある。丹生村(現在川辺町)松瀬に松井藤之助という方がおられた。のち丹生村長をも勤められたが、堂々たる偉丈夫な上快力の持ち主でもあつた。氏の壮年時代、米を運ぶには松瀬から玄子へ川船で渡すのだが、あるとき下男と二人で米を積み出し中に、空模様が怪しくなつた。下男は一俵づつ担いで船着き場へ通うのだが、藤之助氏は一俵を担ぎ、さらに一俵を小脇に抱え、一度に二俵づつを運んだという。現在は道路もよくなつたし、小型トラックも各戸にゆき渡つたが、戦前は米を運搬するにも、このような苦労を重ねたものである。

(昭和五十一年十一月十七日)

句集「あここの根」

「紀州新聞」昭和五十一年十二月二十二日掲載

つたない性質(たち)に生まれたため、歌も俳句も作れないのに、私は若いころから短歌と俳句に親しんできた。短歌と俳句の相違は相違として、この二つの短い詩型はいつの時代にも日本人の心の琴線をかきならし、歎びと哀れさ或はおかしみを訴えつづけてきたのが、詩心のうすい私にも折にふれて風雅らしいものを感じさせたからであろう。他人様はそれは本当かと疑われようが、そんな次第で私は毎月本紙に発表される日高短歌会の詠草や、いくつかの句会の作品をたのしみ味わい、中央紙の短歌・俳句の欄も欠かさず目をとおり、自分の気に入った作品には赤いボールペンで○印をつけ、スクラップブックも短歌と俳句だけを、別冊として座右に置いている。

たしか先月の六日、七日の両日であったと思うが、市内で発行されている日紙に発表された岡本無漏子師の「小山耕一路氏句集―あここの根―発刊を祝して」を拝読して、私もどうかしてこの句集をお頒ち戴ける術はないものかと、かねて地方史研究の御縁でつき合ひの吉田謙先生に相談した処、その数日後の夜わざわざ先生御自身がまだインクの香も新しい同書を、茅屋にまでおとどけ下さったのには全く恐縮した。

これについては著者の小山氏はもとより、氏の信仰の上での師であり、かつ句作のよきライバルで氏と最も親しい間柄の岡本無漏子師ほか、多くの多くの方々の御厚意の賜と頭のさがる思いで、その夜おそくまで集中におさめられた珠玉の俳句を、噛みしめるように味読した。

本句集はさきに岡本氏が日紙で詳しく紹介されているように、四六判・厚表紙装で丈夫な箱におさめ、題字も背文字も自身の筆になり、殊に紺地の表紙に銀泥を用いて書かれた「あここの根」の五文字が見事な調和をみせ、一見して病床の方の筆と思えない位であった。また扉の笑をうかべられた髯を少しのばし着ぶくれた御自身の肖像は、長い闘病生活中とはみえないおだやかな明るさをたたえ、昭和^(一九四五年)二十年の御作

不仕合ひとりで背負ひ着ぶくれて

から様々の変遷をつぶさに体験され、やがて病にたおれられて

病髯を剃れば吾が顔年迎え

と俳句を唯一の友としての諦観の境地に至られるまでのきびしい道を、しみじみお察しし、人生行路について改めて襟を正したのであった。

小山耕一路氏・本名は久雄・明治三十二年七月二十九日、今の美浜町の三尾に生まれた。小山家は世間でそのころ「三尾の米藤か米藤の三尾か」とまでうたわれた程の名門で、戦前は和田・志賀・入山・湯川村・藤田村の各村に二十数町歩の田畑を持つ大地主で、

毛見の衆へ猪の小言も云ひたらず刈りかけて毛見をたのみに一走り曝書して意外に多き小作帳

毛見の役地図など出してはかどらず

話をり粃を噛みつゝ毛見の人

負過が少し気になる毛見づかれ

年貢受けすみたる土間のこぼれ米

粃噛んで毛見の話はかどらず

毛見もつれ坪刈筋刈りして試す

坪刈りの粃をかけた量たり

掌に磨りこなしみて麦の毛見

その他諸句に大地主・米藤の当主としての耕一路氏の日常が、彷彿として浮かんでいる。

私はもとよりこのような体験はないか、農村で育ったため毛見の人が粃を噛んだり、掌の上で磨ったり転がしている光景を、しばしば見たおぼえがある。しかしそれも戦後の農地改革で一転して

呼びなれて今に米倉注連飾る

旧地主という名に落ちて年暮るゝ

の境涯にたたされていたり、その苦境に追い討ちをかけるように、やがて不幸な病床につく身となられた。

この句集の初期の作で私の心にくるのは、やはり本書の題名となった

あここの根くぐりくぐて落葉掃く

はみ出たる石を止めて鳶枯るゝ

の二句で、さすがにホトトギス初入選句だけあって、句集の巻首を飾るにふさわしい。

窓口の風邪の噂や貯金出す

は氏が三尾郵便局長時代の句にちがいない。また

雪の傘とんくついてバスに乗る

は平明で写真がよく利いている。つづいて

泡かむり出て来し蟹や眼を起こす

は觀察が細かく、近ごろともすれば置き忘れたかの感じのしないでもない俳諧がもつおかしみが、自ら滲み出てほほえましい。また

家鴨の子入れし簞さげ田草取

蓋開けて青田の蛙に家鴨簞

の二句は、戦前のまだ恐ろしい農薬が用いられなかったころの、稲田の家鴨による「まなご」駆除の、のどかな田園風景をひとりでに偲ばせた。

吾が干支の猪が末座や涅槃像

この句は法善寺の句碑に刻まれているもので、私は以前、碑巡礼でとり上げたことがあり、これも自然に微笑をさそうユーモラスにみちた句である。

小山氏のご病気がどのようなものかは私には分かりかねるが、

棒のごと麻痺の足腰寒さびし

麻痺の足揉む癖ついて日向ぼこ

深々と椅子の足炉に麻痺の足

又病んで試歩も一から寒さびし

と思いがけぬ病にみまわれるが、

にじり出て妻と並びて月の縁

杖代わりして来し妻と日向ぼこ

よろめくを妻の肩かり更衣

病む吾に恙なき妻去年今年

と手厚くゆきとどいた夫人の看病によつて昨今は、よほど小康を保たれているという。小山氏は私よりも十歳の年長で今年七月喜寿を迎えられ、この句集も孝子・糸川藤茂枝御夫婦の父君へのプレゼントと承った。

こうした御一族の溢れる愛情に包まれた氏は、御病気ながらも御しあわせとも云える。「あここの根」を謹読して、氏のご病気の少しでも御軽快に向かわれんことを、そして一層俳句にご精進されんことを、切にお祈り申し上げる。

交通雑談

人力車

「交通と公害」昭和五十二年一月二十日掲載

第二次世界大戦後わが国の経済は疲弊し、食糧は不足して交通は混乱をきわめ木炭自動車があえぎあえぎ走り、窓硝子の破れた列車は鈴なりの乗客がひしめきあった。

そのころ智慧のある男が発明した輪タクが、幅をきかせて汗を流しながら客を運んだ。その後、日本の敗戦の傷がいえ自動車が普及するまで、輪タクは重要な輸送機関であったが、さらにさかのぼって戦前タクシーが流行するまで、人力車がタクシーの役目をはたしたのであった。

日高郡誌に従うと人力車は明治二年（一八六九）ごろ、和泉要助と高山幸助、鈴木徳次らが創設したもので、同三年政府の許可を受けて、東京府下で営業したのがはじめであるという。人力車が日高郡にはいつてきたのは明治六・七年のころで、南部町では明治七年代に松本嘉助・松下藤吉・谷川兵蔵らが人力車による旅客輸送を開業したとある。

明治四十一年頃の本郡の統計では、郡内の人力車の数は一三一台（内自家用車四台）あり、そのうち御坊町に四六台、印南町に二一台、東内原村に一三台、南部町に一一台、他は一〇台以下で、さらに大正一〇年（一九二一年）には九七台となり次第に減少した。これは馬車や自転車や自動車が年毎に進出した結果であり、当時日高郡は乗車料金の高いことで全国でもめずらしい程で、大正八・九年ごろ御坊警察署が定めた標準料金は平均一里（四^キ）で昼間は四〇銭、夜間は五〇銭、暴風雨の時は二割増し、待ち時間は一時間について一五銭であった。この標準で計算すると御坊と印南間は昼間は一円四〇銭、夜間は一円八三銭となるが、実際は昼間で三円以上、時には六円位のこともあり、夕方や夜間は賃金をいくら出してもなかなか車はなかった。

人力車の待合場所は大きな町の一定の地にあり、そこで車夫が客のくるのを待っていた。昭和三七^{（一九六二年）}年五月浜野大吉氏編著の「埴田区誌」によると南部の帳場は新町の森常旅館と新道の峯屋旅館の傍にあって、田辺と南部の片道料金は八〇銭から九〇銭であったと記されている。また大正一三年版の「御坊町勢一班」には人力車一八とある。なお同年の諸車の数は自転車八二六・自動車二三・荷車三七七・牛馬車五〇とあって、自転車の数が目だつて多い。その後昭和一二年刊行の「塩屋村郷土誌」には「人力車・自家用一台」ともある。

前記大正一三年といえは私がようやく高等小学校を卒業した翌年で、当時、御坊町の帳場は、たしか茶免橋の下手の方にあつたように記憶する。そのころ庶民が人力車を利用するのは病気の時か医師を迎える際、あるいは花嫁が嫁ぎゆく折か、とにかくめつたにあることではなかった。もっとも新地の芸妓衆が宴席によばれた時などは、膝に赤い

毛布をかけ美しく着かざって座敷へ車でいそぐ、はなやかな光景をしばしばみかけたことを、五〇年を経た今も何かの拍子に、夢のように思い出す。

大正七年一〇月ごろから悪性インフルエンザが流行を極め、全国でおおくの犠牲者を出した。このとき龍神温泉かじや旅館に嫁いでいた母の妹が感冒にたおれたが、危篤の電報を手にした母は、とるものもとらず直ぐ人力車で龍神温泉へかけつけた。当時、川辺町矢田地区にも人力車が二台あった。恐らくその時はどこかで一泊したのに違いないが、まだ小学生の私には龍神温泉とは、どんな遠い所とも分らないまま、その時の異様な空気が、現代も頭の隅にこびりついている。

話は前後するが人力車が出まわった初めはゴム輪ではなく、車輪の外側は鉄製であったため、人力車が村へ来ると遠くからチャラチャラと、一種特別の音を響かせたので、子供たちは、そら人力車がきたと目をかがやかして集まったものであった。

餅つきき

「紀州新聞」昭和五十二年一月二十二日掲載

わが国で米作りがはじまったのは、これまで二千三百年ぐらい昔の、弥生式文化時代の前期であるというのが通説であった。しかし近年は目ざましい考古学の進歩と、各地で相次ぐ遺跡発掘の結果から、実はそれより二、三百年さかのぼった縄文晩期から、すでに水稻栽培が行われていたとする説が有力となってきた。

この時代に早くも餅米が渡来していたかどうかは、私には分かりかねるが、ともあれ以来、米を中心に粟や稗や麦や他の雑穀いわず五穀が主食として、日本人を支えてきた。中でも米は収穫量の大きいことと、味のすぐれていることで食物の王座をしめ、日本の経済・宗教・文化・民俗に重要な影響を与えてきた。日本史上の数えきれぬほどの戦乱も、もとをたせば米を生産する土地の争奪が原因であったことが多く、この間のわが国の政治と経済は、農民が生産した米を、どう効果的に利用するかにあったと云っても過言ではあるまい。

ところでこの日本人とは深いかかわり合いのある米を入れる容器には、いつごろからはじまったかは知らぬが、藁で編んだ俵が用いられ、これまで農民は夜の作業や雨の日の仕事に、せっせと藁俵を編んだものである。戦後の農地解放前は農民が汗水を流して取り入れた米を自分が編んだ米俵に入れて、地主の家へ年貢米として納めたものである。したがって其のころの地主の屋敷には、白壁の土蔵が富裕な地主の象徴として偉容をほこり、貧しい小作人をうらやましがらせた。

その後第二次世界戦争が終結して十数年たった昭和^{一九五二}三十七・八年ころから、日本人にはなじみの深い藁俵にかわつて、新に麻袋が登場しはじめた。農家の人々にきくと、古来の藁俵も麻袋も内容の米は正味四斗重量六十^キ（十六貫）であつたという。いうまでもなく戦前は今のようにならなく、軽トラックは各農家に普及してなく、米はせいぜい荷車・牛馬車・リヤカーによつて運搬するより外はなかつたし、さらにそれ以前は人が肩にかついで一俵ずつ運ぶか、馬の背に乗せて輸送したものであつた。

六十^キの米俵を肩にするには、腰のひねりや俵にかけ手の位置とか、一種の呼吸があつたようだが、いくら扱い方に上手、下手があつたにしても、やはり基本的には体力、特に腕力と腰の力が必要であつた。そんな風で農村では米俵もかつげぬようでは、一人前の男として通用しなかつた。自分の恥をさらけ出すが、私はこの年令まで、ついに米俵をかつぐことができず、肩身のせまい思いを重ねてきた。

私はこれまでも何度かこの欄で書いたと思うが、数え年で三歳の秋、父を亡つてから一人の弟と共に、祖母と母の手で育てられた。自分の口からいうのはおかしいが、祖母も母も氣丈で賢く利口な人であつたが男手がないため、力のいる仕事の時は、祖母の弟にあたる人がきて用をたした。

暮れの餅つきもきまつてこの人を煩わした。子供のころ正月もちかいある朝、なにやら家中に暖かな氣配がすると目をさますと、台所の土間に臼をすえて、祖母の弟にあたるその人を中心、ぺったん餅つきがはじまつていた。まだうす暗いのに竈は赤々と燃え、餅米を蒸す「せいろ」からは、白い湯氣がもうもうと勢いよくあがつていた。祖母が傍らの手桶の水をつけては、杵の上げ下げの合間を縫うて上手に「手合わせ」をしていた。やがて小学校の上級生になると、私も弟も重い杵をもつて手伝つたが、何しろ青年になつても米俵もかつげないくらい弱虫の私は、すぐ息をはずませ、一臼の餅をつくのにも何回か交替した。

今から思うとその時分は、どの家庭でも現代より沢山餅をついた。白い餅や蓬を入れた蓬餅、小豆を入れた小豆餅（福餅ともいうた）、黒砂糖を入れた「せんべい餅」を「もろぶた」一杯に延ばしたり、棒状に長く丸めたりした。蓬餅は粉米や蓬を多く入れるため、あまり味がよくなかつたので敬遠して、「お前はぜいたくだ」とよく叱られた。

当時は環境が静かであつたせい、隣近所の杵の音までよくきこえた。「ああ何某さんでお餅つきをしている」「明日は二十九日だし三十日にしようか」と、祖母と母が話し合っているのをしばしば耳にした。二十九日の九は苦に通じるので、苦をつく縁起をかつぎ、この日は餅つきをさける風習があつた。何にしても万事が質素な時代であつたから、餅は最高の御馳走とされ祝儀、不祝儀にはきまつて餅をついたし、珍しい来客があつた場合もよく餅をついた。

私の家には大きな古い木臼があつた。長い間使つたので中の地肌が荒れて、うっかりするとせつかく出来た餅に小さい木片がまじるようになった。ちようどその時分から木臼でなく石臼が出来わつてきた。石臼がほしいと母が云い

続けた末、数年後にやっと買うことができた。

その後だんだん日本人の食生活も風習も変わって、近年は餅も昔ほど重宝がられなくなった上、電気による餅つき機が普及して、暮れになつても以前のように景気のよい杵の音がきこえなくなつた。

私の家でも孫が今春から小学校へ入学する年令になつた。長男が家でも一度昔風に杵で餅つきをして子供たちに見せてやりたいと云いだしたが、さていよいよになるとそれもなかなか手数で、最後はやはり当世風の餅つき機を使つた。

思いかえすと先にも述べたように、昔は正月にも節句にも仏事にも、何かというと祖母や母はあまり大騒ぎするでもなく、気軽にこちよこちよと見ているうちに餅をつきあげた。その「手合わせ」の上手であつた母も数年前に他界したし、もう家々でも「せんべい餅」を作つたり草餅をこしらえる、のぞかな風景は遠い過去のことになろうとしているのが、ちよつぱりさみしい気がする。

交通雑話

人力車 荷車余話

「交通と公害」 昭和五十二年二月二十日掲載

本紙の前々号に私は「荷車」を、前号には「人力車」を書いたが、読みかえしてみると少し書き落とした点がある。それで今回はその補遺をのせてみたい。

私の同級生の一人が高等小学校を卒業すると、すぐ御坊の米屋の住み込み店員になつた。米屋の店員の事で米俵の取扱いはお手のものであつた。その上、友人は体格は普通であつたが腕力もすぐれていた。ある時店へ集まつた人々の間で、米俵をかついで自転車に乗れるだろうかと話がもち上がった。

「いくら力が強くてもそんなことはできない」

「いや乗ることができる」

と二つに分かれてなかなか決着がつかかねた。

友人がそれなら私がやってみようかと自転車と米俵が店頭に用意されると、結果を見まもる大勢の前で、六十^キ入りの米俵を軽々と肩にするや、衆人があれよあれよと驚くのを尻目に、片手でハンドルを持つと、ひらりと自転車にまたがり、ペダルをしずかに踏んで東町を走つた。交通量のおおい今ではとうてい、このような離れ業はできないが、それにしても信じがたい力量である。

人力車が盛んに走って、今のタクシー代わりをしていたころも、一般の人々は車賃が高いため、なかなか利用する機会はなく、ふだん乗り廻すのは医師や芸妓ぐらいであったが、中には色街で旦那連中が時々これに乗って景気のよいところをみせた。いつの時代にも村には一人や二人あそびづきの人が居るもので、私の村にも二人の仲のよい飲み友達があった。

皮肉なことにこのうちの一人の家は、村の東はずれの岡の裾にあったし、もう一人の家は村の西はずれの田圃中にあった。それでも気心の合うた二人は、時々しめし合せて御坊の花街であそんだ。ある時この二人が町のお茶屋で飲んだが、お酒はうまいし芸者連は美しいし家のことも忘れて家のことも忘れて、つかうかと二・三日いつづけをした。家では主人が何日も帰ってこないで、家族の者がやきもきしていた。

そんなある日、村の東の家の女房が、「今日は帰ってくるか」と、小高い家の庭からはるかに藤井の方を眺めると、二台の人力車がつらなつて村の方へ走ってくるのが目についた。その車にはごきげんになった東と西の飲み仲間が乗っていた。

あまり物事にこだわらぬ女性であったが、後年

「一生のうちに、あんなに腹の立ったことはなかった」

としみじみ私に語ったのをおぼえている。それにしても私の村から藤井の堤防を走る人力車がわかったとは、世の中も随分のどかであったものである。

当時、車屋にはよく洋犬を飼っていた。客を乗せて人力車を走らせるとき、車に細い綱をつけ犬の肩にとりつけ、犬に先きひきさせるためであった。間もなくこれは動物虐待であるということで禁止されたが、洋犬が長い舌を出して、あえぎあえぎ人力車の前を走っていた姿が、何かのはずみでひよいと思ひ出す。もう数十年むかしのことである。

交通雑談

自転車

「交通と公害」昭和五十二年三月二十日掲載

前号の本紙に、私は米一俵をかついで、自転車を乗りまわした友人のときを書いた。これはたぶん昭和（一九二八・九年）三・四年ごろで、その人は二十三・四才の力盛りの時のことであつたと思う。

続日高郡誌、第三章・第四編「交通運輸誌」によると、自転車は明治十八年（一八八五）に英国で発明され、明治二十三年（一八九〇）わが国で、国産第一号車が製作されたとある。自転車は日高郡に入つたのは、日高郡誌には明治三

十四・五年ごろとあり、上南部誌には明治三十年ごろとあって、両誌の間に数年のへだたりがあり、たしかなことはわからないが、いずれにしても明治三十年代であることは間違いない。

ところで、おもしろいことに明治四十一年、木村紫星が編著の上発行した「日高名勝記」という本の広告欄に、「自転車・販売修理・御坊町西町・高松由松」と自転車の広告が出ており、もうそのころ御坊では自転車の販売修理で生活できるほど、自転車が普及しつつあったことが知られる。

私は少年時代に近村の某家で小僧をしていたが、日曜日にはその家の主人の自転車をみがいて、油をぶきするのが一つの仕事になっていた。何でも英国製のトラヤンプ？、といったかラージといったか、外国製の高級車であった。私はいつも自転車の掃除をしながら、自分も早く大人になって、このような高級車に乗る身分になりたいものだ、と思ったことであつた。まあ今ならさしずめ家用車の洗車を、引きうけたようなものである。

自動車や自動二輪車がゆき渡るまで、自転車ぐらい手軽で便利なものはなかった。それまで私の家から御坊で約四kmを歩いて行くと、およそ一時間かかったのが、自転車なら二十分もあれば充分であつた。したがって大抵の家庭でも次第に用いられるようになったが、その出廻りはじめたころは何ぶん値段が高く、村でも裕福な家から順次、購入されていった。

またしても続日高郡誌を持ち出すが、同誌の日高郡内の自転車の保有数は、明治四十一年一二七台、それが大正十年には三十倍近い三一六八台となっている。

いまさら自転車でもあるまいと笑われるかも知れないが、各町村誌を参考にして町村の自転車の保有台数を掲げると、次の通りとなる。ここに名前の出ていない町村は資料を欠いているために不明である。

年 代	町 村 名	台 数	年 代	町 村 名	台 数
明・三九年	切目川村	一台	昭・一〇年	名 田 村	四六二台
大・三年	丹 生 村	一九台	昭・一〇年	矢 田 村	三四九台
大・四年	白 崎 村	〇台	昭・一二年	高 城 村	二二二台
大・四年	切目川村	二〇台	昭・一二年	塩 屋 村	四五一台
大・五年	由 良 町	一五台	昭・一二年	矢 田 村	三六六台
大・一二年	御 坊 市	八二六台	昭・一三年	矢 田 村	三四八台
昭・五年	名 田 村	二九三台	昭・二〇年	矢 田 村	四五九台
昭・五年	稲 原 村	三九八台	昭・二一年	上南部村	六四七台
昭・六年	上山路村	七一台	昭・二五年	矢 田 村	五四二台

昭・七年	野口村	二一一台	昭・二九年	矢田村	八〇一台
昭・七年	矢田村	二七九台	昭・三二年	上南部村	二二五〇台
昭・九年	志賀村	二七六台	昭・三二年	埴田区	二二三台

以上でみると自転車の保有台数が目だって増えはじめたのは、昭和初年ごろからの傾向と考えてよい。また戦後しばらくして廃止されたが、自転車税というのがあって、町村の財政収入の一つとなり、自転車税を納付しないと鑑札がもらえず、無鑑札自転車として取締まれたものである。

名前のなし

「紀州新聞」昭和五二年二月二十二日掲載

考えてみると名称あるいは名前というものは、なかなか面白いものである。人の名前・土地の名前・器物の名前・動植物の名前・制度の名前・宗教上の名前・自然現象の名前等々かぞえあげると切りがない程おおい。しかしそれは他のものと区別するために人間がつけたもので、いわば一種の符号のようなものと云ってよい。

人間が名づけたものであるからには、それにはそれだけの理由があったはずである。早い話、いまだき余りみかけないが、勇夫という名前や花子という名は、その肉親が子供が大きくなって名前を通り勇ましい健やかな人になるように、花子の場合は成長して、花のごとく美しく、周囲の人々に愛される娘となるようにという、切ないばかりの親心によって命名されたものに違いない。土地の名前いわゆる地名にも、それぞれによって来るところの理由があったに相違ない。例えば日高平野の西部を流れるから西川であり、日高川にまだ人工的な堤防ができず、出水の度に藤井辺りから下手を自由奔放に流れていた古い時代、中洲になっていた地域が島であり、流れに近い岸のやや高いところに開けた地が岸野であり、後世、紀小竹の文字を宛てるにいたったものと想像される。

したがって、それらの名前をたどってゆくと、ある程度その土地の歴史や、ものの由来が明らかになってくる理屈であるが、何にしても人類の起源はきわめて古く、今では説明のできる名前よりも、どう考えてみてもわからない名前の方が多くなっている。

中津村の子十浦小学校は山村にあり、そう大きな規模とはいえないが、よい意味で、ちよつと特色のある学校である。昭和^{（一九七一年）}四十六年同校育友会の尽力で「ふるさと読本・いかだ流し」を発行したのをはじめ、翌年は「コンダ馬」、翌々年は「炭やき」という風に、毎年テーマをしぼって「ふるさと読本」を刊行し続けて現代に至っている。この「ふるさと読本・コンダ馬」が公刊されたとき、たしか古川成美先生であったと記憶するが、「コンダ馬」とどうしてよ

ぶのだろうかとの疑問を出された。私が少年のころお隣が米屋さんであったので、時々奥地方面から米を運ぶため、「コンダ馬」がやってきたのをおぼえている。

「コンダ馬」なる程あらためて問われてみると、「混駄馬」ではおかしいし、あれこれ思いをめぐらしたが、適当な答えが出なかった。そのうち中津村の方と思うが、本紙で「コンダ」は「小荷駄」のことであると回答された。そういえば「コンダ馬」には米や炭のほか、種々雑多な日用品も乗せて運んであらうことが、容易に想像される。試みに漢和辞典をひらくと、「駄」は「馬や牛などにものを負わせる」「背に乗せた品物」と注釈が出ている。まさに名答というべきである。

川辺町和佐に「みどり川」という名の小さな川がある。どうしてこの川が「みどり川」とよばれているのか分りかねて、同地の古老にたずねてみたところ、

老人は「この辺りはもともと日高川ぞいの低地で、毎年すこし水が出ると浸水して、米麦の収量が、その年の天候によつてきまらなかった。その結果・年貢は秋になつて稲毛をみた上で定めたもので、つまり見取りの意味であると父から聞いています」

と答えられた。結局「みどり川」と仮名書きしているので解釈に苦しむので、本当は「見取川」であることがわかった。地名でこう起源がはつきりする例はめずらしい。

日高川には今はどこでも立派な鉄橋が架かつていが、それは戦後もおおくは昭和二十八年（一九五三年）の水害以降のこと、それまでは木橋があればよい方で、たいていは日高川をはさんで村と村の交通の要所には渡し舟があるのみであった。野口と藤井の間にもあったし、若野と和佐の間・早藤と松瀬の間にもあった。特に野口・藤井の間の渡船場は出水ごとによく位置がかわった。乗客のおおい渡船場にはそれぞれ船頭が居て、川幅いっぱい張り渡した太い針金を伝つて客を対岸に渡した。渡し賃は時代時代によつて当然変遷したが、常水で大人一人一回一銭、自転車二銭の期間がもつとも長かったように記憶する。勿論、水かさによつて変動があり、牛馬を渡す場合は特別料金をとつた。

船頭は川原の片隅に仮小屋をつくり、客待ちの間は焚火をしたり手仕事をしていた。客が川原へ来て船頭が見えない時は、対岸へむかつて大きな声で「オーイ」とよびかける。すると仮小屋の中から船頭が出てきて、船を対岸に回すのだが、不便ではあったが随分のどかな日高川の風物誌であった。

ところで、この渡し場の船頭を一般に「さいし」とよんでいた。「さいし」がどういう意味なのか、ひさしく私の頭にひつかかつていたが、最近「さいし」とは「竿師」の訛つたものではないかと思うようになった。さきにも述べたが船頭は当時、川幅いっぱい張り渡された針金を伝つて船を操つたものであるが、これは、太い針金の入手が容易になった明治時代に入ってからで、それまでは船の上から竿を使って人馬を渡したもので、つまり竿師が「さいし」

の語源と私は考えている。

「80年間の思い出」を拝読して

「紀州新聞」昭和五十二年三月十三日掲載

先般から本紙に連載されていた堀内喜市郎先生の、「八十年間の思い出」を、毎日興味ふかく拝読した。

世間には在職中は熱心で立派な教員であったが、退職した途端に百八十度の方向転換をして、教育から全くとおざかってしまう人もみかけるが、堀内先生はまさに教育家になるべく生まれ、在職中はもちろん教職を去られてからも和歌山県の教育のために、文字通り献身された、稀有の方である。

堀内先生に私をはじめしてお目にかかったのは、いつであったかすっかり忘れたが、たしか本紙の随想同人の会合の折であったと記憶する。何でも会場であった御坊観光センターの浴場で、先生をはじめ数人の方々とご一緒であったような気がする。その後、私は続日高郡誌中の「日高人の著作篇」を執筆するに当たり、上志賀の先生のお宅まで伺いしたことも忘れがたい。

私は以前から地方史に関心をもっているのですが、どの本を読んでも直ぐそれが、日高地方とどのようなかわりがあるのかという点に興味を持つ癖がある。先生の「八十年間の思い出」も例外でなく、まず最初の「子供の頃」に強くひかれた。先生が母堂の生家に貰い風呂にゆき、母方の祖父に風呂に入れてもらい、おじいさんが濡れた手拭いを丸くして、幼い先生の頬つぺたへ押しつける話。―今は貰い風呂の風習は殆んど見かけないが、農家が全般に貧しかった明治・大正・昭和初年ごろは、どこの村でも近所・隣がよく貰い風呂をした。そしてそこが小さなこいの場でもあったことが思い出されてなつかしかった。

先生は幼児、魚釣りと植木いじりが好きであったという。「のん中」川や隣の川でよく釣ったとある。「のん中」の川はどこか分らないが、「のん中」は「野の中」の転訛ではないかと思ったりもした。

あの頃の子どもは今の子供よりも、もっと野性的で屋外で遊ぶことが多かった。私にもハエ釣りや鮎とりと熱中した時期があったし、先生のように植木鉢いじりの経験はないが、家の入口の一角に小さな庭をつくり、そこへ雪柳を貰ってきて植えたり、捕ってきた小鮎を死なせて、雪柳の傍へ埋めて小さな小石をおいて墓にみたてたこともあった。

先生は私よりも十余年の年長であられるが、当時の遊びは「八十年間の思い出」に記されているとおり、くび切り、かやし、場とり、輪まわし、石けり、凧上げ、ななこ、めんこ、糸とりなどであった。主食は農家でなかったせいか麦飯は食べなかったが、朝夕は粥食で、諸のある時は諸を、餅のある時はよく餅を入れた。年中行事のところで秋祭

りに上志賀に「子おどり」のあったことが出ているのが注目される。恐らく今は行われていないであろう。

大正^{一九一七年}六年先生は県立師範学校を卒業して、川中第一小学校へ赴任することになり、二人の青年に「ふとん」や「柳行李」「支那鞆」を荷なつて貰い、希望に胸をふくらませて、上志賀から川中村まで歩いて行く。結局、先生は川中第一小学校で二年間在職して、御坊小学校へ転任するのだが、転任の時は村会議員や区長さん役場の職員等が、村境の大又トンネルの入り口まで送ってくれた上、トンネル口で椎の枝を敷いて別れの宴を設けた。読んでいても全く野趣に富んだ一節であった。しかしその時の仏の串トンネルは数年前とりこわされて今は只の道路になっている。

その後、先生は東内原小学校を経て県実業補習学校教員養成所に入學、卒業後は県立師範学校附属小学校・海草郡宮小学校長・和歌山県視学・和歌山高等小学校等々の訓導や校長をつとめ、やがて和歌山市振興・復興・教学の各課長を歴任して終戦を迎える。その間先生は、ある時は図画教育に・ある時は児童文学に・また労作教育にと平凡な一介の教師たることに甘んぜず、その時々思潮や教育の風潮を敏感に反応して研究を進め、成果をあげてはよろこび、期待どおりゆかず悩んだり多感な教育者として歩んでゆく。

こうして先生が和歌山市振興課長時代に、和歌山市の大空襲に遭遇するのだが、短い描写ながら、そのすざましさをしのばせる。そして、その後、現代の経済センターの裏へ大きな穴を掘って、焼死した多くの人々を葬り、大きな築山として地蔵像をつくり、毎年追悼会が行われていると、この小冊ではじめて知った。和歌山市が空襲で焼かれてから先生は復興課長となり、戦災住宅建設を担当しているうちに、八月十五日の終戦を迎え、教学課長に転じ、翌二十一年十一月追放をうけ、二十五年住んだ和歌山市を後に、リュックサック一つを背に、文字どおり孤影悄然と上志賀の自宅にたどりつく。「内原駅へ着いて家へ近づくと頭の中は鉛をとかしたように重かった」と述べられているが、それは私にも充分同感される。

家では三人の子供と妻がかどで稲こきをやっていた。

「オイ、追放になったゾ」といって入って行くと、三人の子供は尻もちをついたのを傍観したように、「お父さん、追放かい、アハハ…」と笑った。妻は「それもまあ宜しいわ。長いこと御苦労であつたの、それでまあ一ぶくしなされ。子供らもこのように元気だから心配しなされるな」

といった。頭の鉛はとけたように思った。

先生の頭の鉛はもちろんとけたが、読んでいる私もこの明るい数行でホッと一息ついた。

公職追放後の先生は、二人の娘さんの結婚をひかえて、じっとしている訳にゆかず、慣れない武士の商法で、当時流行の闇屋をはじめたが、先生のお人柄からしてもとうまくゆく筈はなく、ようやく教材・教具を販売する紀陽文化堂を和歌山に設けて、事業はようやく軌道にのったかにみえたが、それも使用人の使いこみがもとで一時、破産

に追いこまれた。しかしそれでもどうやら切りぬけることができた。

この間も先生の頭から一時もはなれなかったのは和歌山県の教育で、昭和四十年^(一九六五年)には県教育懇談会の発会にこぎつけ、やがて本紙に二年近く「戦前戦後の教育」を連載し、後これを根本から書き改めて日本教育出版KKから、「教育に生きる」と題して刊行された。昭和四十三年、先生の教育に対する熱意がおおくの人に認められて県教育委員に就任されたが、その栄職も先生の言葉を借りれば「もう年輩であると思ったので、もっと若い人に代わってもらった方がよいと思い」あっさり一期四年で辞任し、「もう仕事もせず内でぶらぶらしている」といわれるように、悠々自適の羨ましい毎日をおくられている。

私は「八十年間の思い出」を拝読して、八十歳の御高齢とは到底想えない程の行文のみずみずしさに感動を久しくしたことであった。先生のご自愛を切にお祈りしてやまない。

交通雑話

自転車旅行

「交通と公害」昭和五十二年四月二十日掲載

一戸にほとんど一台といってもよいほど、乗用車が普及した今も、その手軽さと便利さで、自転車の愛用はかわっていないばかりでなく、戦後は体育的な意味からサイクリング用として、少年たちの間で新しく見なおされている。最近わたしは調べたいことがあって、川辺町会議員森口弥四郎氏^(一九五五年)所蔵の公民官報「にゆう」を借覧した。「にゆう」はその紙名のとおり川辺公民館丹生分館の機関紙として、昭和三十年七月一日創刊号を発行したものであるが、その三十一年三月発行の第九号に、江川青年学級の生徒ら九名が同年一月に、自転車を連ねて川辺町江川から新宮市まで、約二〇〇^{五〇}里を走破した記事がある。

もちろん其のころは道路はせまい上に舗装されていない凸凹道であった。一行は大体午前五時半ごろに江川小学校を出発したらしい。冷たい日で自転車は霜柱を砕きながら一路南下し、印南町切目にさしかかって、やっと東の空が明るくなったとある。南部町でようやく学校へ急ぐ児童に会い、田辺市を九時頃に通過し、富田まで一気に走った。青年ばかりなので全員なかなか元気であった。

しかし富田川を渡って間もなく急な坂道にかかり、一同は初めて自転車を降りて押した。峠で休憩してここで皆オーバーをぬいで軽装となった。椿温泉をすぎてまた急坂となり、一行はだいたいぶん疲れてきたので峠で昼食をとったが、休憩二〇分で再び自転車を踏んだ。ここから日置町まで二時間余を要したが、この間人に逢うたのは二、三人、トラ

ツク二、三台とあって、現在とは大きな相違がある。日置の大橋を「八ツすぎ渡る」とあるから、午後三時過ぎでもあろうか。

ようやく先頭の者が潮の岬灯台が見えると伝えてきた。なるほど遙か彼方に米粒ほどの灯台が見えるが附近の人に距離を尋ねると、まだ九里ばかりあると返事で驚く。日が暮れてやっと串本町に入った。これではたして新宮まで行けるだろうかと問題になったが、ともかく行ける所まで行こうと、冬の夜道を自転車を走らせる。ここから勝浦まで十余里というが、道は案外平坦で午後九時まえ勝浦を通過。勝浦から新宮まで五里、江川小学校を出発してから一七時間、道程五〇里と投稿者が記しているから、逆算すると全員が新宮の旅館についたのは、午後十時半ごろの計算になる。それにしても血氣盛りの青年たちとは云え、よくぞ頑張ったものと全く敬服のほかはない。

当時、川辺町丹生地区の青年間に自転車旅行の風があったとみえ、公民館報「にゅう」紙によると、翌三二年五月八日には山野青年学級の一〇名が、午前四時ごろ山野を出発して、同日午後五時五〇分・大阪天王寺駅に着いているし、三四年五月十四・五日の両日にわたって、市川青年学級の一二名が龍神温泉へ、やはり自転車で一泊二日の旅行をしている。今なら直ぐ自家用車であるが、わずか二〇年程の間に世の中も変わったものである。

辞典によせて

「紀州新聞」昭和五十二年四月二十二日掲載

きびしかった冬が終わったのは、ついこの間のような気がするのに、もう各学校では新学期がはじまって、かれこれ半月になる。たまたま外出すると、文字どおり希望に胸をふくらませ、新しい制服を少し窮屈そうに着た、明るい顔の小中学校や高等学校に入学したばかりの、一年生の姿をよくみかける。みんな元気いっぱい、若鮎のような新鮮さである。

思えば私にもこのような時があった。子供の時分からよく病気をした私は、いじけた一年生であつただろうが、大正二年（一九一三年）ごろまだ田舎の友達の間で、めずらしかった布製の鞆も、小さな勉強机も買ってもらった。その古机はずつと後に近所の学童にゆずったが、その子も今は婚期を迎えた好青年に成長している。

小学校五年生ごろに小さな漢和辞典を買った。たしか大阪でも当時、数の少ない出版社・駿々堂の発行であつたと思う。簡単な字典であつたが小学生向きで利用しやすかつたので、卒業後もしばらく使用した。字典のことで売ったおぼえも捨てた記憶もないが、どこかえまぎれこんで、いまみ当たらないのが惜しい。

中学校（日高高等学校の前身）へ入学した時、国漢担当の佐々木寿雄教頭の奨めで、服部宇之吉・小柳司氣太共著、

富山房発行の「新訂・詳解漢和大字典」を買った。佐々木教頭は病弱な方であったというせいか、中学一年生の私には、ひどく老人に見えたが、本当はそれ程の御年令ではなかったらしい。独学で国漢の検定を受けて、中学校教諭の資格を得られたときいたが、先生の朗読は声が澄み抑揚に富んで美しく、国語の時間がたのしかった。

この時の漢和字典も、その後人にゆずったものの、何となくなつかしく戦後、同じものを買いなおしたものが机辺にあるが、現在はめったに使わない。

いま私が終始使用しているのは漢和字典では、宇和哲人・長沢年也編・三省堂発行の「補修・新撰漢和辞典」と、国語辞典では広く知られている新村出編の「広辞苑」である。「補修・新撰漢和辞典」は、まだ私が大阪に在任中の昭和十八年^{一九四三年}に、近鉄・阿倍野百貨店の書籍部で購入した。わが国の敗色がおおうべくもなく、物資は極度に不足していた。書籍の出版も無論きびしい統制下に置かれていた。市民はその日の食糧を確保するのが精いっぱいであったのに、どうしてこの辞書を求める気になったのか、もはや記憶は茫々たる歲月の彼方になった。

この辞典の奥書を調べると、昭和十八年三月五日補修百六十一版・七万部発行・承認文出・号八一三〇二一ア・定価三円三十銭・特別行為税相当額二十一銭・売価三円五十一銭と、強く戦時色を表しているが、戦時中の出版物としては、めずらしく紙質もよいし製本もしっかりしている。わずか総頁数千三百たらずの小冊で、収録語数は不明ながら、たいいていの場合はこの小辞典で十分間にあう。この辞典で分からは前出の富山房の漢和大辞典や、これも大阪に居たころ古本屋で求めた、大正十四年九月^{一九二五年}・北辰館発行・簡野道明著の「字源」という、古くさい辞書を持ち出し、それでも解決しない場合は諸橋轍次の「大漢和辞典」のご厄介になる。

「大漢和辞典」は周知のようにきわめて大部のもので、出版広告が新聞に出た折、わざわざ内容見本まで読んで、大いに心を動かしたが、下級サラリーマンであった私には手が出ず、ついに断念したのだが、幸い心やすい人が持っている、そこへ走り込むのである。

新学年がはじまったのを機会に、四月の新聞には数え切れぬほど多種多様の字典・辞書・事典の広告が目につくが、辞典にも使い易いのと勝手のよくないのがある。さきにあげた「新撰漢和辞典」など、私の持っているのは、もう三十数年も昔の戦時中のもので、したがって新仮名遣いや当用漢字から外れている上、もう三十余年も殆んど毎日のように、くりかえし使ってきたので、頁は手垢で汚れているのだが、妙にこの辞典が使い易く気に入っているため、いまに身邊をはなさずに愛用している。

国語辞典では以前は「広辞林」や「大言海」を使っていたが、「広辞苑」が出てからは、専ら「広辞苑」に頼っている。この辞典も使用者に甚だ便利にできており、収録語数約二十万語といわれるだけあって、さながら小百科事典のおもむきがある。ついでに云うと私は百科事典はあまり好きではない。あれは豪華な装幀をしているため、応接室の装飾

によいかも知れぬが、実際に使う段になると専門の事典とちがって、たいていは説明が中途半端で終わっている感じを免れないからである。ほかに岩波古語辞典も備えているが、これもめったに手にしないし、「大言海」にいたっては、ちよつと大冊すぎて書架に納めたまま、よくよくの時でないとなんと取出すことはない。

一時、私は「仏教大辞典」に、しきりにあこがれた時期があった。わが国の思想・文化・民俗の上にしめる仏教の影響は、ほかのなにものよりも大きく深いものがあり、仏教の概略でも心得ぬ事には、わが国の歴史を知ることがむづかしい。そこで私は辻善之助の「日本仏教史」全十巻を買いこんだが、これもまだろくろく目を通さぬうちにいたずらに年を重ねた。その上に「仏教辞典」を全巻揃えると相当な負担になる。

それに身辺だけでも未読の書がかなりに増えているし、いそがねばならぬ仕事をいくつか抱えている。これらの仕事をすっかり片つけて、若かりし日を回想しつつ、ゆつくりと肩のこらぬ小説や随想に沈潜する日が、はたしていつ訪れるであろうかと考えると、かつてはあれほど執心した「仏教大辞典」を購入したいという願いも、今は次第にうすくなってきた。

「私の履歴書」を書き終わって

「紀州新聞」昭和五十二年五月十一日掲載

岡 本 勇

「はじめに」の項に書いたように、藤田さんとの出会いから、よし書こうかと、いうことになり、浅学非才を顧みず書いた「私の履歴書」は意外と親戚・兄弟達は申すに及ばず、各方面の知人・畏友・教師時代の同僚・同期生から

「お前、ようマア、昔のこと詳しく書いたナア、関心するで、今迄、引揚げる迄随分苦労したんやナア」と言つて下さった。有難いことであります。

「父母の恵みも深き粉河寺 仏の誓ひ 頼母しの身や」

とは西国三十三番の第三番の札所、粉河寺の御詠歌であるが、自分を生んでくれたなき父母、兄上夫婦、亡き叔父、叔母の温かい御支援に対しての感謝の意味と、子供達に今迄生きてきた、そしていろんな想像もしなかった戦争に負けて外地から内地に引揚げてきて苦労を知らせるために、記憶がうすれない間に書いておこうと思ったからでした。

「何時迄もあると思うな親と金」

「何時迄も無いと思うな運と災難」

と世俗に言われています。

第一回が一月七日に貴紙に掲載された翌日、私と同名なる西町上の玉置勇さんから次のようなハガキを頂戴した。

拝啓、先生（御坊中で教師をしていたので今でも先生といわれて恐縮しています）の「私の履歴書」を昨夜から読ましていただいています。日経新聞の私の履歴書は毎朝読んでいますが、先生の文章は、それ以上の名文です。ので、毎日楽しみに期待しています。中略

とに角、先生の「私の履歴書はどれくらい続くのか知りませんが、紀州新聞を見る一つの最も大きな楽しみがふえました。ほんとうに有難いことです」後略。

註 玉置勇さんは私の交友の中で、博学で能弁で、人に親切にする人として尊敬しています。早速御礼の返事しておいた次第でした。

同級生の茶免の福原大助氏から「一度御坊へきたら店へ来い」と言いづけをうけたと近所の人から知らせてくれたので、御坊へ出た際立寄ったら、工務店におって「マア上がれヨ」と言つて奥の部屋に案内され、ホームコタツに入つて、いろいろと話をした。

あとで、一パイ御馳走になったりして、

私の記事を初めから切りとつて読んでいるのやと言われて恐縮した次第。

二月二十四日夜と日付を入れた、畏友清水長一郎氏から次のようなハガキをもらった。同氏は人も知る郷土史の大家で、いろいろと教えられることの多い博学の士である。

「すっかり御無沙汰いたしております。今年の寒さは格別で殆んど毎日家にばかり閉じこもっています。あなたとも久しくお会い致しませんが、用心している結果か、どうやらねこむようなこともありません。それに先月来、紀州新聞に連載している「私の履歴書」を毎日楽しみに、且興味深く読んでいますので丁度あなたにお会いしているような気持ちです。（今年になって、まだ会って一緒にコーヒーをのんで話をしたことがないためか）あなたも随分いろんな処で、いろんな経験をされていますね。今迄読んで中で、一番感動した点は、いつの場合でも、まっすぐに、正直に大道を歩んでこられたということです。（中略）、そのうち温かくなったらお逢い致します。後略」

以上のような親切なお便りをうけた。或る日、御坊から帰ってきたら、嫁が

「おじいチャン、監督署の石川さんという人知っているかい、電話かゝってきて、もと会議所におられた岡本さんたちちがうかと言われたので、ハイそうですと返事しておいたが」という。

「ウン、知っている。会議所におったとき、仕事の関係で大変お世話になった人や」

何だろ今頃電話をくれるとは、何か要件言わなかったかと聞いたが、何も言わなかった由にて、翌日久しぶりに

電話したら、「久しぶりです。御元氣ですか、紀州新聞に「私の履歴書」を書いておられるのは、多分あなただろうな」と思って昨夜電話したのだったが留守でした。随分と詳しくいろいろと書いておられるので、毎日楽しみにして読んでいる」とのこと。同署の尾崎さんにもお世話になっていたので、尾崎さんも御元氣でしょうかと尋ねたら、あなたの履歴書を読んで一人だとのこと、誠に恐縮し、有難いことだと思った。

高津尾に居を構えておられる元船津小時代の同僚佐々木平子先生から夜電話がかかり、船小時代の思い出や、船小時代のことも書くのかいとのこと故、アー書くよと返事しておいた。

紀陽銀行御坊支店で、御坊市会議員の坂口三次さん（会議所時代からお心易く願っている）にお会いしたら、「ヨー、あなたの私の履歴書読んでヨ、仲々面白いヨ」の話して下さった。

長い／＼交際の糸川自転車店の親爺さん、かき留の小鷹狩さん、老人大学校芸能部の同期生の皆さん、その他大勢の皆さんが読んで下さったことを身をもって体験したので紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

尚、事前に御了解を得ずして、御芳名を拝借して掲載してもらった各位には何卒御寛容願います。最後に貴社の方々には判りにくい字を書いたにも拘わらず長い間連載して下さいましたことを御礼申し上げます。

以上

交通雑談

オートバイ私談

「交通と公害」 昭和五十二年五月二十日掲載

機械にうとい筆者は、今なおオートバイ・原動機付自転車・カブ等の区別が分からず、足で踏まずに動く二輪車は、すべてオートバイであると思ひこんでいる次第で、オートバイについて語る資格はないのだが、御坊附近でのオートバイの歴史を、ちよつとふりかえってみる。

さて御坊市をはじめ附近村の、オートバイ普及の経緯を知る資料はないかと、いろんな地方誌類の頁をくつてみたが、これらにふれたものは意外に少なく、ようやく昭和^{一九五四年}三十五年^{一九五五年}二月一日発行の「矢田村誌」に、

自動自転車（單車）昭和^{一九五四年}二十九年末までは十四台であるが、今後は急に増加しそうである。昭和^{一九三〇・三一年}五・六年頃当時

矢田村収入役であった伊奈久勇氏が乗りだしたのを初めとする。然しこれは一年位でやめたようだ。次いで昭和二十四年頃、森良視医師が往診用に使い初めた。その前後から日高地方でも流行しはじめ、その軽快さとスピード性を買われ愛用者が増えつつある。

と簡単な記述があるのが目についた。また昭和三十八年一月三日発行の「上南部誌」には、昭和三十七年三月三十一日現在の、旧南部川地区における「原動機付自転車Ⅱ二八八台」の記載があり、昭和四十三年十二月八日発行の「山野区誌」に、オートバイⅡ五十四台をあげているし、オートバイの山野区に入った年代を、昭和廿八・九年ごろとしている。もちろん地区の広狭・地形・人口等の関係によって相違はあろうが、矢田地区の昭和廿九年末台数十四台から、上南部誌の昭和三十七年三月末の二八八台、わずか数年間に爆発的な増加をみせていることを物語る。

ところで、私のおぼろ気な記憶によると、大正十二・三年^{一九二三・二四年}ごろ御坊市横町に武内伝吉という医者、いわゆるハイカラな趣味の豊かな方で、当時まだ一般に行き渡っていなかったカメラに力を入れ、御坊とその周辺の医師を中心にカメラの同好者と呼びかけて、アマチュアくらぶをもじって甘茶くらぶという会をつくつたりした。その武内医師が往診用の大型のオートバイが乗用された初めてでないかと思う。

続いて御坊市新町で、これも医師として活躍されていた塩路武雄氏が、大型オートバイを乗用されていた。当時わたしは塩路医院で薬局の手伝いをしていたが、ある早朝、和田方面へオートバイで往診にゆかれ、転倒されて大怪我をされた。走行中に軽い脳貧血を起こされたのが原因らしいが、幸い負傷は全快して、もと通り開業の上、ながく新町の塩路さんと町の人々から信頼された。

こうしてみると、当時オートバイは相当高価なもので、まず村の高級職員である収入役や医師等、所得の多い人から使用され、次第に普及して今日にいたつたことがわかる。

かつて矢田村誌があげた昭和廿九年末から廿余年、今郡市内にはどれ位の数のオートバイがあるだろうか。それはちよつと筆者には推定できない。きびしかった冬も終わって、オートバイを走らせるのに快適な季節がきた。しかし他人に迷惑をかける騒音をまきちらす危険な、暴走族まがいの行為は、お互いに慎みたいし、当局の厳重な取締りを願いたい。

院の庄と高野神社

「紀州新聞」昭和五十二年五月二十二日掲載

昨年は一月早々から風邪をこじらかして、六月までぶらぶらした上、身边にいろんな事があって、文化財研究会の方もすっかり御無沙汰を重ねたが、今月一日と二日久しぶりで、県文化財研究会御坊支部主催の「美作・吉備路の文化財めぐり」に参加した。

五月一日は文字どおり爽やかな五月晴れだった。予定の午前七時御坊を出発した。私の前の席は北出病院の大橋さ

んと芝口早苗さん、後ろの席は寒川万七氏。向いには比井若一王子神社の平井さんご夫妻と、何れも親しい人々であった。

九時五十分、早くも車は阪神高速道路にはいり十時十五分には、中国縦貫自動車道路に乗った。この道路はその名称のとおり、中国地方の背景に当たる中国山脈の間を縦貫しているのだが窓外を流れる風景は山また山で、そう高い山はなく、どの山も滴るばかりの新緑にかがやき、所々に咲おくれた桐の花や藤の花が姿をみせ、小さな部落がその合間合間に点在する。車中で一行中の西瀬市郎氏が昨夜つくったという草餅を、全員に贈られて一同をよろこばした。

零時十分、院の庄についた。戦前の小学教育を受けた人々には、「桜の幹に十字の詩……」の歌で懐かしい所である。元弘二年（一二三二）後醍醐天皇が北条高時のため隠岐へ遠流される途次、帝を奪還しようと企てた児島高德が志成らず、天皇の御跡を慕うてこの地に来て、夜陰にまぎれて御座所近くの桜の大樹の幹を削り

天莫空勾踐時非^{はんれい}無范蠡

の詩を残した遺蹟で、私たちも小学生時代、修身であったか国語であったかの教科書に、簑笠姿の高徳が折柄の雨の中で提灯の灯を頼りに、桜の幹に前掲の詩を書きつけている挿絵の出ていたのが、今もありありと臉にうかぶ。

ところが明治以来の史家の間では高德の名のみえるのは、太平記巻第四と同巻第十六等に限られていることから、はたして実在の人物かどうか問題とされるに至った。然し近年この地方の研究家が、高德の名こそ見当たらぬが児島一族に関する古文書を発見している処から、やはり児島高德は架空の人物でないとする説が、次第に有力化しつつあるとは、同行の森彬先生の説明であった。

もともと院の庄は、今こそ其の繁栄を隣りの津山市にゆずって、ひっそりと歴史の中に埋もれたような静かなたらずまいをみせているが、近世初頭まで美作（みまさか）の国の政治・経済の中心地で、現に遺跡として指定されている地域は鎌倉時代の守護職の館跡で、現在では形も変わり規模も小さくなっているものの、それでも土器の一部などがみられた。敷地は一辺約百間（二八〇^坪）のほぼ方形で、そこには後醍醐天皇と児島高德を祭神とした作樂神社があり、館跡の木立の陰で土地の人々が過ぎゆく春を惜しんでいた。

さて「院の庄」とよぶのは荘園時代、いずれかの院の荘園であったことによることはいうまでもないが、それが何院の荘園であったかは専門学者の間でもわかっていないらしい。館跡の近くには条里制の遺構が残っているが、ここは付近を流れる吉井川流域有数の穀倉地帯である。今も昔も豊沃な土地で、人々の貴重な財産であった。古来数え切れぬほどの戦乱は殆んどが土地をめぐる紛争であった。最近、一所懸命を一生懸命と書く人をよくみかけるが、それは誤りで漢和字典には、ちゃんと一所懸命と正しい文字が示されている。それ程、土地は大切なものであった。院の庄もきつとその持ち主の某の院の大きな財源であった筈である。それが今はその荘園主の院の名さえ伝わっていない。な

がい歴史の流れの中で人間の存在が、如何に小さく空しいものであるかが考えさせる。

次いで美作二ノ宮・高野神社に参拝した。この神社の由緒は私は全く知らない。けれども私が今度のこの旅行に参加した理由の一つは、この高野神社に参詣することにあつた。というのとはもと当社・隋神門の両脇に安置されていた神像が、先年修理された際、その胎内（胸腹部の裏）に応保二年（一一六二）二月の墨書きが発見された。これはこれまで見られたわが国の神像名のうち最古のもので、今は二神像とも神社の宝物庫に安置されているときいたからである。断るまでもなく神々は古くからわが国に祀られていた。しかし其の多くは神像を伴わなかつた。神像が造像されるようになったのは仏教が渡来して寺院に仏像がまつられてからのことである。しかも仏像は特別の秘仏の外は誰でも拝まれるが、神像はどこの神社でも神殿の奥深く奉祀されて、めつたに人々の目にふれることはない。俗な言葉であるが「隠す程ききたく見たくない」のは人情で、私はここ十年ばかり前から御神体に異状な程ひかれてきた。そのため私は昭和四十九年十一月七日には、わざわざ京都国立博物館まで出かけて、折から開催中の「神々の美術展」をみた。また郡内でも県指定の神像や公開されている神像はすべて拝んでいる。この三月末にも木曽路を旅行した際、はからずも其の第二日目に木曽福島郷土館で、めずらしい山の神木像に接した。それは丈け五十^サばかりで二人の男女を両手に持った像であつたが、勿論そう古いものではなかつた。

それにくらべると高野神社のものは八百余年も昔の作で阿形・吽形にわかれ、一部欠損はあるが桧の寄木造りで阿形像は一^サ七七・吽形像は一^サ七八の立像で、私の心を十分満足させた。共に国の重要文化財である。

郷土が生んだ歌人

江戸時代の物部有嗣

「紀州新聞」昭和五十二年六月九日掲載

由良町白崎の景観を詠んだ長歌

郷土が生んだ江戸時代の優れた歌人であり国学者である物部有嗣が、巨大な石灰岩の白と紺碧の海が素晴らしいコントラストを見せ、景勝を誇り県立自然公園に指定されている由良町白崎海岸を詠んだ「白崎」と題する長歌が、このほど川辺町小熊、郷土史家、清水長一郎氏により発見された。清水氏は、某古書店の店頭の反古の中に埋もれていたものを見つけ出し、これは貴重なものと胸をおどらせながら購入した。これを表具の上家宝として大切に所蔵したい―と話している。

〈白崎〉足曳の山辺の畑に里に種まきおふし、い刈り来て糸にうむなるあさもよし、この木の国に浪よする磯はおほけど天伝ふ、日高の浦に古へゆ、今もかはらず常磐なす、まさきくてある白崎を見まく欲りして、由良の海の浜ひを船出して漕ぎたみ行けば浜ひには、網引すらしも海士人のあこよびどよむ山見れば霞きらへり、洋中に多にあり立つ八十島は己がさまざまその姿成してはあれど、み雪なすこの白崎を白拷の白き巖の御崎なす長く差し出て剣なす神々しく立てり龍のごと繙り居り、ここかしこ地蔵なせるも行の馬の頸と見ゆるも、各自なれる巖は言の葉に言はむすべなく打見れば奇しき岩ぞ、ここもへばうしはきまして海原をしらす御神の御所かもいともあやしき岩ぞこれの白崎。

清水氏の解説並びに詳解紀伊郷土文献拾遺（井上豊太郎撰・昭和十二年二月発行）等によると――白崎の歌は紀州藩の国学者本居大平が編集した「八十浦の玉集」に掲載されているもので、かつて大和田建樹が其の某著「作文宝典」に引用されて、長歌の模範とされた程の非常な名吟である。物部有嗣は御坊市藤井、塩路源三医院の遠祖に当たる。

また「八十浦の玉集」は全部で六巻の和歌集で、本居大平の（宣長の子）の撰したもので上巻本二冊・中巻本二冊・下巻本二冊の計六冊で、上巻には加茂真淵以下当時の有名な歌人を網羅し、中巻は本居宣長以下大平の先輩または友人の作を収集し、下巻には大平の門人達の詠歌を集めている。上巻は天保四年（一八三三）六月発行、中巻は天保六年（一八三五）十一月発行、下巻は天保七年（一八三六）六月に発行され、有嗣のこの歌は下巻後編にある。

〈物部有嗣略伝〉物部有嗣は塩路有嗣であり一名を貢と言い、渾名は成章、通称を周造と言う。天明八年（二七八八）藤井で生まれた。医師および薬種販売を業とし、古典を好み、はやく本居大平の門に入って精励勉強に並々でなく深く師の大平に愛された。当時本居家所蔵の転籍は殆んど読破し、そのうえこれを写本して所蔵するを例とし、その数は数百冊にのぼった。文政十二年（一八二七）八月、享年四十三才で没し、門人らは碑を船岡山の塩路家の墓地に建てた。著書に「古事記伝略解三巻」があると言うが今伝わらない。それに有嗣が手写した数百巻の書は、明治二十二年（一八九九年）の水害に流水して今は残っていない。南部の熊代繁里共に近代の日高郡の国学者である。

大和田建樹は、明治の国文学者・歌人、愛媛県宇和島の人。高等師範学校教諭、新詩・唱歌・歌謡にすぐれた。「汽笛一声新橋を……」の鉄道唱歌の作者でもある。

交通雑談

不幸な従兄弟のこと

「交通と公害」昭和五十二年六月二十日掲載

田辺市を起点に龍神温泉まで往復する龍神自動車株式会社の前身、龍神自動車商會が設立されたのは、「続・日高郡誌」によると、昭和二年九月十七日のことで本社を南部町に置き、社長には小川政次郎氏が就任したとある。

何しろ当時は道路の状況がきわめて悪く、六人乗りの小型乗用自動車であったが、それさえ通りにくい箇所が多く、小川氏は少なからぬ私財を投じて改修し、はじめのうちは温泉場よりも、だいぶん下手の広井原までやつとバスを通じることができた。

このように小川氏が苦心の末、ようやくバスの運行が緒についた折から、不幸なことにバスが転落して、全員が死傷するという大きな交通事故をおこした。小川氏はふかい衝撃をうけ一時は、この事業の中止さえ考えたが、ふだんから帰依している南部川出身の高徳で、浄土宗西山光明寺派の管長・関本諦承師から、自動車交通事業の公共性を説かれ、万難を排して継続するよう激励の上、若干の資金援助さえうけ、小川氏もこれに力を得て刻苦経営、今日の基礎を築いた。

現代のように自動車が普及し、各路線にバスが走る時代では、自動車事故はほとんど毎日と云ってよいほど各地で発生しているが、当時としては、この事故は世間にとっても大きなショックであった。しかし此の事故が昭和何年のいつであったかについては「続・日高郡誌」も単に、山路郷における交通事故とあるだけで記されていない。それにもかかわらず私かこの事故を忘れられないのは、私の従兄弟がこの時に事故死しているからである。

私事で恐縮するが私の母の妹にあたる人は非常な美人であった。その人は娘時代其の美貌を買われて、龍神温泉の「かじや旅館」に嫁いだが、大正七年の流行性感冒で三人の幼児を残して急逝し、御主人はそれか動機で田辺市へ居を移した。しかし多少の不動産を龍神村に遺していたため、しばしば田辺・龍神間を往来し、子供たちも夏期にはよく龍神へ避暑に行った。龍神バスが山路郷で転落したとき、折あしく龍神から田辺へ帰る途中の、一番の末っ子が乗り合わせていて災難にあった。まだ六つか七つであった筈で、この幼くして散った不幸な従兄弟のことが今も忘れがたいのである。恐らく日高地方の大きな自動車事故として最初のものではないかと思う。

麦秋

「紀州新聞」昭和五十二年六月二十二日掲載

俳句に麦秋という季語がある。五月末から六月初めにかけての麦の収穫期のことです。麦の秋ともいう。もう陽の輝きは夏を思わせるほど強く、梅雨を目にかにして、どの農家も麦の取り入れで息をつく間もない日が続いた。

その頃の農村は蔬菜の栽培が少なく、稲作の裏作には殆んど麦を作っていた。農村で育ったものの一枚の田畑もなかった私の家は、周囲の麦刈りや麦扱きにはかわりもなく、子供の私は長い麦秋の日を麦畑や、大人達が脱穀に汗を流している農家の庭で遊んだり、女郎蜘蛛を求めて溝の岸や山裾を歩きまわった。山野の緑が日毎に深まり、若葉の香りがむんむんし、夕暮れにはあちこちで麦がらを焼く淡い煙が低く流れていた。

昔から日本人は花といえど桜を、季節では春秋を愛してきたが、私は麦秋の頃が一番好きである。すでに季節は初夏に移っているのだから、まだ暑さは真夏ほどではなく、何よりも草木の一日と生い繁る逞しさは、私のような者にさえ、生きる歓びを覚えさせる。

しかし日本の農村から青々とのびた麦や麦がらを焼く牧歌的な風景が消えてから、もうかなり久しい。恐らく手数のかかる割にみ入りの少ない麦作りから、より収益の高い蔬菜栽培に移行したのであるが、それは昭和何年ごろかとなると、田や畑に囲まれながら其の記憶はさだかでない。ようやく机辺の矢田村誌を開くと、昭和二十八年^{一九五三年}度に矢田村で小麦二九〇石・裸麦八五〇石・同二十九年^{一九五四年}度で小麦二九八石・裸麦一、五一八石・同三十年^{一九五五年}度で小麦三四〇石・裸麦一、一〇六石を生産したとある。したがって田園から麦が姿を消し、俳句歳時記にのみ麦秋の季語を留めるに至ったのは、昭和三十年代も後半以降のことだ、たかだか十数年の方であると考えられる。

麦秋に心を惹かれるのはあながち私だけではないようで、かつて御坊市で産婦人科をしておられた藺悌次郎医伯もこの季節を愛され、俳号を麦秀子と称された。医伯は風雅の士で、書画にくわしく御坊時代には紀州関係の書画を多く集められていた。

私は昭和三十二・三年ごろ書画帖を買い入れて、日ごろ親炙している先輩方に、一筆ずつ揮毫をお願いしてまわったが、藺医伯はその中に

二、三軒順に往診花菜みち 麦秀子

の一句を、さらりと認められている。医伯は当時御坊にあった南紀郷土学会の会員であつたし、時々お宅へお伺いして愛蔵の書画を拝見したりして清談を承ったりしたものであつたが、今春余生を過ごしておられた茨木市で長逝された。

私がこの書画帖を思いたつて先ずお訪ねしたのは井上豊太郎先生であつたが、先生は私の企てをひどくよろこばれ自らこれを「春林帖」と名づけられ、其の第一枚目に

叙所思

呈清水長一郎君

春林鳴鳥百花開

常識煙霞嶺谷堆

樂有先人未踏処

宣成博訪築雲台

維持昭和三十三年春日

南紀 樂天莊主人

と激励の一詩と余白に淡彩で山水画が描かれているが、不肖の私はいまだ先生の御期待に答え得ない。続いて芝口常楠先生が、お人柄そのままの謹厳な隸書で

守分安命 順時聴天

昭和戊春 葵羊山人書

と記され、またその何枚目にか

昭和三十三年初夏

九十一翁 田端昌平

として数輪の夏菊図が描かれている。翁は旧制中学校在学中から日本画に親しまれ、後年も家業の余暇に絵筆を執られ、特に花鳥に勝れ、春林帖の菊花図もとうてい九十翁の筆とは思えぬ秀作である。

この春林帖には併せて十七名の方々が書画を寄せられているが、そのうち故人のもののみを拾うと、道高きこと一尺 魔の高きこと一丈

昭和三十三年五月

田端 憲之助

温故知新

昭和三十三年初夏

高尾 英吉

聞思修

城

城は御坊市天性寺の先住・津本鉄城師である。さらに

読衿陽雜録

既耕亦已種

時還読我書

借陶潜之句以充

清水君債

昭和戊戌夏日 源 隆三

源隆三は片山隆三氏である。

本坊に寄らで お滝へ露涼し 西村 蓬秋

蓬秋はかつて本紙に日曜随想を執筆されていたホトトギス派の俳人である。

莫春之服既成冠者五六

人童子六七人浴乎沂風

乎舞詠而歸 西川平吉

高尾英吉氏の温故知新も西川先生の話も、共に論語から撰ばれたものであることは断るまでもない。

いも粥や神に仕えてあたたかき

朝刊の鈴黄落の光より

昭和戊戌春

七七翁 生々 堅田三千穂

堅田翁は長く御坊市で発行された紀南新聞の主筆を勤められ、晩年は郷里南部町鹿島神社の神官となり俳句に遊ばれた。

もう一つ「運氣山形濯俗腸」の讃をした興国寺の先の興国寺の老師古川華凌師の淡彩の山水図がある。古川師は南画をよくされただけあって、小品ながら高雅の気が画帳に溢れている。

いつもの癖で麦秀があらぬ方向へそれたが、朝から降り続く雨の一日、春林帖をひらいて今は亡き人々の筆の跡を眺めていると、これらの先輩と過ごした日のことがあれこれと浮かんだり消えたりして、二十年の歳月が長いようでもあり短かったような気もする。

死後見直される衆議院の名物男

田 淵 豊 吉

哲人政治家の評価も

「毎日新聞」昭和五十二年六月十四日掲載

「金はできとるか?」。いざ総選挙、で帰郷するといつもこうだ。「こんな代議士があるかいな」と思わない訳ではない。だが支持者は「これが先生のいいところだよ」と、自分たちの金と労力奉仕で走り回る。「金権能力」ゼロ。歳費さえ好きな酒と本代に使い果たす田淵を、議会壇上に送り続けたのは、これら熱狂的な「田淵宗信者」だった。

八方破れの人間味

若い信者の一人だった古久保茂春氏(61)〓御坊市、理髪業〓は回想している。「自分ではタバコ錢も持つとらん人だった。自分に金がなくても選挙は出来ると思っていた。金銭にはまったく無欲で、八方破れの人だったが、そこに魅力があつて私らは手弁当で走り、財産減らした人もいた」

「田淵宗」といわれ多くの「信者」を生んだ魅力は、何よりも国会議場での縦横無尽の活躍だった。無所属の「一匹狼」として、得意の演説とやじで、政府や政党を痛烈にやつつけ、「衆議院の名物男」の名をほしいままにした。「演説は、ほとんど原稿なし。型破りで天衣無縫。聴衆はみな酔った」。豊吉の演説を何度も聴いた郷土史家、清水長一郎氏(66)〓川辺町〓は、あれだけの名演説のできる政治家は、以後現れていないという。

ストライキで退校

「私のこの言は、私が死んでもなお速記録が焼けねば、後世に伝わるから、この内閣にだけ言うのではない」。昭和十一年、二・一六事件直後の議会で、孤立無援の中で政府を攻撃する豊吉はいつている。彼は確かにまれにみる名演説家だったが、「言葉だけの演説家」ではない。終生貫いた反骨は、日本の将来への最も鋭い予見に満ち、常に真理をあらそう姿勢から生じていた。

豊吉は明治十五年、日高郡御坊村(現御坊市)で、素封家の四男に生まれた。和歌山中から田辺中に転校。ここで校長排斥ストライキの首謀者になって退学処分を受け、早稲田の予科から政経科に進んだ。老侯とよばれた大隈重信(早大創立者)の邸にはよく出入りし「政治家になるにはまず第一に歴史を勉強せねばいかん」と教えられている。当時の雄弁家には永井柳太朗・中野正剛がいて、雄弁と反骨精神を養った。卒業の翌四十三年、ドイツへ留学。ベルリン・ライプチヒ・ミュンヘン各大学で、政治経済学と哲学を勉強、欧州各国を遊歴して五年後に帰国。

初当選で早くも勇名

大正九年の総選挙で初当選。いきなり普選案の賛成演説に立ち、その名は全国に喧伝された。もともとこれは「田淵ブシ」のサエのためばかりとはいえない。日程では二日前に登壇の予定だったが、その番が回つて来ず、この日も「番が回りそうもないとあつてヤケ酒を引っかけすぎ(当時の新聞)」異色の演説になりすぎたせいもある。その後も

豊吉は、「田淵仙人」・「奇人」・「例の愛嬌者、田淵君」などと新聞の政治欄をにぎわし続ける。

痛烈な政治攻撃

豊吉が単なる「仙人」や「奇人」でなかったことは、彼が批判し続けた帝国日本の政治がたどった「昭和史」が証明している。議会に残る数多い演説の中で、とくに歴史的意義の高いのは、関東大震災時の朝鮮人虐殺事件追及と、昭和四年行った張作霖爆殺事件暴露の演説。

虐殺事件では、政府が完全に口をつぐみ、新聞報道も禁じたことに「千人以上の人が殺された大事件を不問にしていいのか、朝鮮人だからよいと考えているのか。まず朝鮮人に謝し、各国へ謝意を表さねばならない」と激しく攻撃した。

張作霖爆殺事件は、戦後にいたるまで「満州某重大事件」として国民に真相を隠したばかりでなく、軍部による大陸侵略が手段を選ばない破滅の道に踏み込み始めた歴史的な事件であった。豊吉は「何か奥がある。日本の軍人とか日本の要路の人がこの張作霖を殺して、日本帝国が満州で相当の権利を取らんがためにやったことであるならば、総理大臣は一国に謝し、世界に謝さねばならん」と迫った。

奇人の真価いまに

当時これだけのことをいい切った政治家はいないが、無所属の奇人の演説として議会も新聞も無視している。太平洋戦争戦争に血迷った東条首相が行った翼賛選挙に非推薦で落選。翌昭和十八年六十一歳で「窮死」した。

権勢に聞いて真理を追い求めた「哲人政治家」の評価は、最近になるまで正当に行われることはなかった。しかし、家業をほうり出して駆け回り、資金を出し合って豊吉を当選させた信者たちは、「田淵仙人」の真価をハダで知っていたのではないだろうか。

歌集「花葵」によせて

「紀州新聞」昭和五十二年七月二十二日掲載

六月十八日午後一時を少しすぎて紀州信用金庫本店四階の大ホールで、田淵文子夫人の歌集「花葵」の出版記念会が催された。もう梅雨にはいって、毎日うつとうしい空模様が続いていたが、さいわいこの日は雨もやんで、ときどき雲の切れ間から青空がのぞまれた。私が四階のエレベーターを降りると、すでに会場にはおおぜいの出席者がそろっていた。

やがて記念会が予定のプログラムどおり進行しはじめた。

主催者の挨拶・来賓の祝辞・花束・記念品贈呈・著者の謝辞・と次第に会場は華やいだ空気につつまれ、時をおいて出席者の明るい拍手がおこった。

この中で来賓の山中のぼる御坊文協会長が、戦後まもなく山中氏が御坊消防団員の一人として田渕邸を訪ねた日、応対に出た文子夫人とのやりとりを、ユーモアたっぷりに語って会場に爆笑の渦がわきかえった。

また要海正夫氏が印南短歌会を代表して祝辞を述べた中で、歌集「花葵」中の一首、

白内障病む目をこらしこらしつつ
春まつ衣を縫はむとぞする

を集中の絶唱とたたえた。私は不器用なため、この年令になっても短歌も俳句を作る術を知らない。けれども人様の作った短歌や俳句を読むのはたのしい。したがってこの日も場違いの出版記念会場に顔を出したのだが、実は私も先日來、要海氏のあげたこの一首に強く心をうたれていたのである。要海氏の祝辞をききながら、そうすると私の短歌鑑賞眼も、まんざら捨てたものではないと、ひそかに自負したものであった。

ついでに中津芳太郎氏であったと思うが

旅なれば月見の月はさざなみの

志賀のみずうみ行きつつぞ見る

を激賞されたが、なるほどこの旅中詠もすばらしい。第一、歌の調べがすぐれている。美しく堂々たるものだ。つづいて寺西義一氏が

見はるかす伊嶋のあたり落つる陽が

うなさか遠く朱に染めつつ

を挙げられた。伊嶋はいうまでもなく日高浜からでも遠望できる、徳島県の伊嶋であるが、この中の「うさなか」について寺西先生は、たしか古事記上巻の「塞キテ海坂ヲ而返リ入タマヒ」をひいて深遠な解釈をされていたが、私はもっと単純に海の境、つまり海の果ての辺りを落日が朱にそめつつ暮れてゆくと解してよいのではないかと思うのだが、いかがなものであろうか。

ところで伊嶋を読んだ次の頁にある

郵便の音まちわぶるならわしも

幾とせとなる我老いづきし

の日常詠の一首は、集中で特に目だたない作であるためか、この記念会でも誰も言及した方はなかったが、私自身にもそんな癖があるせいか共感をおぼえる。私の郵便配達を待つ癖もひさしい。郵便がとどいたとて株式配当の通知も

原稿料がある訳ではない。せいぜい古書目録ぐらいなのだが、それがまた楽しい。近年は古書も新刊書も高くなった。目録で見てもとうてい年金生活者の私には手にしがたいのだが、目録を入念にみて手持ちのものには赤いボールペンで△印を、ほしいと思うものに○印をつけるだけで結構その日は愉快にすごせる。

会も次第に終わりに近づいたところ、田渕家一族を代表して田渕和男氏がたたれて、集中の二首を挙げられた中の一首に、

この線を敷にし父の形見なる

夾竹桃は駅舎覆ひぬ

がある。敷にし父は断るまでもなく作者の舅にあたられる、御坊臨港鉄道を創立した田渕栄次郎氏をさし、駅舎はその紀伊御坊駅のことである。この駅舎の夾竹桃は御坊市と、その周辺の人々になじみのふかいものである。もうあのたくましい花の咲くのもちかい。ひよっとすると既に咲いているかも知れぬと、ふと窓外に眼をうつしたことであった。

最後に私は首中の一首を掲げるとすると、

鬼ヶ城の岩打つ濤の激ちつつ

颱風はらむ灘に逆巻く

を推す。私は文子夫人とご一緒したことはないが、ときどき街でおみかけする夫人の、少し前かがみになって歩かれるお姿から想像して、田渕夫人のどこに、このように壮大な景観を 甞 われる気魄がかくれているのだろうか、今宵「花葵」を読みかえしつつ畏敬の念を深くした。――妄言多謝――

交通雑談

峠のはなし

「交通と公害」昭和五十二年七月二十日掲載

古い子守歌に

わしら若いとき 有田へ越えた

知らぬ鹿ヶ瀬 夜で越えた

というのがある。この子守歌は昔から日高と有田の両郡の間に立ちはだかる鹿ヶ瀬峠をうたったもので、日高以南の人々が上方へ行くのに、必ず越えねばならぬ最初の難所であった。峠は標高三八〇^米。南からのぼると日高町原田二

奥から坂路道一・一籽ばかり、有田側は広川町河の瀬へ二・三籽ほどある。

この峠が通じた時代は明らかでないが、今から千余年前に叡山の増基という法師が、鹿ヶ瀬峠で野宿をした時の和歌がのこっている。

その後、熊野信仰が盛になると、法皇や上皇や公卿たちが上下し、江戸時代には武士や町人が馬や籠や草鞋がけで峠越えをしたもので、今も古い石畳や茶屋の跡・道しるべや石仏などが、草木におおわれて、ひっそり睡っている。いわば当時の一級国道だったのである。

その後、日高町原谷奥と有田郡広川町寺杣奥とを結ぶ新道が計画されて、明治三十九年に全長八十二（一九〇六年）余の鹿ヶ瀬トンネルが貫通したものの、トンネルへの取付道路の工事が大幅におくれ、時代も明治・大正と移り、更に昭和元年に漸く完成し、自動車が走るようになった。

それからまた四十年ばかりたって昭和三十九年東京オリンピック開催にあたり、これを機会に和歌山市・白浜温泉間一〇七・七籽を二車線・全舗装計画がたてられ、昭和三十八年に国道改修状況を視察に来た河野建設相が、県の道路行政の遅れを指摘したため、時の小野真次和歌山県知事との間で、激論されたと伝えられている。

このようなエピソードをもつ国道四十二号線も、昭和三十四年四月二級国道から一級国道に昇格した時は、日高町原谷から有田郡寺杣まわりの、さきに述べた鹿ヶ瀬トンネルを通ったものであったが、昭和四十四年に現在の日高町池田から由良町經由・有田郡広川町へ抜ける新路線に改められた。

この新国道は昭和三十七年末三十億円の工費で着工し、昭和三十九年六月完工の予定であったが、水越トンネルで落盤やコンクリートのヒビ割れが生じて大幅におくれ、昭和四十四年によく全通した。なおこの間に北から水越（五〇（一九五〇））・里（一八〇（一九一八））・由良（三九〇（一九三九））の三トンネルがあり、このうち水越トンネルが日高地方の道路トンネル中、全長がもつとも長い。

交通雑談

トンネルの話

「交通と公害」昭和五十二年八月二十日掲載

あれは何年生のことであつたか、ともかく小学校の二年か三年生の時であつた。矢田小学校―現代の川辺西小学校の前身―の全児童がそろつて、池田から由良の阿戸へ通じる旧県道のトンネルを見学遠足をしたことがあつた。

もちろん全児童のほとんどは、トンネルなどを実地にみた者はなく、ある同級生のごときは、トンネルの大きさは

風呂桶ほどもあるのかと真面目に言うたのを記憶している。

まだゴム靴もズック靴をはいた児童はなかったし、みんな着物に草履がけであった。学校からトンネル―正式な名称は由良洞―までの道のりは、およそ六軒ぐらいであろうが、子供の足にはかなり遠かった。学校を出発して土生・鐘巻・富安・荊木・東光寺・池田と、細い野径を、がやがやわいわい云いながら歩いた。

今はこの道は廃道にちかい姿になっているが、ここに由良洞ができたのは、日高地方のトンネルの中でもっとも古く、続日高郡誌「交通運輸誌」に、明治二十一年に開通し全長一三八・四四とある。

昔から御坊附近の人々は由良方面の村々を指して、俗に西口とよんだものである。今は同じ日高郡であるが、古来この海岸筋の浦々は海部に属していたし、トンネルができるまで志賀や原谷から幾筋かの路があつたが、いずれも峠越しの山径で不便であつたため、自然に生まれた俗称かと思われる。

昭和三十八年九月二十四日、私はこの数多い峠路の一つである志賀から由良町阿戸に通じる、十七曲り峠を五・六人で登ったことがある。実はこの峠路に道祖神が祀られているときいて、それを調査するのが目的であつた。その日はおだやかな秋日和で、空はカッタグラスのように青く澄んでいた。狭い径の両側には秋草の花がこぼれるように咲いていた。近くのお婆さんが登るにつれて、雑木や熊笹におおわれた径を、鎌で伐りひらいて案内してくれた。峠の上からの眺めは素晴らしかったが、今ではすっかり草木に埋れて、もう峠越えはできないと、つい最近きいた。

このほかに原谷から由良越えの峠も二つ三つあるが、いずれも近年は通行できぬし、由良洞も今やここを通るほどの物ずきもなく、さらに国道四十二号線が開通してからは、すっかり荒廃し、世間からも忘れ去られようとしているのは、単なる懐古趣味ばかりでなく、ちよつと惜しい気がする。さしずめ日高町か由良町で、町の文化財に指定してもよいのではないかと思われる。

散りぬる人

藤田 武蔵君

「紀州新聞」昭和五十二年

八月二十七・三十・三十一日九月一日掲載

①

大正十一年四月開校されたばかりの県立日高中学校第一期生として入学した私は、生来の病弱のため欠席がおおく、ついに夏休み前に退学の上、また出身校の矢田尋常高等小学校にまいもどり、翌年同校高等科を卒業後、藤井の塩路

医院の厄介になって、昼間は使い走りや薬局の手伝いをしながら治療をうけ、夜間は当時藤田村尋常高等小学校校長であられた故平井栄太郎先生がお住まいの教員住宅へ通うて、国漢や数学・英語の教育をしていたのだ。

そのころ藤井に素封家の当主で教育に熱心な小池甚一郎翁が居られた。翁は広い住まい住宅の一部を改造して藤井郵便局を開設していた。私は塩路家の使いでよく藤井郵便局へ行つた。局には野口から通勤していた亀井という局長のほか二名ほどの若い事務員がいた。その一人が私よりも数歳の先輩に当たる土生の柳貞治氏であつたので、郵便局へ行く度にきまつて柳氏と無駄話をした。

ある日、例によって郵便局へ行くと一人の見知らぬ局員が仕事をしていた。この男は妙な男で、仕事のひまな時は小池家の蔵書をもつてきて読みふけている。何を読んでいるのかと此の間も覗くと、あいつ夏目漱石全集を読んでいたと、柳氏があきれ顔で私に語つたのをおぼえている。

この無口な青年が藤田武蔵君であつた。間もなく藤田君は郵便局をやめて戦前・日高地方で大きな勢力をしめていた紀南新聞社に移つた。子供のくせに小説本ずきであつた私は、自然郵便局時代の藤田君と話があつた。だから私と藤田武蔵君との出会いは、彼がしばらく居た藤井郵便局時代の大正十二年^(一九二三年)までさかのぼる。しかし藤田君が紀南新聞社へ勤めるようになってからは、少年のことであり二人の交友は中絶した。

②

再開というと少々大袈裟になるが、その後私は大阪に出たり藤田君は第二次世界戦争のため川西航空機に徴用され、さらに招集をうけて大陸から南方方面に転戦し、やがてわが国の敗戦で二人とも郷里の日高に帰ると、私は日本専売公社御坊出張所に勤め、そのうち地方史に興味をもちはじめた。

何しろ長い戦争の後で人心は荒廃し物資は極度に不足していた。私は幸いにも専売公社に入社し、安いながらも給料にありついたが、そのころ藤田君はどうしていたのか一向に思い出せない。私が戦後、彼に出会つた時は戸倉義彰・山崎円之助の両故人らと、何とかいう旬刊紙の発行に加わつてゐた。欲のない彼はその旬刊紙に小説を書いてゐたが、どうも経営者の一人というより、小遣金ぐらゐの宛か扶持しか貰つてゐなかつたように思われた。

しかも彼には老いた両親がいたのに、貧しい生活をも一向に気にした風もなく超然とかまえてゐた。そのうち彼は両故人らと別れて、昭和二十五年^(一九五〇年)、多田青史氏の日高新報社の記者となり、よそ目には其の生活もやや安定してきたし、取材の折によく専売公社にもみえた。専売公社の庁舎が旧御坊市役所の北に新しく建築移転してからは、藤田君は午前中にほとんど毎日やつてきた。

彼は、ぬつと這入つてくると、だまつて應接セットに腰をおろし相手に出た私と、二つ三つ話を交わして、また自

転車で次の取材先へ走った。彼は昔のように相変わらず無口で無愛想でさえあった。しかし妙に人を惹きつける何かあったし、私と不思議に気があった。

そのうち私は独身の彼に適当な夫人を世話したいと考えて、ひそかにあれこれ思案をめぐらしていた。そんな折からある日曜日の朝、彼は突然こんど家内を貰ったのと、夫人を自転車の荷物台に乗せて拙宅を訪れた。今のみえ未亡人である。私はひどく恐縮すると共に、正直なところアットおどろいた。

その後、昭和四十一年・藤田君は紀州新聞社に入社すると、彼のゆたかな才能はあたかも魚が水を得たように「余滴欄」に、或は「おがわ・わたる」のペンネームによる小説に、また随想や社会面などに奔るように才筆を揮うし、経済的にも恵まれて、彼の不愛想な顔も心なしか明るくなってきたように感じられた。

私の勤務先へも屢々みえたし、私も新聞社の彼を訪ねて、馬鹿ばなしをした。話が前後するが、私がいまも本紙におりおり稿をつづけている碑巡礼も、実はその発想者は彼であった。

昭和三十八年六月初旬、私は本紙社長の源地武夫氏に招かれたことがある。その席に藤田武蔵君が居て、酒盃の間にあの企画を語った。それが動機となつて、も早、延々六六〇回にかくに及んでいる。

そのほか藤田君と二人で中田宇南氏宅か小谷緑草君宅で御馳走になったこともある。彼は私の何倍も酒量があったが、いくら盃を重ねても私のように乱れることはなかった。相変わらずむつとりと酒を楽しんでいた姿が今もありありと目にうかぶ。

もう何年か前の正月に藤田・小谷両君と家でくすぶつていても仕方がない。歩きまわろうではないかと、毎年コースをえらんだのは山路や野径を歩いたが、この正月行事は数年つづいたような気がする。

昭和四十七年四月二十三日・御坊歩こう会は奈良市高島まで貸切バスで長駆し、そこから旧柳生街道を歩いたことがある。藤田君はそれまでも歩こう会に参加していたが、この時はめずらしく夫人同伴で顔を出していた。たしか有名な首切地藏尊あたりであったと思う。参加者全員がそれぞれ適当な場所をみて持参の弁当を開き小憩をした。このとき私は偶然、藤田君夫妻に隣り合わせて岩に腰を降ろし食事をしたが、食後、藤田君が私を写してくれた写真が残っている。

③

こんなことを書き並べていると切りがないからやめるが、このごろ藤田君が悪いらしいときいたのは昨年七月はじめごろであった。そして八月三十一日、彼は和歌山医大付属病院に入院した。入院前、私はすでにみえ夫人から彼の病気の容易でないことを知らされていた。私の手許に昨年十月十五日付けの彼が、和歌山医大付属病院発送の手紙

がある。

一日に数回鳴る和歌山城からの「マリと殿様」のチャイムの音も聞きなれてしまいました。食うて寝て手術の日を待つ、これをたとうれば屠殺者が包丁を研ぎながら豚を肥育している。その豚のようなもんだなと自己を眺めたりしています。田舎はいまマッシュケの季節、そこへ祭り太鼓の音が響く頃ですが、それは無縁の境遇の季節です。しかし悲観もしていません。

先日中津氏らが二階俊太郎氏の追想記を持つてきてくれ、無聊を慰められています。

サル腰かけはいろいろ考えた末、手術後の療養期間中に服用することに決めました。図書館の芝田契さんからもサルの腰かけをくれました。

俺がこんな病気になるなてケツタイクソわるいが、わが胸に問えば過去四十年、その原因を作っているのだから仕方ないと諦めています。充分ご自愛なさいますよう。近況ご報告かね御礼まで。

十月十五日

清水学兄

藤田生

中田宇南氏にはいろいろご相談したいことがあるのですが、それは療養中のことにしたいと思います。ご面接の機会があればよろしくお伝えおき下さい。

昨年は私も健康が勝れなかった上、身辺にいろいろな事件があつて、藤田君を見舞うことも思うに任せなかったが、それでも三・四回は病院を訪ねている。次に今年三月七日付けで

お手紙ありがとうございました。

入院以来何度もじきじきのお見舞に、更に幾回も貴筆を受けていながら、無音に過ぎてしまいました。あえて主義主張によるのではなく、しいて意味を申せば「早く退院してお礼を申し上げる」というわけで、どなたにもその方針でまいりました。

手術後の経過は良好で、入院後四ヶ月目の十二月末には退院できるところが、頸部に新しくグリグリが発生、この対策に一月・二月をほとんど空費したわけで、時間的にも残念だし落胆・焦躁・失望の入り交じった感情は、積極的な闘病心を失わせることに気づきました。「ぐずぐずしているとぐずぐずした人間になってしまう」ということです。三月末から四月中旬までに退院したい心組みでいます。それにしても、いささかの風動が意

外に影響することについては、大病後の余病併発となるらしく、自戒の必要を痛感しています。

春を待つ心。いい古した言葉が今は特に切実です。再び帰らぬ春を失った人間が、せめて季節の春を待つ。それもよし。暖かい日が来たらお城公園の樟の下へでも行ってみようかと考えたりしています。貴下も御自愛なさいますよう。

知己各位にはまだ御無音のままです、機会あらばよろしく御伝え下さい。

これは病院から彼の最後の便りで、彼は間もなく退院して自宅で静養することになった。

④

彼が帰宅してからは、ちよいちよい湊の宅を訪問した。予想以上に元気であった。実はそのころ病気は彼の深部で徐々に進行しつつあったのだが、素人の欲目ではひょっとすると、彼はもとのように新聞社のデスクに戻るのではないかと思うほどであった。

ところが七月にはいつの間もなくみえ夫人から主人の様子が思わしくないと電話があった。私は驚いて早速かけたが重いのはか元気であった。夫人は不在で藤田君自身、何か飲み物の用意にかろうとしたので、私は飲み物なら途中で飲んできたからいらないと断った。ちょうどそんなところへ見知らぬ見舞客がきたので私は、その人に席をゆずって帰った。

十七日は暑い中を御来訪下され、いろいろ拝聴というところへ野暮用の人が見えまことに遺憾のきわみでした。病院で夫を死なせた人で初めて来てくれたのです。

井上豊太郎氏が晩年に「なまはかじやくな生き方」とよく言っていたが、井上先生の気持ち昨今ようやく知る気もちです。「余命いくばく」の語も昨今は特に耳に立ちます。生きれば後悔することのみ多いでしょうか。

有田屋で古い日高新報を発見。私の連載小説があったと山本好一兄から来信。どんなものを書いてあるのやら。暑さの折から充分ご自愛下さい。案外コタえているものです。

第一次奥州戦争後、支那米のササゲ飯を食う家が多かった。自家でも食わしてくれんかなあと頻りに思った。何しろ暑い盆頃のことであつたと記憶しています。

十七日夜塩屋町湊

藤田 武蔵

この葉書が藤田君から私への最後の便りとなったが、まだこの時分は元気であった。しかしこの前後すでに体にむくみが顕れていたし、余り傾向がよくなないと主治医からいわれた旨、夫人から電話があり、かたがた日高新報の連載小

説は「五月雨心中」であることを山本好一氏から聞いて、また湊の家をみまった。この時も元気で、葉書にあった「サザゲ飯」の話や、同じころ当時副食によく用いられた「みず」という豆の話、若野・白岩渕の大鯰の話、天田橋を中町の方へやや下ったところにあった陸地測量部？の石の話などをしたし、絶筆となった本誌の連載小説「色は匂へど」は三〇回分ほど井本君宛にとどけてある。調子のよい時少しづつ書いているとも語った。私はこの分なら充分大丈夫だろうと、やや安心して帰った。これが八月一日の午前のことであった。

⑤

ところが八月四日夕食中、夫人から藤田君の容体が悪化した、明朝入院する予定であると電話があり、さらに翌早朝もはや危篤状態なので、入院は取りやめようとおもうと電話がかかり、九時前、君の家に駆けつけた。夫人のほか、やはり急をきいて飛んできた縁辺の児玉理容店主が座っていた。児玉君はすでに昏睡状態であった。脈はたしかとももわれたし、この分なら二・三日同じ状態が続くのではないかと素人判断の上、帰宅、とりあえず山本好一氏と小山豊氏に、この状況を報告しておいた。山本氏は私の電話の後すぐ見舞ったが同じ様子などで、私のように一先ず帰宅された。その後、入れかわるように小山氏が訪ねていった。そして間もなく、正確にいうと八月五日午後零時二十八分、夫人や児玉・小山氏その他にみ護られる中で、何の苦しみもみせず全く睡るように息を引き取った。享年六十八であった。

八月一日の見舞の時言葉を変えたのが最後であったが、その時「君はたしか明治四十二年（一九〇九年）の生まれだったナ」と話しかけると「うん明治四十二年二月生まれだ」と彼は答えた。「そうか同年生まれで、しかも生まれ月まで同じじゃないか、しっかりとやろうや」と元気づけたのだが、一ケ年余の闘病生活のあげくとは言え、まったく思いがけない彼の死であった。

人間はよく万物の霊長などと思いがった言い方をした時代があった。しかし広い目でみれば人間も動物の一つにすぎない。みんな欲もあればいやらしいどころくした面がいっぱいある。ただその点藤田君はその濃度がきわめてうすかった。彼は誠実であり、生まれながらにして「小欲知足」を心得ていた。勿論新聞記者としても立派であったが、およそ所謂「新聞記者」らしくらぬ新聞記者であった。おおくの人々が藤田君、藤田君と敬愛した理由の一つがここにあった。彼はかつて俳句の世界に遊び、俳号を草宇と称していた。

彼はまた読書人でもあった。私のように読みもしない本を買いこんだりしないで、主に市立中央図書館の本を利用したようであった。いつであったか市立図書館蔵の「甲子夜話」の内容について語ったことがある。

「甲子夜話」は江戸時代にできた活潑な随筆集で、よほどの好事家か専門家でなければ、いまどき読む人はあるまい。

そんな本さえ彼は目を通していたのである。今年にはいつて「甲子夜話」は平凡社の「東洋文庫」で発行をはじめた。私は昨今になってようやくその第一巻の頁をくり初めたところである。彼の書いたものが人を魅了するのは、裏にこうした厚みがあったからにほかならぬ。まったく惜しい友人を失った。今は君の御霊の安かんことのみを心からお祈りする。

(昭和五十二年八月十一日夜)

交通雑話

二・八月

「交通と公害」昭和五十二年九月二十日掲載

もう彼岸というのに、今年は残暑が殊のほかきびしい。暑い時は怪談でもしてみたら、いくらか涼感をよぶだろうかと考えて、今月は少し趣向をかえることにした。

昔から二・八月(につばちがつ)という季節語がある。旧暦の二月と八月、新暦なら三月と九月のことで、どちらも冬から春へ、あるいは夏から秋へと季節の変わり目にあたり、不安定な日がおおく、よい日和と安心して漁に出ると、にわかに変わり突風が吹き荒れるので、漁師仲間では特別に恐れられた月である。

私が小学校の三年生か四年生の時と記憶するから、たしか大正八年^(一九一九年)か九年であったと思うものの、それが三月であったか九月であったかは、何しろ子供のことでおぼえていないのだが、塩屋村の漁船団が鯖釣りに出て、鯉島沖で突然大時化(おおしけ)にみまわれ、多数の犠牲者を出したことがあった。

いうまでもなく鯖魚は夜間の仕事で、この遭難事故があつてのち、漁師たちが沖釣りに出ると、船の周囲を白い着物を着た亡者がいつあらわれるともなく浮き沈みして、船べりを取りまき、

「杓くれ、水くれ」

と消えいるような、さびしい声で呼びかけてくる。これは先年、鯖魚のとき水死した漁師たちの亡霊の仕業で、海中で溺死したため末期の水を求めて訴えてくるのである。

そんな亡者に、うっかり同情して杓を与えてもしようものなら、おお勢の亡者が集まってきて、その杓でせつせと潮をくんで船に注ぎ、たちまち船を水漬けにして漁師たちを、あの世へ道づれにするのである。

それで熟練した漁師たちはあらかじめ底を抜いた竹の杓を用意して、亡者があらわれて

「杓をくれ、水をくれ」

と近づいてくると、わざと底を抜いた杓を投げてやる。すると亡者たちは底の抜けた杓で夜どおし潮水をくみつけ

て船にそそぐが、やがて東の空が白みはじめると、いつとなく亡者の姿も消え去ってゆくという。
この遭難事故は当時かなり大きな事件であったとみえて、海岸から遠い私の村でも評判となり、私は祖母からこの話をきいた。しかしこれ程の水難事故が不思議なことに「日高郡誌」や「続日高郡誌」・「和歌山県災害史」にも見あたらない。今ならこの事件を見聞いた人が存命している筈である。本紙の読者の中に、もし御存知の方があれば御教示を賜りたい。

御坊の古本屋

「紀州新聞」昭和五十二年九月二十二日掲載

「ある町や村の文化の水準は、その土地の古本屋をみれば、およそ見当がつく」ちょっと気障りな言葉であるが、い

つか何処かで読んだか聞いたおぼえがある。
そういえば私がまだ若かったころ、御坊市にも古本屋があり、その時分から文学本を買ったり売ったりしたものである。古本屋は「革新堂」という当時としては清新な店名であった。革新堂の店主は田端貞造と云い、美浜町和田出身の方で、でっぷりとして鼻下に立派な髭を蓄えた風采のよい人物であった。田端氏は明治四十年（一九〇七年）ごろカナダのケロナに移住し、白人から借地して農場兼牧場を経営の上、大正三年（一九一四年）ごろ和田に帰って牧場を再開したが、大正十年御坊市西町の上、今の紀州信用金庫本店の裏あたりで貸本屋をはじめ、後に古本屋に転じた。

最近わたしは必要があつて戦前の御坊で発行されていた各新聞をみているうち、大正十四年四月五日の紀南新聞・第三二五号に次のような広告が出ているのが目にとまった。

広告

郡内随一・吾が革新堂の書籍部は學術の研究に常識の涵養に將た又・一般民衆の娛樂機關として読者諸君の便宜を計り、書類の選択は自由に見料は低廉なり。斯くて最も經濟的に読書の普及を図りつつあり。其れ一國の文化は一に國民読書の盛衰によつて定む。此の故に吾が國家の進展を期し、地方文化の發展啓發を念とせらるる諸君は、奮つて御賛同御援助下さらんことを希望する次第なり。

△備えてある書籍概目▽

一、新旧傑作名作講談小説・諸名家の著書・農業書・法律書・字典・其他各種雜誌・珍画・珍本・

○ ○ ○

鼠取安全薬メソン特約店

閨房秘薬春雨特約店

古本高価買入交換

文具用品諸雑貨

御坊市西町上（小学校通）

革新堂

この広告文の中で「吾が革新堂の書籍部は學術の涵養に……」と大みえを切ったり、「其れ一國の文化は一に國民讀書の盛衰によつて定む」とあるあたり、まるで岩波文庫發刊の辞を思わせるようなところがあるかと目をみはると、行を変えて今度は殺鼠剤や閨房秘藥の特約店となっているのは、いかにものんびりした大正時代の空氣や、おおらかな田端さんのお人柄感じさせる。

しかし西町時代の革新堂は私は全く知らない。私が革新堂の本棚を漁り店主と無駄喃をかわしたのは、それから間もなく町内椿（岬通り）の、田端氏の親類の方が經營していた岬湯の西隣に店を移してからのことであり、これも大正十五年六月十五日發行の紀南新聞廣告に、

古本 高く買い

安く売る

御坊市椿 椿湯隣

革新堂

と出ているのが分かった。古本屋というものの御坊のことである。そういつも客がある訳でないから、田端氏は午後になると隣り併せの岬湯の番台の上から店番をしており、それが田端さんであったり夫人であったこともおかった。何にしても少年のことである。本らしい本は買えなかった。

その後たしか昭和五・六年（一九三〇・一・二年）ごろのことと云われるが、革新堂は本町三丁目の角に転居された。店へはよく遊びに出かけたが、そのころどんな本を買ったものやら一向に記憶がない。話は飛んで昭和二十三・四年（一九四八・一九四九年）ごろ私はここで春陽堂版の岩野泡鳴全集十数巻を買った。岩野泡鳴は義理にも云うところの名文家ではないし、荒いタッチの作家であるが、その作品は私の心を妙にとらえた。長い間所蔵していたが、何かの折に金につまって売り払った。世の中には物が好きもいるもので、その後「泡鳴全集」の古書価格はぐんぐんと高くなり、遂に三・四年前には復刻版さえ刊行されたが、年金生活では簡単に手に入れない頒価であった。

戦後しばらくは一部の人を除いて筒生活の時代が続き、革新堂へも思わぬ逸品が出た。今も私が愛蔵している和装本の「紀伊国名所圖繪」全二十三巻も革新堂で手に入れたし、明治四十三年（一九一〇年）版の「紀伊続風土記」五巻もここで入手した。そのころのことである、或日、例によつて革新堂へ立ちよると、正宗敦夫校訂の「日本古典全集」がずらりと書棚に

並んでいた。一度は買うつもりで手にしたもの、この大部のものが、そう売れる筈はあるまい、そのうちに買いに来るとしようと、また棚に戻して帰った。しかし気がかりなので翌日出かけたが、すっかり姿を消していた。一体、誰が引きとったのかと尋ねると、故西川平吉先生がお持ち帰りになったという返事であった。あの時の残念さは今も忘れがたい。

そのほか美浜町新浜の小池増次郎氏が、西町新菌橋近くへ「ひつじ屋」という小さな古本屋を開いていた時期もあった。小池氏は文学青年で大正十一年（一九二二年）五・六月ごろ発行部数日本一を誇っていた大衆雑誌「キング」の懸賞小説に応募して、応募作品千点ばかりの中から、見事に一等に当選した経歴の人であることも、余談であるが記しておく。

続 御坊の古本屋

「紀州新聞」昭和五十二年十月二十二日掲載

先月の木曜随想で、私は「御坊の古本屋」をかいたが、その後、見かけた資料や思い出したことを、今月は「続・御坊の古本屋」として、その欠を補いたい。

実は私たち三、四名の御坊市史編集関係者が、先月末から十数回にわたって中津村大又・原見正浩氏所蔵の大正十二年以降の各種の新聞紙の中から、市史の資料を拾い出すために原見家の大変なご好意に預かった。約六十年間に及ぶ数種の新聞紙のことで、その量はおびただしく原見家ではこのために、かなり大きな収蔵館を建てておられる位で、年月毎にきちんと綴って整理保存されているのであった。

もう二十年ほど昔にもなろうか、まだ正浩氏の御先代・伝之助氏がご健在であった頃、いまは亡くなられた当時の中津村教育長・井原義男氏のご案内で、南紀史跡顕彰会の一行に加わって、この収蔵館を見学をしたことがあるが、その時は私も若かったため、それほど貴重な資料とは気づかなかった。

しかし中央紙は近年・復刻版が出たり、他にも所蔵している所があるに違いないが、御坊で発行された新聞となると、県立図書館にも大正年代までさかのぼるものはなく、原見家の資料が唯一のものとなる。

こう分かると、つい欲が出はじめて御坊市関係の記事は勿論ながら、私が目下関係している川辺町誌の分も、そのまま見すごす訳に行かなくなった。

第一回目はめいめいボールペンとノートを持参して関係記事を書き写したのであるが、そんなことではとうてい埒があくまいと、第二回目からはゼロックス機を持ちこんで、めばしいものはゼロックスしたのだが、何しろ長年月にわたり、しかも紀南新聞・紀州毎日・旧日高新報・紀州日報・紀州中央新聞・紀州新聞等種類がおおく、作業は遅々

として進まなかった。

いうてみれば根が好きな道であつたから出来たものの、朝九時半ごろに取りかかつて、午前中一、二本喫煙する時だけ新聞をはなれ、それも掛け替えのない資料なので、万一のことがあつてはと必ず屋外で煙草を吸った位で、夕方になると全員すっかり疲れて、これは重労働だなど誰からともなく呟かれる程の作業であつた。しかしこの膨大な資料の中には当時の世相や郡政、村政はもとより災害の記事、御坊の文学結社であつた行路詩社同人を中心とした文学活動の跡が散見し、恰も宝の山に分け入つたような感じで、肉体的な苦しさにも拘わらず、まことに楽しい作業であつた。

そんな仕事の中で先月の随想の中で紹介した、小池増次郎氏の「ひつじや」古本店の広告や、大衆雑誌「キング」募集の懸賞小説一等入選報道記事が目についた。考えてみれば「ひつじや」は前の地方事務所付近の、ユーカーという喫茶店の近くにあつた。ひよつとすると、ユーカー喫茶店がその店舗ではなかつたかという気がする。小池氏はその小さな店で、いつも小説を読みふけていた。店に並んでいた古本は、恐らく氏自身の蔵書が主でなかつたかと思うし、その数も余り多くはなかつた。

懸賞入選小説は「国境の歌」という題名で、松原小学校尋常科を卒業後、すぐ移民の群れに加わつて英領カナダに渡り、カナダや合衆国東部地方で約八年間、皿洗いやホテルのボーイ、機関車の火夫、製材工、船員、邦字新聞の文撰工など、さまざまな職業を転々し、帰国後は一時、道成寺の縁起の説明や御坊駅の駅弁売りなどをしながら大衆小説の想を練り、入選作「国境の歌」は氏が在米中の一経験を書き上げたものと、昭和十一年五月九日の紀南新聞に出ている。

私はついに「国境の歌」を読まずに終わつたが、小説そのものよりも賞金三百円が羨ましかつた。私は、この年令になつても貧乏生活が続けているが、そのころは今よりももっと貧しかつた。何しろ千円もあれば一寸した家が建てられた時代であつただに、これは大きな魅力であつた。小池氏はその後店を畳んで渡米したように聞いているが、たしかな消息は知らない。

小池氏がキング入選の前であつたか後であつたか定かでないが、行路詩社のリーダー山本好一兄がサンデー毎日の懸賞小説に「蠅z号」が入選したことがある。軽快なユーモアに満ちた爽やかな作品で、私はこれを読んだ時の深い印象を今も鮮やかに記憶している。物ごとに執着しない氏自身の手許にも、その作品は残っていないときくが、どこかに所蔵されている方があれば再読したいと昨今しきりに思っている。

昭和十二・三年頃の紀南新聞の広告に、もう一つ御坊西町に「文化堂」という古本屋の広告が載っている。最近亡くなられた佐々木条造氏が経営された古本屋であつたと覚えているが、私はこの店で津田青楓の随筆集を買つたこと

がある。布表紙B六版の上製本で、中に数葉の写真版があり、これは今も書架に愛蔵している。文化堂の経営は二、三年も続いたであろうか、ついで佐竹書店の広告もある。佐竹書店が文化堂の後身なのか別のものか、その所がもう一つはつきりしない。

佐竹氏については私の知るところは少ないが、若い頃は日高高等女学校で絵の先生をしておられたのではないかと
思う。非常にじみな性格の方で一人でこつこつ製作を続けておられた。いわば日高洋画界の草分けの一人に当たられ、戦後の御坊市展にも毎年出展されていた。私には絵画を語る資格はないが、氏の作品は色彩が極めて美しく細やかであった。表だった活動はされなかったし、生前・個展なども催されなかったが、ご健在であられたら今年などまさに御坊市文化功労賞を受けられるべきで方であつたのではないかと、ひそかに考えている。

晩年は時々いろは書店でお見かけし、それとなく敬意を表した。今年は逝去早々であるが、いつか洋画関係の人々のお力によって、ささやかであつてもよい、佐竹衆造遺作展を開催してほしいと心から念願する。「文化堂」を書くつもりが、いつもの癖で妙な方向へ外たことを恐縮する。

公害のはしり

「交通と公害」昭和五十二年十月二十日掲載

南海醋酸株式会社移転問題

日高郡誌によると大正^(一九一七年)十六年四月に資本金三十万円で塩屋村天田(現在の御坊市)、南海醋酸株式会社が創立されたとある。ところが大正十一・十二年ごろ、この会社は出火のため全焼した。

しかし、会社は大正十三年にいたって御坊町名屋(御坊市)十本松に、移転再開を申請したのが許可された。当時このような工場の新設や移転建設の許可申請は、どこで行ったものか私は知らない。それはともあれ醋酸会社が名屋にできると世間に伝えられると、附近漁民や町民の間から、強い工場建設反対の声が上がった。そのころ御坊で発行されていた紀南新聞、大正十三年二月十五日付の紙面に、

醋酸位置問題で

漁民百余名

郡衙に押寄す

と大きな見出しのもとに次の記事が出ている。

南海醋酸会社焼失後、再び御坊町大字名屋十本松に新会社を創立し工場新設の件は、本月一日付けで某筋の許可があつたのに就いて、先般来醋酸工場は日高川を始め、日高沿岸漁業に害ありとして附近沿岸漁業組合から屢々当局に陳情する所あつて雙方会見を重ねた事柄で、結果茲迄運ばれたものだから、漁民側では委員の態度が手ぬるいといつていた所へ、此の許可を下つたのを聞いて和田・松原・塩屋の漁民、之に御坊町名屋の人々も加わつて、前記名屋に工場建設に絶対反対を唱へて、合計百余名の漁民が十三日午後三時頃郡役所に押寄せ口々に反対意見を述べ立てた。此の交渉の結果は更めて郡長及び会社から二名・合計三名と漁民側から代表者五名とが会見する事になつて此の日は引取つた。

◇十四日の会見

別項記載の如く醋酸工場位置問題に關し、十三日の約を履^⑤んで反対派の漁民側代表五名と会社側から田端昌平・小早川政次郎の両氏との会見は十四日、日高郡役所で開かれ南郡長・西岡御坊警察署長も立ち合つて交渉中だが、本稿締切までにはどうなつたか結果はまだつかない様である。(午後四時)

と報じられている。その後両者間では何回も交渉が続けられたが解決をみずに終わつたもようで、同じく紀南新聞、大正十三年八月二日付けの紙上において、

漁民反対の醋酸会社

大阪へ移転

の見出しで、

火災後、再建せんとして漁民の大反対を受け行悩みとなつていた塩屋村の醋酸会社は止むを得ず、大阪築港附近へ移転する計画が進んでいると云う。同社は例の再建築が塩屋・和田・松原の三漁業組合から残錨を川へ流し込むので、魚類が斃死するので猛烈に反対された結果、大阪へ移転すべく決したものと思われるが、二十九日の重役会で決定した模様であるとの記事がある。

近年工場公害の問題が各地で大きく取り上げられているが、この南海醋酸会社の移転建築などは日高地方郡市内での公害問題の、はしりではないかと思はれる。どの工場にしてもあるのよりは無い方がよいにきまつている。

しかし人間が現代社会に生きてゆく上で、そんなことばかりも云うていられない。要はどちらかが私どもにとって有利なのかじっくりと考えた上で、感情にはしらず冷静に善処すべきであろう。

昔の交通事故 ①

「交通と公害」昭和五十二年十一月二十日掲載

中津村大又・原見正浩氏宅に、大正^(一九二三年)十二年九月以降の各種の新聞が、原見奉納館という別の建物に、いまでも大切に保存されている。奉納館という名称はその建物が原見家の遠祖と伝える桓武天皇を主祭神として、もろもろの神々を奉祀する屋敷神のすぐ側に位置しているためである。

現在六十四・五才以上の方々は今も記憶されているであろうが、この年九月一日正午前、突然、わが国の史上でもあまり類のない大規模な、いわゆる関東大震災が発生して東京都を中心に多くの死傷者と、大きな被害をもたらした。原見正浩氏の先代、伝之助氏はこれを機縁に新聞というものは、どれほど重要なものであるかを痛感して、その保存を思いたった。伝之助氏は非常にきっちりした性格の方であつたから、思いたつてからは、一日もかかさず整理にとめられて、二・三ヶ月ごとに一綴りにされ、年代順に一見してわかるように棚を設け、これを収蔵されて伝之助氏が逝去後、当主の正浩氏も亡父の遺志をついで今日に至っている。

大阪や東京に本社をもつ、いわゆる中央紙は近年復刻版ができたし、ほかにも所蔵されている所があるが、その時分、御坊市で発行されていた、紀南新聞・紀州毎日・紀州日報・紀州中央新聞・日高新報となると、これは県立和歌山県立図書館にも田辺市立図書館にも御坊市立図書館にも、大正年代以来のものは保存されていない。ということつまり日本中さがしても、原見奉納館以外にはどこにもないということになる。

こうなると日高地方ではかけがえのない貴重な資料である。したがって目下編集集中の御坊市史でも、これを見すごす訳にはゆかない。そこで御坊市史編集委員会でも、この八月末から十月十五日ごろまで、廿回ばかり原見奉納館を訪ねて御坊市に關係する資料を目のとどく限りコピーしてきた。その中から交通に関する、めずらしい記事を次に転載してみる。

【自転車衝突、垣本巡査転落】

二十八日の夕刻ちかく松原村吉原(現美浜町吉原)王子神社附近の比井街道で、志賀村(現・日高町志賀)駐在所詰めの垣本巡査が御坊町から帰りとあつて自転車飛ばしてきた。茲へ西の方から四人連れの自転車乗りが広くもない街道を、四人が並行ハンドルを並べて話ながら乗つて来たのと出合頭に衝突し、垣本巡査は転落し自転車もいたんだ。スワ大変だ四人連中は碌々挨拶もせずに行き過ぎようとしたといふので、垣本巡査は其の不都合を詰(な)じ^(一九二四年)つて、一旦御坊署まで連れてきた。揚句は説論で事すみとなつた。(旧仮名使いのまま)

これは大正^(一九二四年)十三年十一月三十日附の紀南新聞で見たものである。

今も時々二人連れ三人連で交通量の多い道路を、自転車で走っているのに出あうことがあり、特に高等学校や中学校の登校や下校の際、目につくが、大正十三年時代とちがい自動車やオートバイの往来が、何倍、いや何十倍あるいは何百倍にも増加して、きわめて危険である。学校側では勿論きびしく生徒に注意しているものと思われるが、一度事故をおこせば垣本巡査が大正十三年に転倒した程度ではすまない時代である。より一層の学校側の指導と警察の取締りをお願いするものである。

交通雑話

昔の交通事故②

「交通と公害」昭和五十二年十二月二十日掲載

交通事故は現代は自動車や單車によるものが、ほとんどをしめている。前回掲載したものもそうであった上、幸い相手方とも人身事故でなく説論で方がついている。今回の例は事故過失であるが、これは相手方の家のウインドガラスを割り、自身もかなりの負傷をしている。以前ほどにないにしても、自転車は相変わらず愛用されているし、いまは切替操作のできるスピード性のある自転車がサイクリング用として少年間に人気を集めている。自転車といえども油断ができないことを示す一例である。

時は大正十四年五月廿六日夕刻のことであるから、もはや五十三年の歳月を経ているが、もし事故のご本人がご健在なら古傷を今さら取りあげるのも心ない業である。したがって事故者の氏名だけを仮名にした。資料は前掲と同じく中津村大又原見正浩氏所蔵の「紀南新聞」大正十四年五月二十八日発行の第三二六八号によった。記事に曰く

鮮血滝の如し

自転車の店員

陳列窓へ衝突

二十六日夕方当中町玉置自転車店員曲り木秀三(十八)は、御坊新地の方から自転車に乗って中町筋、元鴻池銀行支店前の森本時計店陳列窓に衝突して墜落して、勢ひ余って頭部で陳列窓の大硝子を破って頭を中に突っ込み、このハヅミで左腕大動脈を切断し、血は滝の如く噴き出し大負傷したので、早速、岡崎医院に連れ込み手当をした。翌二十七日朝も自ら徒歩して通院した位で、全治には大分日数を要する見込み。

記事はこれで終わるが二・三の註を加えると、玉置自転車店は、今の栄町から中町へ出た三叉路の突きあたり近くにあり、店主はたしか玉置政七といい、町で自転車屋の草分け的存在であった。曲り木秀三君は私もよく知っており、

この記事を読むと二人の昔の顔がうかんでくる。

また「御坊新地の方から自転車に乗って中町筋元鴻池銀行支店前の森本時計店陳列窓」とあるのは、現在の「松葉寿司店」のある小路から「いろは肉店」の角を中町へ飛び出したことをいうている。いろは肉店の向いの芝時計店のあたりに、近年まで森本時計店のあったことは、おおくの人が知るとおりである。なお元鴻池銀行とあるのは、大正七・八年ごろ藤田村藤井に縁故のある戸田某が、神戸で大きな廻船業を営み、第一次欧州大戦によつて巨産を成し設立した戸田銀行であつが、二・三年で鴻池銀行の御坊支店に売却した。しかし鴻池銀行もあり長く営業せず閉鎖し、その後「清交くら部」と称して町内資産家の社交場となり、たしか木炭問屋田端商店の御主人田端昌平翁が会長をされていたような気がする。

それにしても左腕大動脈を切断の大けがを負いながら、入院もせず翌日店から徒歩で岡崎医院へ通院しているのは、余程手当がうまくいったか、剛気な少年であつたと思われるし、時計店のショーウィンドウに頭を突っ込んで、よく頭や顔に大負傷をしなかつたのは不幸中の幸いと云うべきであろう。

私の昭和52年

「紀州新聞」昭和五十二年十二月二十二日掲載

十二月も半ばを過ぎると村も町も、何となくざわめきたつて、あわただしさが加わってくる。

今年は六月のコレラさわぎや夏のはげしい暑さ、その上ながい旱魃があつたものの、大きな天災もなく、まずは平穏な一年であつたことを感謝しなければならぬ。

しかし日々の新聞紙上やテレビのニュースをみると、私ども庶民のどうしようもない世界で、いろいろな紛争、殊に経済問題の大きな嵐が吹き荒れている。さらに悪いことには昔とちがつて、そんな遠くの国際間の紛争の波が、情け容赦もなく直ぐ力のない庶民の生活にまでのしかかってくる。

責任のがれをいうつものはないが、もう時代はかわつた。今の私は現役ではない。社会の片隅でひっそりと余生をおくる老書生にすぎない。台風の過ぎるまでじっと待つよりほかに手だてはみつからぬ。正月が来ようが師走が近づこうが、一向生活にかわりはない。迎年を前にして年賀状を整理する位が、昨今の仕事の一つに数えられようか。

それにしても暮れにはいつてから今年は「喪中に付き」の葉書が、例年になく沢山おくられてきたが、私の身边でもこのほかおおくの人が、知らぬうちにそれぞれの生涯を閉じた。

中には私よりも、もっと常日頃元氣であつた人が、あつという間に姿を消した。まだ寒さのきびしい二月頃であつ

たか、父方の従兄弟で、私よりも七、八才も若い男が胃癌で斃れた。数すくない従兄弟で、たまたま逢うと清水家の家系のことをよく語った。私など五撰家でも徳川家でもあるまいし、庶民中の庶民にすぎぬ。今さら家系を持ち出す柄でもあるまいと軽く聞き流したが、和歌山在住の彼は、父の生まれた日高の地に愛着して、古い系図を持ち出した上、清水家の遠祖は湯川直春の忠臣・林源右衛門昌朝で、天正十三年（一五八五）豊臣秀吉の紀州南征によって湯川氏敗北の際、逃れて芳養村に帰農し、慶長十七年（一六一二）日高郡若野村に転じ昌朝から五代の後、孫太夫が若野村から小熊村岡之段に移ったというのであった。

なるほど私も若い時分に村の古老から、それに似た話をきいたおぼえがあり、江戸末期の私の曾祖父に当たる人が、村の庄屋を勤めた記録が藤井村瀬戸家の江川村大庄屋文書に出てくる。しかし湯川家の忠臣林源右衛門昌朝が清水家の遠祖にあたるかどうかは、日高地方の旧家の系図にみられると同じ類で、その信頼度に疑いかのこる。たしかなのは寺に伝わる過去帳から拾い出したもの位で、それによると元禄末（一七〇三）まで遡り得る。私はこれまで日高地方のおおくの家々の系図を拝見した結果から考えると、この辺りの一般の家の遠祖で、はつきり信じてよいのは元禄頃が上限のような気がする。

三月十一日、長い間川辺町文化財委員として、また町誌編集委員の一人であった東季一氏が入院先の御坊の病院で亡くなられた。入院の時は自分で単車へ乗って行かれるほどで、間もなく元氣になられると思うたのだから、次第に衰弱して悲しい結果になった。

氏は私よりも数歳の年長であり、格別、地方史に専念された方ではなかったが、博覧強記で古いことをよく記憶しておられた。盆栽を愛され年令は大部分がうが、私が訪ねるとよろこばれ面白い話を、よく聞かしてくれたのが懐かしい。町誌の方もいよいよこれからという時期に惜しい人を失った。もう少しいろいろお伺いしておくべきであったと残念である。

思いつくまま書いたため前後して申し訳ないが、これらの人々より早く一月末ちかく、茅屋の一の隣ともいうべき村の和尚が遷化された。この人も私よりも、七、八才お若く、よい意味でお坊さん臭くない気さくな方で、昨年わたしが風邪をこじらして久しくぶらぶら患いをしていた折、医院まで車でおくって貰ったり随分お世話になった。

若い頃ちように支那事変から太平洋戦争に遭遇して、韓国から中国大陸を何昼夜も不眠不休で強行軍した話など、従軍の経験を持たぬ私に、興味ふかく話してくれた。第二次世界戦争生還の勇士も病気には勝てなかった。もう長い間、仏事というとお参りしてもらっていたのだが、美しい声で正信偈や阿弥陀経を読誦されたのが、まだ耳に残っている。

いくら年末とはいえ、すっかり暗い話になったがそうでもない。三月二十四日から二十六日まで、拾人余りの人々

にまじって木曾路を実りのおおい旅をしたこと、五月一日・二日と県文化財研究会御坊支部主催の吉備路一泊二日の貸切バス見学旅行をしたこと、八月末から九月末日にかけて山本好一・蓮池進・中津芳太郎の三氏のほか市役所の若い職員方で中津村大又・原見正浩氏所蔵の戦前戦後の歴大な古い地方紙をみせていただいたこと、この長い期間、終始あたたかくお迎え下さったご好意など、今も明るい爽やかな思い出として折にふれ一人で回想している。

私の紀州随想も本年はこれでおしまいである。お互いに幸せな年を迎えられるようお祈りする。

交通雑話

『馬』

「交通と公害」昭和五十三年一月一日掲載

いくら本紙が「交通と公害」と銘うつても、正月から交通事故の話でもあるまい。

今年の干支に因んで馬の随筆でも書いてみよう。考えてみると農村から馬が姿を消して、もうかなりになる。戦前はどの村にも二頭や三頭の馬があった。たいいてい馬力などを挽く挽馬であったが、田ごしらえの時期には耕作用にも使役された。

馬が人間とかかわりを持つにいたったのは、いつごろのことか私には分かりかねるが、今から千二・三百年前の古墳時代には、すでに人間に飼育されたことが、この時代につくられた古墳の周囲にめぐらせた馬型の埴輪の出土によって、はっきりと証明できる。そのころ馬は高貴な宝物のようなもので、よほどの実力者でないとてなかつた。主にその速い脚が買われて乗馬用に使われたと考えられ、和歌山県でも紀ノ川北岸の大谷古墳からわが国でも数すくない馬甲(うまのかぶと)が出土し、現代は紀伊風土記の丘に進展されている。もっともこれは馬の顔をおおう、鉄製の「かぶと」であるから、恐らく紀ノ川周辺を根拠とする豪族が戦闘の際に用いたものと推測される。

年輩の方は郷愁をおぼえるかも知れぬが、日支事変がはじまって間もなく、

くを出てから幾月ぞ

共に死ぬ気でこの馬と

攻めて進んだ山や川

執った手綱に血が通う

以下、六番までの愛馬進軍歌というのが、広く愛唱された時代があったかと思えば、あれは戦後であつたか、藁の上から育ててよ いまじゃ毛並みも光ってる

お腹こわすな風邪ひくな オーラ
元気に高くないてみる

ハイド ハイドウ ないてみる

何とかという、きわめて土の香の強い「めんこい子馬」というのが流行したことがあった。「めんこい」は可愛ゆいという東北地方の方言であるのは、断るまでもない。

馬鹿といい、馬耳東風といい、意馬心猿あるいは馬の耳に念仏という例えのとおり、馬に関する諺には、あまり芳しくないものが多いが、馬はもともと賢く情けのこまやかな動物で、古くから人間と苦楽を頒ちあってきた。

今も各地の社寺に掲げられている小絵馬のおこりは、神社に生きた馬を献納したことにはじまる。生きた馬を神前に奉納して神の加護を祈ったのが、後に生き馬のかわりに板に馬を画いて宝前に掲げたのが、時代の移りかわりにつれて、さまざまに分化し形も小さくなり、いわゆる小絵馬として皮膚病には鯰を、乳の少ない婦人は乳の絵を、酒癖のよくない人は盃をと、それぞれ自分が描いたり絵師に依頼して、生年や氏名、願いごとを記した上、お供えの際祈願したものである。

神に馬を献ずる基は、古代の日本人は神は馬に乗って降臨し、村里を巡視したという考えから発したものであり、各地で現代、一攫千金を願う虫のよい人々で繁昌している競馬も、もとは神前で馬を駆けさせて吉凶や、其の年の出来ばえを占った古い習俗に起因しているとする学説が定着している。

第二次世界戦争前は各村の神社の秋祭りには、きまって草競馬があり、村ごとに馬ずきの所謂、馬狂いがあつて仕事を捨てて、あちこちの草競馬にうつつをぬかし、村の地主はそれぞれ自慢の馬を養い、競馬の直前には焼酎(しょうちゅう)や「はび」の粉末をのませたりして、馬の意気を盛んにしたもので、何にしてもものんびりした時代であつた。

現代、川辺町江川の丹生神社の秋祭りの松瀬の童の竹馬も、その伝承はあまり古くないようであるが、ひよつとすると其の原型は、古代日本の馬を崇める祭祀習俗の名残ではないかという気がする。後考をまちたい。

ともあれ今年は其の干支の馬にあやかつて、若駒のように、いさぎよい幸せな一年を読者諸賢と共に過ごりたいと念願する。

絵馬物語

道成寺の絵馬

「紀州新聞」昭和五十三年一月一日掲載

かれこれ四年ばかり前になる。

昭和四十九年三月二十四日、県文化財研究会御坊支部の主催によって貸切バスで、紀北六社巡拝に出かけたことがある。もう三月下旬というのに割合さむい日であった。この日、御坊支部がえらんだ六社は、野上八幡神社・三船神社・鞆淵八幡神社・丹生津比売神社・隅田八幡神社・宝来山神社で、いずれも古い由緒と広大な社叢、神厳壮麗な社殿をもつ、格式の高い神社であった。

一番はじめに参拝したのは海草郡野上町大字小畑に鎮座する野上八幡神社で、神社のすぐ下の県道にバスが着いたのは、私の記録を見ると八時四十分とある。この神社は本殿・拝殿・摂社三社のほか神宝の太刀が国の重要文化財に指定され、絵馬殿は県指定文化財になっている。

このような歴とした古建築の美しさ厳かさに、感銘したのはもとよりなことながら、参拝が終わって軽い気持ちで立ちよった絵馬殿に掲げられている、二十数面の大絵馬に、私は思わずアツと息を呑んだ。保存もよいし第一に年代が江戸初期にさかのぼるものが大半をしめていたからである。

私は機会あるごとに各社寺の絵馬に注意しているが、日高地方では絵馬がこれほど大切に、しかも一社寺に伝えられているところをみかけない。ようやく南部町西岩代八幡神社の長床や、印南町丹生の丹生神社の長床に多少奉納されているが、私がみた七、八年前すでに荒廃が甚だしかった。はたして今も残っているであろうか。また南部川村須賀神社にも江戸末期の南部の国学者で歌人であった熊代繁里筆の、三十六歌仙の小絵馬が長床に懸けられていた。繁里は能筆であったから流麗な字であった。あのままでは風雨におかされるし、盗難の危険もあると村人に話したことであるが、その後神庫に納められて今は、その憂いはなくなった。

昨年であったか一昨年であったか、御坊市の小竹八幡神社で、倉庫に睡っていたという大絵馬数面をみる機会を得たが、大ぶんいたんでいた。昭和五十二年は御遷座三百年祭が盛大に行われたが、あの絵馬はどうなっているのか、ちよつと気になる。機会があれば復修されると氏子の方々が眼をみ張るであろう。江戸中期以降のものであったと思うが、見事なものであっただけに、修復の日が待たれる。

正月三ヶ日はどこの神社や名刹でも初詣で賑わうが、日高地方では御坊の小竹八幡神社や、由良町の興国寺・川辺町の道成寺・同じく和佐の光性寺(俗に和佐の開山)が特におおくの人出をみる。中でも和佐の開山といえば厄除けの祈願所として戦前は、参詣者がまだ夜の明けぬうちから、引きも切らなかつたものである。

さて、今年の干支は午ということで馬に縁がふかいが、道成寺に何回もお参りして御本尊や両脇の日光・月光の二尊を拝んだ人でも、この本堂の西側の上の方に思わず感嘆の声をあげたくなるくらい、素ばらしい絵馬が二面、かけられているのに気のついた人はそうおおくあるまい。

今は長い歳月を重ねていくらか色が古びているが、文字通り名馬が、きはいにきはい、まさに駆け出さんと、広庭の馬つなぎ杭の周囲で勇みたっている図である。大きな堂内のことで、ほの暗いが、ようやくす闇に眼がなれてくると、一面の絵馬の上の方に左から横書きに、「所願成就、皆令満足」それから馬を描き、馬の図の下に「菌村」「品田庄太郎」と二行に誌し、さらに左に「画馬両片奉揚千」と、縦書きにしている。

もう一面の絵馬には馬図の上部にこれは右から横書きで「所願成就、皆令満足」縦書「菌村」「品田庄太郎」右横書で「慶安五年壬辰天」。「八月吉祥日」とこの五文字は縦書きである。

下手な説明を加えるまでもないが、「所願成就、皆令満足」は、もろもろの願いごとを、お聞きとどけの上、すべてを満足せしめ給えという程の意味であろうか。続く「菌村」は現在の御坊市大字菌で、願主の品田庄太郎の品田は「ほんだ」と読む。

道成寺の堀田広海管主のお話しによると、品田氏は小松原の九品寺を一建立した施主であつたとの伝承があるし、その子孫の方々は今も海南市に御在住で本多姓を名乗られ、故本多彦右衛門氏は、かつて海南市会議員をつとめられたこともあつたと話された。この絵馬は縦が一・四五[㍺]、横が一・五〇[㍺]のすこぶる大形のものである。

「慶安五壬辰天」の「天」は「年」と書くかわりに、古い金石文によく用いられている。西暦になおすと一六五二年にあたり、今年から数えて三百二十五年前のことで、日高郡内では最古の大絵馬であるばかりではなく、和歌山県内でも数すくない古絵馬の逸品として、午年を機会に、もう一度みなおしてほしい。恐らく「画馬(えま)両片奉揚千」とあるから、奉納したときは本堂の外陣正面あたりに、高々と掲げられていたものであろう。この大絵馬の筆を執った画家の名が不明であるのは惜しまれるが、両面に描かれた馬の姿はさながら今にも両面から躍り出さんばかりの迫力で、これを仰ぎみる人にふかい感動をあたえずにはおかぬ。よほどすぐれた画家の手になったものにちがいない。一体この絵馬を三百二十余年前に奉納した品田庄太郎とは、どんな身分の人であつたのか、今は知る由もないだけに、想像の糸は手ぐれども尽きぬ。

慶安ときくと人には、講談で有名な由井正雪を思い出すであろうが、机辺の辻善之助編・戦時中に発行された「大日本年表」や「近刊の日本史辞典」をひらくと、この年四月二十日徳川三代將軍家光が四十八才で世を去り、この機に乗じて江戸の浪人で楠本流の軍学者、由井正雪が浪人を集めて倒幕を企てたが発覚し、駿河で自らの手でその生涯を閉じている。世にこれを慶安事件と称し、紀州藩主・徳川頼宣にも疑いがかかったと伝えるが真相は明らかでない。

もう一つこの絵馬について語りたいのは、北側の一面は白馬であり、南側の一面は久しい星霜をかさねたため、色彩はあせているがどうやら赤毛か黒毛か、ともかく着色されていた形跡が認められることである。

絵馬の参考書によると古代、馬は神の乗られるもので、奈良時代の遺跡から雨乞いの祭事に用いられたとみられる

馬の下顎と大腿骨がその他のものと出土しているし、「常陸風土記」や「続日本紀」などに、鹿嶋大明神や伊勢神宮・大和の丹生川上社に、黒毛や赤毛の馬を献上した記録がみえると、その原文を載せている。また白馬を止雨の祈願に、黒や赤毛の馬を降雨の祈願に使用されたこともある。

しかし今も昔も同じことで、生きた馬は高価でそうやすやすと手に入れたり、手放したりできかねる。そこで生き馬にかわって神が好み給う馬の絵を板に画き、これを宝前にかけて願望の成就を祈った。つまり絵馬のおこりであるが、もっと掘りさげてゆけば、そこには、わが国の古代の習俗の上に、模倣呪術的な、馬との深いかわりがありそうながする。

【附】

道成寺では今年の干支に因んで前記、慶安の古絵馬の忠実な模写を、杉の縦板に描いて、希望者に授与している。私の文章の拙いところは右の模写小絵馬によっておぎなわれない。ちよつと道成寺の提灯もちのように勘ぐられるくらいを免れぬが、天下の道成寺には今さら私如き者の提灯もちなどは無用であろう。誰の作かは知らぬが実に小絵馬の秀作である。団体観光客のために、どつと県外に流失しないうちに、地元の篤信家の手に一枚でも多くゆき渡るようにしたい。一度ペンをおさめた上、さらに「附」の小文を草した所謂である。諒とされたい。

交通雑話

昔の交通事故③

「交通と公害」昭和五十三年二月九日掲載

もう四十年近い昔の昭和十四年六月二十四日発行の紀南新聞に、目を見張るような大きな活字で、

自動車転覆して

日高教育視察団員遭難

高知市外浦戸湾東岸で負傷者七・八名出す

と大見出しをつけ

今回日高郡教育委員会十九名が四国地方の視察旅行に上がったが、二十三日午前十時ごろ遊覧バスによって視察の途、全員を乗せたバスが海中に飛びこみ団員一同はズブぬれとなったのみか、其の大部分は重軽傷を負い、内八名は重傷を負うたという椿事を惹起し郡教育会員を驚かしている。(午後一時記)

続いてまた大文字で

サイドカー避けんとして

遂に海中へ転落

八名は瀕死の重傷

富永病院で手当中

ここから普通の記事で

即ち二十日和歌浦を出帆し、徳島・香川両県を視察し高知市に入った十九名の視察団員は、二十三日午前十時ごろ高知市の土橋バスⅡ運転手竹内二郎君(二四)Ⅱの操縦する遊覧バスに乗りこみ、千松公園を遊覧して同公園を出発し浦戸湾南岸を疾走中、岡崎郡五台山村五台橋西方に差しかったとき、一台のサイドカーが疾走して来たので、これを避けんとして誤って遊覧バスは海中に飛びこんだのである。これがため乗車中の郡教育会員は、車中から藻掻き岳で駆けつけた附近住民に助けられたが、このうち八名は瀕死の重傷を負っているのだ、直ちに高知市富永病院に担ぎこみ、応急手当を受けていて其の生命を気づかわれているものもあるが、一時は大騒ぎであつた。(高知電話)

さらに記事は

尚、堂視察団に参加した会員は十九名で、何れも学校における有力訓導あるいは校長である。

さあ大変である。また

理事会を開き早速慰問使送る 生駒教育会長語る

と大見出しをつけ、教育会長の談話を載せ、続いて

榎本視学、高知市へ急行

とあり、高知から和歌山に入った電話の概略を十行ばかり記事にし、行を変え大活字で

一同は無事……

予定通りに帰る

教育会へ電報Ⅱ慰問使も取止め

教育視察団一行の遭難に関して、日高郡教育会では直ちに理事会を招集し、慰問使を特派することになり遭難の状況を知るべく、高知市教育会・警察署へ電報を以て紹介している折柄、旅行団から教育会宛てに

自動車転覆したるも一同無事。安心ありたい。

と電報あり、また某訓導らも学校宛に

自動車転覆遭難したるも一同無事予定通り明日帰る

と嬉しい電報があったので、教育会では慰問使の派遣をとりやめた。

で、この記事は終わっている。バスが海中へ転落して全員、潮でズブぬれになったものの、よくこれ位ですんだのは不幸中の幸いといわねばならぬ。一歩まちがえば大事故になるところであった。この交通事故の遭難者の中で現在も、お元気で活躍されている方が、おおせいおられる。しかし本紙の読者中にこの事件を記憶しておられる方が何人いるであろうか。

去年・今年

「紀州新聞」昭和五十三年一月二十二日掲載

昨年十二月二十日の午後、長男がクリスマス・プレゼントをジャスコ・オークワへ求めに行くのに同乗した。頭が古く動作のにぶい私は、国道を渡るのが苦手で、買物は大てい旧御坊町内ですませるのだが、この日は車なので、歳末に近いスーパー風景を一見たいと助手席に腰をおろした。

車は三階駐車場にとまった。ここまで上ったのは初めてである。車を出るとこの日はめずらしく寒い風が強く吹きつけて、思わず首をすくめた。と同時にオヤツと目を見はった。二十数羽もあろうか雀が駐車場のあちこちで、さわいでいるのだ。雀ぐらいというなかれ、数年来わが家の付近で絶えてみたことのない光景であった。

話は古いが詩人・北原白秋はこよなく雀を愛して「雀の生活」という著書さえある。雀はたしかに、おしゃべりで、やん茶で、おっちょこちょいで、春先には人家の屋根に巣をつくるし、秋は大群をなして稲穂をついばみ、腹がふくれると電線もたわむほど一列に羽を休め、うるさく鳴きたて、追ったかと思うとまた別の群が集まって性こりもなく無駄話をはじめ、けれども、どこかおどけた愛嬌があつて憎めなかった。それが数年来わたしの村あたりでは、すっかり姿を消してしまった。

これは、わが家の周辺のみの現象なのか、もしそうでなかったら、雀どもは今の農村のどこが気に食わないのであるうか、読者諸賢のご教示を得たい。

三階で玩具売場へ行く長男と別れた。ひと時をすごす書籍部が目についたのでそこで時間を消した。スーパーという性格から置かれている書籍の数も質も、およそ見当がつこうというもので、ざっと一とおり書棚に目をさらすと、案外すてたものでもなかった。そのうち私は昨年夏以来探していた松下英麿著、「昨年の人」を見出した。

この著はその題名が示すように故人の追想記のみを集めたものだが、著者は中央公論社の編集部に勤めた人だけあ

って、明治末年生まれの私には馴染みのふかい作家・画家の風貌を深い感慨と敬慕をこめて描いたもので、発行当時から各紙の書評欄でも大きくとり上げられていた。

もちろん御坊の書店へもきたのには相違ないが買いそこね、再版の都度書店を通じて注文したのだが手に入らなかった。それがスーパ―の書籍部にのこっていた。それも初版であった。ひよっとするとサンタの爺さんが、私の心情を憐れんで贈ってくれたのかも知れぬ。

仕事ののろい私は昨年夏に実施して十一月末までに県教育委員会に提出するはずの、川辺町内二ヶ所の緊急民俗調査報告書を、年末から正月にかけてまともになかった。

民俗調査はもともと興味のある仕事なのだが面倒な作業でもある。その上、自発的ではなく委託を受けた関係から、時々ゆきつまつたり飽きてくると、私は「去年の人」を開いて気に向いた頁から二・三人読んでは疲れをやすめた。読書の本当の愉しさは気に入った本を気ままに読むところにあるような気がする。

一月六日七日と恒例の川辺町文化展を観賞してきた。町内にはこれほど文化の土壌がある。毎年のことながら会場を出るとき心強い思いがする。同時に会場づくりに骨を折られたおおくの人々にしみみと感謝する。ぶらりと来てぶらりと帰って行く私などは論外であるが、出品者も設備、後片付けの裏方もどれほど苦労されたか御礼の言葉もない。私はこの会場で意外な儲けものをした。臘梅の花を見たことである。たしか大正後期か昭和初年ごろにかけて文壇の鬼才として、一世に謳われた作家、芥川龍之介の短編「或日の大石内之助」の冒頭の一文であったような覚えがする。けれども其れがどうもあやふやなため、久しぶりで書架から彼の全集第一巻をとり出してみた。やはり間違っていた。芥川は

立ってきた障子にはうらかな日の光がさして、嵯峨たる老木の梅の影が、何間かの明け身を、左の端まで画の如く鮮かに領している。

と吉良義央を討ちとった後、細川家に身柄を預けられた大石義雄以下の赤穂浪士の一日を、くつきりと浮かびあがらせており、全文中臘梅の文字はどこにもない。恐らく乱読、雑続癖の私は、いつかどこかで臘梅のことを読んで、この辺りでは殆んど植えられていないだけに、恰もまだ見ぬ女性にあこがれると同じ思いを臘梅の花によせてきたのであった。因みに芥川の短編を読んだのは昭和二十一年一九四六年四月九日とその末尾に小さく記してある。三十余年の昔に当たる。

ともあれ其の臘梅が生花の会場に二鉢飾られていた。まさに私には幾春秋の幻の花にめぐりあったのである。

シナ原産の落葉灌木で、高さは通常四メートルくらいに達する。一、二月ごろ葉に先だって黄色の花をつける。花は下に向かって開き芳香がある。臘梅とは花が臘細工に似ているところから名づけられたもの。唐梅・南京

梅。

これは山本健吉編「最新俳句歳時記―冬―」から抜いた。また同書の類句の一番目に芥川龍之介の

臘梅や雪うち透かす枝のたけ
を挙げている。

千羽鶴図

「紀州新聞」昭和五十三年二月二十二日掲載

暮れの三十日か三十一日には、きまつて床の軸をはずし野際白雪の千羽鶴図を掛けて、迎年の準備をするのが、ここ数年来わが家の吉例となっている。

白雪は画家として祇園南 嶺 や桑山玉州・野呂介石ほど一般には知られていないが、これらの三人とほぼ時代を同じゅうした紀州の画人として、その名は高く評価されている。いまその略伝を貴志康親著「紀州芸術家小伝」から抄出すると、

白雪、名は徴・伯亀・石湖と号し、姓が野際であつたところから蔡徴とも称した。安永二年（一七七三）若山で生まれ表具を家業とした関係から、若い時より名画に接することが多く、機会あるごとに臨模して技を磨き後、野呂介石に師事して山水画を楽しみ師の墨を摩するに至つた。その後しばしば藩主の命で大作巨図を描いたが藩主はその技の非凡なを感じ藩の画員の列に加えた。こうして白雪は壮年時代に研究した結果を集大成して諸流の長を採り、南画北画を折衷し、人物・山水・花鳥と幅ひろく秀作をのこし、嘉永二巳酉（一八四九）七十歳で歿した。

とある。

家蔵の千羽鶴図は全紙の中央に千古を閱した巨松の、枝葉を左右にたくましくのばしてそびえる様を、力強く写し、老松のそりたつ遙か上空を数十羽の群鶴が列をなして翔び交い、さらにその遠くには深紅の太陽が、まさに昇ろうとする光景を墨と淡彩で描いている。

云うまでもなく鶴樹先年の言葉のとおり鶴は古くから、わが国では瑞鳥とされてきたし、松無古今色の句のように春夏秋冬、近年マツクイ虫の被害が蔓延するまで、幾歳月を通じて其の色を変えず、神々の降臨する霊木として崇められてきた。もう一つ付け加えると、この軸の上部に

（八二九年）
文政十二巳丑花月

野田老君古稀盛延

奉祝 祭徴

と、この画の成った由縁を墨書している。

即ち今を去る凡そ百五十年前の文政十二年の春、白雪と親交のあった野田某が古稀の祝宴を盛大に催したのを記念して描いたというのであつて、時に白雪は五十六才、画技のもつとも円熟した時にあたる。

現代は医学が進歩の結果、わが国の平均寿命も七十何才とかきくが、江戸時代まだ進んだ西洋医学が普及せず、その上粗衣粗食を常とした社会では、人生七十年は文字どおり古来稀であつたに違いない。こうした二重、三重に目出た此の千羽鶴の一幅は、新しい年の初めに床を飾るのに、まことにふさわしいものと、ひそかに自慢している。

実は私が此の千羽鶴図を入手したのは今から十年位以前のこととで、それまでは正月の床がけには画師は明らかではないが大和三山を淡彩で全紙の下の方におさめ、その上の方に本居大平の、

さきくさの此三山のつきくさの、うつしゑ見れば古の書等にしるする古ごとの、思ひでらる香具山は、畝火をおしと耳梨とあひあらそへるわかくさの、つまあらそひをいさめむと、やめむと思ひて出雲のや、阿菩の大神はるばに、いでたちまして針間のや印南に來まし、あらそひは早くやみぬとききまして、のり來ましたる御舟をも、そこにうつほせ、いとどまりしづまりましし古事の、今もしのばゆ、しぬばゆることのまにまに、かくぞたうえる

大平

と歌賛のある大和三山の大幅を用いてきた。

いうまでもなく本居大平は宣長の長子・泰庭が失明後、宣長家の養子となつた国学者で、この歌の文字も大平の性格そのままの、おだやかな筆である。

私は不勉強でこの長歌が、大平のどの歌集に出ているのか詳らかにしていないが、さすがに国学の大家本居宣長の後を嗣いだ人だけに見事な歌いぶりである。勿論この長歌は「播磨風土記―揖保郡上岡の里」の伝説と、これに基づいた中大兄(天智天皇)近江宮御宇天皇三山歌の

香具山は畝火を愛しと耳梨と、あひ争ひき。神代よりかくなるらし

いにしへもしかなれこそ、うつせみも妻を争ふらしき

反歌

香具山と耳成山と會ひし時、立ち見に來し

印南国原

の万葉集卷一の二首を踏まえた上での作であると思われる。それにしても此の軸の前の所蔵者も、その保存に極めて

心をつかたとみえ、いま筆を執ったばかりの新鮮さで、私も大いに珍重して新年以外には取り出さなかった。
しかし此の長歌の中で二つ三つ気になるのは、例え千何百年前の伝承とは云え、畝火山を中に香具山と耳梨山を相争うたという、争うと記された字句が年の初めの部屋を飾るには、少し不似合いではないかと心のどこかに、こだわりを覚え千羽鶴図を入手してからは、それに改めたという訳である。大平の長歌もゆっくり味わいたいが今は紙数が尽きた。と同時になにやら自慢めいた話になったことを心から恥じ入っている。

交通雑話

自転車今昔談

「交通と公害」昭和五十三年二月九日掲載

マイカーがなければ夜も日も明けぬ現代から見れば、まるで夢のような話であるが、大正十二年十月二十九日付けの紀南新聞に、次の記事が出ている。

○自転車五千

自転車の利用は時代の進展と共にますます甚だしく、本郡に於いても半期毎に著しく五百台あるいは七百台の増加を示しつつあるが、本年十月一日現在では左の如くにして、自転車普及の最も少ない白崎・衣奈村も今日では各二台を有するに至った。

御坊	七二三	野口	七二	清川	四〇
松原	一五一	丹生	二〇一	下山路	九五
和田	一四〇	稲原	二二二	中山路	三八
三尾	二八	塩屋	一七九	上山路	五一
比井崎	四七	名田	一四九	龍神	一八
志賀	九六	印南	一三六	寒川	五一
白崎	二	切目	一五四	川上	七五
衣奈	二	岩代	八九	川中	九〇
由良	一四二	南部	四四三	船着	一四〇
西内原	七一	上南部	二一五	早蘇	五二
東内原	一六一	切目川	一五三		

湯川 二一八 眞妻 九四
矢田 一三五 高城 八九

なお自転車(注オートバイ)は御坊四・稲原一である。

また翌大正十三年十二月二十七日付けの同紙には

○ 自転車に乗る郡内の女教員総計十一位と題し

自転車で通勤する郡内の女教員はどれほどあるか調べてみると、まだ調査もれがあるかも知れぬがザット九人程であり、ほかに一人は目下練習中である。しかる平野地方の日高平野には一人も見えないのは、実用として便利などということを知っている、何となく気兼ねして乗らぬかと思われ、帰って平野部より山間部に多いのは、実利から割り出されていることは解っているが、予想に反している。

との記事がある。

大正十二・三年といえ、今から五十数年前にあたる。現代では女性ドライバーはめずらしい。というよりも若い女性の間では、自動車の運転免許の有無は、結婚の資格の一つになるうとする傾向がある。まったく今昔の感が深い。

交通雑談

由良守応の「い」

「交通と公害」昭和五十三年四月四日掲載

もう大分前のことであるが、何の気もなしにテレビのスイッチを入れると、由良守応の略伝を放映していた。由良守応は文政十年十二月(一八二七)、今の由良町門前で生まれた上、わが国の交通界の先駆者であるため、興味ふかく其の番組を見おわたた。

まず守応は「もりまさ」と読み、日高郡内で一番はやく洋行した人である。

明治四年十一月十二日明治新政府は進歩した欧米の文物制度を吸収する必要に迫られ、岩倉具視以下百名を前後する大勢の視察団を先進国に派遣した。その一行の中に由良守応が居た。それというのも守応はもともと馬術に長じていたので、その技倆を買われ行く先き先きにおいて、優秀な馬を購入するのが目的であった。一行はアメリカの汽船に乗って横浜を出港してサンフランシスコに上陸。米国を視察の後、欧米各地をめぐり明治六年の秋ようやく帰国した。実に二ヶ年にわたる視察旅行であった。

帰国の後、守応は宮内省に迎えられ皇室の馬車を監督することになったが、あるとき明治天皇と皇后の乗った馬車が転覆事故をおこし、守応はその責任を取って辞職した上、明治七年八月「千里軒」という乗合馬車の営業所を設け、本社を東京浅草においた。馬車はロンドンのバスのように二階式であつたらしいし、浅草から新橋あるいは品川まで、蹄の音も軽く一日に数回往復した。

何しろ日本の営業馬車としては初めてのことであり、ほかに交通機関は人力車ぐらいしかなかった上、ものめずらしさもあつて大いに繁昌し、一時は数十台の馬車をもつまでになった。

しかし当時の東京は道路の幅かせまく、しばしば交通事故をおこしたことが、そのころの新聞に出ていると、この間のテレビ放映されていた。テレビの放映時間が短かつたので、メモする時間もなかつたが画面に大きく、千里軒の馬車逸走

○月二十三日午前八時と新聞の太い見出しの活字が映っていたのをおぼえている。この時は幸い負傷者なかつた模様であるが、次いで人力車と馬車の衝突がおこつた。このようにやつと馬車事業が軌道に乗つたかと思うと、交通事故の続出で、遂に千里軒の馬車営業も閉鎖せざるを得ない状況に至つた。

短期間であつたとは云え由良守応は、前述のように日本都市交通界の、一代先駆者であつたと、私たちはもう一度ふりかえつてみたい。明治二十七年三月十日、和歌山市の病院で歿した。享年六十七歳。その後、昭和三十九年五月三十一日、守応を敬慕する人々によつて、由良町門前の今は柑橘畑に変わっている守応の旧宅の跡へ

「正七位由良守応翁誕生地」

と刻んだ大きな碑が建立され、また興国寺参道の傍らにその顕彰碑も、さらに建てられている。興国寺へ参詣の機会もあらば、此の碑を仰いで、とおい明治初年の守応の業績をしのんでほしい。

春愁

「紀州新聞」昭和五十三年四月二十二日掲載

おさない木々の新芽や雑草の美しい季節になった。

この冬から新春にかけて暖冬などといわれたものの、二月中はかなり冷えこんだ上、三月になつても一向に気温は上がらなかつた。人一倍さむがり屋の私は、冬中ぼろジャンパーを着られるだけ身につけて、いじけこんで時々腰硝子の障子越しに掌ほどの庭の雑木を眺めては、人間は寒ければストーブも焚くし、冷たければ床へはいりもする。しかし草や木は動く訳にはゆかぬ。霜の中でも、冷雨の中でも雪の中でも、自然が暖かくなるまで、じっと我慢をする

よりほかには道はない。

私は寒風に吹きさらされている木々の姿に眺め入っては、一人でほとほとその辛抱つよさに感心した。

他所より暖かいと云われる紀南地方も本格的な春の訪れを感じるようになったのは、今年は四月も五、六日ごろからではなかったかと思う。正直なところ私は、やれやれという気もちで、長かったその冬をふり返った。

鳶山（野口山ともよぶ）の山桜が薄紅の花をつけたのが、茅屋から見えはじめたのは今月の六、七日で八日、九日はもう満開の風情が遠く望まれた。折から植物専門の吉田謙・志賀小学校教諭が来宅されたのを機会に、あれは山桜でしようね、と伺うと、多分そうでしょう。しかし染井吉野もまじっているかも知れません。小鳥が種を運びますからと、笑われた。

野口山の山桜は古い昔から咲き続けてきたのに違いない。私が子供心に美しいと思いだしてからでも数十年になる。話は変わるが私の居村は江戸時代から昭和初年ごろまで、大体百戸前後の家数であった。今では農家が一番おいしいものの、サラリーマン、その他いろいろな職業に従事する人々が入りまじっているが、私の子供時代は村の九〇パーセント以上が自作や小作農で生計をたて、わずかに一、二軒の酒屋・米屋・油屋・紺屋・駄菓子屋・野鍛冶屋さん・大工さんがあるにすぎなかった。

ところが何時の時代どこの村にも、少し世をすねた風流人が居るもので、わが家の近くに二人の老人夫婦と婆さんが居た。爺さんは若いとき二号さんをつくって、その二号さんに村はずれに田舎によくある一杯屋をやらしていたという。私が知ったころは、もう其の店は商売をやめて空き家になっていた。

大正六年（一九一七年）この老夫婦の空き家に医師一家が移ってきた。近所であった上、美人の若い夫人が私の縁辺であった心易さもあって、何しろ八歳か九歳ごろの遠慮を知らぬ子供である。物珍しさも手伝い、友達をさそって、毎日のように遊びに行った。医師の一家には老父と女中さんが居た。老人はそのころ六十歳位であったろう。小柄ながら品のよい人で目を幾籠も飼って、よく玩具のような摺り鉢で菜っ葉や川魚の粉をまじえたのを摺り餌につくったり、小さな如露で水浴びさせるのを目を丸くして覗きこんだりした。また老人は丸い水盤に銭亀を飼っていたが、亀の餌にする蠅を子供たちに捕らえさせては、一銭、二銭で買い上げたりもした。

子供連は診察室も待合室も家族の室にも侵入したが、さすがに昔は「あいまい飲み屋」であっただけに、部屋の数がおおく部屋割りも普通の家とは異っていた。

この医院の一番よい奥座敷は家の南にあつて、十数歩のところを六郷井堰の取水溝が流れ、さらにその先は広い河原があり日高川の清流が瀬音をたてていた。

書き忘れたが、この奥座敷と六郷井の取水溝の間に、古い八重桜の木が二本植えられていた。ふだん医師夫人は奥

座敷でたいてい縫い物をしていた。子供たちは若い夫人の部屋にも無遠慮に上がりこんだ。新婚後、間もない時分で、夫人はもともと華やかな美貌の人であつたが、その時分は匂うばかりのあでやかさであつた。

ちようど野口山の山桜の花と医伯邸前の八重桜の花が毎年、相前後して妍を競つた。若い夫人はよく満開の桜花の前に、私たち腕白どもにおもしろい昔話、いわゆる童話や民話を話してくれた。少年というよりも幼い日に昔話を聞きながら眺めた八重桜の木は、とくの昔に伐られたし、一時医伯一家が借り住まいした旧「あいまい茶屋」は跡方もない。美しかった医師夫人も数年前すでに物故した。桜の季節が来るごとに、無心にあそびほうけた幼少年時代の日の暮れなずむ春の日の長い一日が、ふと心の片すみによみがえってくる。人間はひよつとすると、このような童の時間が、人生でもっとも幸福な時代ではないだろうか、という気がする。桜の花にさそわれての年齢がいない春愁の類と割り切つてよいものかどうか。

交通雑話

昔の交通違反

「交通と公害」昭和五十三年五月四日掲載

林松二氏が昨年暮れの日高新報紙上に「交通違反の今昔」と題する、興味ふかい一文を発表されていた。それによると大正七年代（一九一八）というから、今からちようど六十年前、自転車（一九四六年）の無灯火は科料金五十銭であつたとある。この間から私は少し調べたいことがあつて、昭和二十一年以降の紀州新聞を見せてもらったが、昭和（一九四四年）三十四年八月四日、御坊警察署で交通一斉取締を行ったが、この時自転車の無灯火で十三名が検挙され、それぞれ五百円の科料を申し渡されたとの記事が目についた。

また話が元の大正時代に戻るが、当時、藤田村藤井に瀬戸某という人徳の高い御仁がおられた。随分、風流なお方で、そのころ流行の最先端を行く玉突台を自宅に備えられたり、二号さんに御坊の花街に、れきつとしたお茶屋さんを経営させた上、自分は村の公職に長く就かれたりした。それでいて村人からは何一つ避難をうたれはしなかった。余程、人徳があつたと思うよりほかはない。

この方がある晩、本宅から二号さん宅へ出かける途中でもあつたらうか、途中で無灯火自転車（一九四四年）が警察官に咎められた。いまなら大抵の人は平謝りに謝罪するところだが、氏はそうはしなかった。悠々と自転車を乗り続け、車上から取締官の方に大きな声で、

「藤井の瀬戸〇〇、帳へつけといて」

と叫んだまま走り去ったという逸話がある。当時軽い交通違反は今のように現場で罰金か料金を警官に支払うのではなく、後日納入したものらしい。何にしても瀬戸〇〇氏も、〇〇氏なら警察官も警察官で、すべてがのんびりとユ―モラスのあるよき時代であった。

もう一つ、これによく似た話が交通違反ではないが、軽犯罪法違反である。年輩の方なら御存知の方も多いと思うが、かつて御坊に井上豊太郎という博学多芸で、しかも直情径行の名物弁護士がおられた。愛酒家である時、一杯機嫌で市内を歩いているうち、急に尿意を催したため街頭で放尿をはじめたが、折悪く警察官にとめられた。そこで井上弁護士曰く

「貴様、新米だな。御坊へきて井上豊太郎を知らぬのか！小便ひつて悪けりや共同便所でも造ってからぬかせ」と逆襲したという逸話もある。もちろん井上説が逆説であることを承知で、めったにある話ではないので書いてみた。

交通雑話

昔のハイヤー料金

「交通と公害」昭和五十三年六月四日掲載

今でも年輩の人なら記憶しているだろうが、川辺町小熊に「矢田温泉」というのがあって、湯治客と遊興客で人気を集めていた。男湯・女湯・家族風呂のほか自炊部屋を設け、酒間をサービスする女性さえいた。(一九三八年)大正十三年十月二十八日の紀南新聞の広告に

「矢田温泉」此の度、当温泉にては浴客様の御便利と経済を考えまして、自炊部屋を新築致し、ごく安い部屋代のみで自由に提供致しますから、どうぞ御ゆっくりと御遊びに御来し下さいませ。尚又今回皆様の御便利を図るため、当湯の鉱泉を御分け申しますから御一報下さいませ、当方より持参致します。

このように宣伝している。

このころは都会では円タクつまり、基本料金一円均一のタクシーが流行していた時代で、御坊でも大正十四年七月二十四日の紀南新聞に、

自動車料金大幅値下げ　どうか御利用下さい
と大きな見出しで、

酷暑の候各位益々御清祥の段奉賀候。陳者毎々御引立に預り有難く御礼申上候就いては今般平素の御愛顧に報いる為、貸切料金を左の通り大値下げ断行仕り、敏速に御用命に応じ可申候間、遠近に不拘電話一五九また

は二六〇番へ御申聞被下度御願申上候。

六人乗で町内どこまでも

一円均一

池田大師までは

六円〃〃

浜の瀬の夕涼みや汽船の連絡

二円〃〃

比井・印南までは

八円〃〃

南塩屋の大師詣りや海浴には

四円〃〃

由良へは

九円〃〃

道成寺までは

三円〃〃

大正十四年七月十九日

白浜自動車株式会社御坊営業所

電話 一五九・二六〇番

と長文の広告をのせている。当時、玄米壺石が三十五円から四十円であつた。これから考えると現代のタクシー料金は、高いようでもありまた安いようにも感じるが、はたしてどうであろうか？、それから二年程した昭和二年十月三日の紀南新聞に

○日高タクシー矢田温泉行き一日から開始の記事をのせ

かねてから準備中であつて、当地日高タクシーは愈々一昨一日御坊矢田温泉間の定期運転を開始した。営業所は中町別院筋向いで、料金及び発車時間は次の通りである。として

御坊―藤井 片道二〇銭 往復三〇銭

御坊―千津 〃 三〇銭 〃 五〇銭

御坊―温泉 〃 四〇銭 〃 七〇銭

御坊発 午前七時 温泉発 午前七時半

御坊発 午前九時 温泉発 午前九時半

御坊発 午前十一時 温泉発 午前十一時半

御坊発午後一時半 温泉発 午後二時

御坊発午後三時半 温泉発 午後四時

御坊発午後五時 温泉発 午後六時

とバス形式をとりはじめたことを報じている。今から思うと、のどかな時代であつたものである。

交通雑話

紀勢線の工事

「交通と公害」 昭和五十七年七月十日掲載

この秋には国鉄紀勢本線の電化が行われるという。いよいよ汽車が走るようになったとよろこんだのも、つい昨日・今日のこのように思うが、もう五十年の歳月がたった。

（一九二八年）
昭和三年四月八日の紀南新聞、第四一二八号に

小熊・入野間の墜道貫通貫通

六日は祝い

という見出しで

紀勢西線に属する路線なる矢田村小熊・入野なる墜道工事も愈々五日午後貫通したので、当日は従業員一同休業し、之が貫通を祝った。

と短い記事があり、続いて四月廿一日同紙に

貫通した小熊墜道

廿二日に金蔵寺で祝賀会を催す筈

として

予てより西本組配下・小山組の手で貫通工事を急いでいた小熊墜道工事も、いよいよ明廿二日午後一時より小熊・金蔵寺に於て、同地有志及び関係者を招待、盛大なる祝賀会を挙げられる筈。

の記事がみえる。

ところが其の直後、西本組組長西本健次郎氏の令息が急逝したため、結局この祝賀会は延期されて廿九日に行われた。

当時、私はまだ廿歳になるかならぬの若年であったが、勤めの関係でその末席に招待された。業者がはじめて芸者を見たのはこの時であったし、村人の大多数の人初めの機会とあって、宴会場にあてられた本堂の障子を明け放って、見物にきたのを覚えている。

そのころ村には二ヶ所に飯場がつくられ、十数人宛の人夫がいたし、村の若者たちも農仕事のかたわら、トロッコ押しに雇われて働いた。ダンブカーもブルドーザーもないトロッコが最新式の、土砂運搬機であった。茅屋の後方百米ぐらいの所に、合祀以前、加茂明神が鎮座したという、小高い丘があったが、ここの土が取りこぼたれ、線路が築かれた。大勢の土木作業員が入りこんだが、村人との間にはトラブルはなかった。それどころではなく人夫たちは夜

間や雨の日は、村の娘たちの所へ遊びに行った。

工事が終って飯場が引き払われる時、二人の娘が人夫たちと村を去った。人夫の一人は遠い島根県の出身で、後日、郷里の島根県のどこかで、菓子屋さんとして幸福に暮らしていると聞いた。どこにでもありがちなことながら、紀勢鉄道工事にまつわるエピソードである。

交通雑話

飛行機見学

「交通と公害」昭和五十三年八月二日掲載

現代は交通機関が発達した結果、楽に大阪や京都・奈良も日帰りで見物できるようになったため、小学生でも和歌山や大阪・京都の市街を知らぬものは少なくなつた。

しかしこれも昭和五年^(一九四〇年)十二月十四日、紀勢鉄道の御坊―印南間が開通し、さらに戦後バス輸送が発達して、昭和三十九年国道四十二号線が完成をみて以来のことと、それまで上方に出かけるには御坊港から、小さな汽船を利用するより外はなく、今のようになつた。そう観光旅行など手輕にはできなかった。

そうした訳で紀勢鉄道の開通した時の沿線町村民のよろこびは大きく、小学生が短い区間を試乗した記事が、各学校の沿革史の中によくみかける。

私どもが小学生であつたころ、時々、御坊の町へ巡廻動物園や、サーカスが興業にきて今なら学習参考という訳であるう、全校生徒が先生に引率されて見物に行ったものである。私が象や虎やライオン・豹・錦蛇を初めてみたのは、たしかこのような巡回サーカスであつたと記憶する。遠い昔のことであるが思い出すと、淡い郷愁めいたものがよみがえってきて懐かしい。

ところで、これらと一寸かわつた見学遠足の記事が、川辺西小学校の「百年百思―百年史」の中にみえる。記事は^(一九二六年)大正十五年六月九日の条で、

飛行機天田河原ニ飛来ス。四年以上見学ス。

と短いものがあるが、これに符節を合わせるように、大正十五年六月九日の紀南新聞、第三五七六号に

◎ 飛行機来る！という見出しで

突風と戦いつつ見事な着陸ぶり。六月八日有田郡金屋より十九^キ飛行、十一時四十分・日高河原へ着陸、所要時間二十七分。

とある。私たちの見学はその翌日に当たる。

今なら航空機も日進月歩でジェット機や大型ジャンボ機が空を飛び交い、飛行機などはめずらしくはない。しかし大正十五年ごろは一大ニュースであった。おそらく日高地方へ飛行機が乗り入れたのは、これが最初ではなかったかと思う。天田河原の着陸した周囲に板囲いをし、入場料をとって見学させた。たしか下駄ばきの水上機であったような気がする。もうあのような旧型の飛行機は、航空博物館へでも行かねば見られない。茫々五十余年の昔である。

交通雑話

谷口飛行士

「交通と公害」昭和五十三年九月十三日掲載

むかし、私がまだ専売公社に勤めていたとき、少し後輩に予科練あがりの男がいた。予科練と書いても通じない世代の人が、次第に多くなりつつあるが、わが国が第二次世界大戦中、戦闘員の不足を補うため、十七・八才から廿二・三才の青少年を動員して、軍事教練を実施した上、これを戦地に送りこんだ。つまり軍事予科練習生のことであったかと考えられる。この男は予科練の中でも航空隊に属し、阿蘇山の上も何度となく飛んだ。もう少し戦争が長びけば特攻隊として、敵中に散って行く運命にあったと、しばしば回想していた。

こんな話を持ち出したのは、実は六月二十六日から二十九日にかけて、第六回和歌山県老人の船で九州に旅行をし、第三日目に阿蘇山にバスで登ったが、生憎その日は雨模様で、山頂に着いた時は、すっかりガスにおおわれ、雄大な山の眺望がかなわず、山上のドライブインで、しばらく時をすごした。その時ふと何十年前にきいた、かつて共に職場で働いた予科練生還の男の話を、思い出したからほかならぬ。

ところで私は世間知らずで、この年令になるがまだ飛行機に乗った経験はなく、例によって古新聞をめくってゆくうちに、川辺町和佐・当時の丹生村和佐から、飛行士が一人出ているという記事が目についた。昭和三年^{一九二八年}一月十九日の紀南新聞・第四〇六〇号である。ちよつとめずらしい記事なので次にその全文を転載してみる。見出しは

本郡初の飛行士

丹生村の谷口氏免状下附さる

と二行に大きな活字で組み、

本郡丹生村大字和佐・谷口米一氏は数年前より民間飛行学校に入学し、操縦術を研究中であつたが、昨年十一月十二日附を以て通信省から二等飛行操縦士技倆証明書を交附されていたが、更に十一月三十日附を以て、左

の如く二等飛行士の免状を下附され、今回通信省から告示された。

二等飛行機操縦士免状

使用し得べき航空機 アプロ式ニューポール式五〇四型。ニューポール式八一型。

△ 曲技を行うを得ず。作業用飛行機を操縦するを得ず。

×

×

×

因みに、同氏は本郡初めての飛行士であるが、過般帰郷の際も免状を交附されるれば、一度故郷訪問飛行を行はんと云っていたから、さいさん其の雄姿を日高の空中に現わす事だろう。

何しろ五十年も昔の話である。谷口氏が御健在であれば、もう余程の老年輩のはずである。其の後の氏の御消息を御存知の方のご教示をお願いする。

日照り

「紀州新聞」昭和五十三年九月二十二日掲載

今年の夏はきびしい暑さが続いた。氣象観測が始まって以来のことであるとか聞いた。ようやく幾らか涼しさをおぼえ出したのは、九月も十日ちかくなつてからである。

寒さには弱い、暑さには割合強いと自惚れていた私も、今年の夏にはすっかり参った。ほとんどこれという程の仕事もせずに怠けてしまった。寒いと云うてはちぢこまり、暑いとこぼしてはのびてしまい、これでは仕事らしい仕事のできる筈はない。私も昔はこうでもなかったと思うのだが、やはり年齢のせいかも知れぬ。

お負けにこの夏は雨が少なく、かんかん照りであった。日高平野付近は母なる河、日高川の恩恵と灌漑施設が進歩したおかげで、どうやら大きな被害はなかったものの、テレビや新聞はしきりに各地の旱害を伝えていた。

いま机辺にある各地の旱害資料を見ると、大正三年小川仲記編集の「丹生村郷土誌」に、

（一八八三年）

明治十六年癸未（みずのとひつじ）の夏季に数月間、雹滴の降雨無く近年稀なる大旱魃なりければ、農民等は

高野山の火を迎へて松明に点火し、連夜田畑の周囲を巡回し或は神社仏閣に参拝し、或は山上に火を焚き、或は心経を読誦したれども寸効も奏せずして、大に困頓を極めたり。大字松瀬と和佐の農民は日高川に水車を仕掛けて、低地の耕田に汲み上げ、川側の地に聊か灌漑しければ、下流なる野口村の大字野口の農民等は、九月拾日の未明より男子残らず総出にて、鋤或は熊手を携え行厨（こうちゅう・べんとう）を腰にして押し寄せ来たり、川浚てふ名義にて水車及び堰堤を破壊しなければ、これを防御せんとして一大争鬭を演じ双方に幾多の負

傷者を出すに至る。為に郡吏員及び警察官等出張し、百方斡旋して辛くも鎮定せしめたり。

とある。またこの時押しよせた野口側の記録である明治四十一年、中村政市の編した「日高郡野口村誌稿」には、

明治十六年夏、雨降ラザルコト六十五日、日高川ノ水大イニ減ジ水田灌漑ニ差ツカユ、和佐・入野・玄子・松瀬・早藤ハ日高川ニ水車ヲ架ケテ川水ヲ汲ミ上ゲ水田ニ灌漑スルニヨリ下流一層減水シ井堰ノ如キ大イニ困難シ故ニ九月十日野口村民男児残ラズ歟・熊手ヲ携ヘ腰弁当ニテ川浚ト称シ、水車及関係リヲ残ラズ切流スニ及ブ。矢田村小熊ハ草履ノママ通行スルヲ得タリ。

とほぼ同じような記述がみられる。このほかに、昭和七年十一月、野口尋常高等小学校編の「野口村郷土調査」にも、

明治十六年夏、雨降らざること六十五日、日高川の水大いに減じ、田面亀甲白裂を生ず。村民日夜水引に奔走し毎夜火を山上に焚きて雨を乞ふ。日高川の上流和佐・入野・松瀬・玄子は水をせき水車により川水を汲み上げたれば下流更に減水し、野口村民遂に九月六日水論を起こし、九月十日男児残らず歟等を持ちて川さらへと称し水車及堰を切り流す。然れども直ちに郡吏出張して和解する。其際官当局より救済金により救われたり。と前掲の二書と相似た記事を遺している。

今夏の旱魃は六十五日間も雨一滴も降らずという程でもなかったが、降雨量はおしめり程度であった。日中はもとより夕方には草木はぐったりと首を垂れ、水利の悪い田畑の作物は、まさに氣息奄々見るに忍びなかった。私は日が傾くと小さな畑の野菜や、挿し木からやつと少し大きくなった櫛に、せつせと水を運んだ。

それにつけても日高川の恩恵をこの夏ほど痛切に感じたことはない。わが家から十数歩の所に若野井堰から取り入れた井溝の水が、こんこんと絶えることなく流れ続けて御坊市周辺の田畑と人々の命を養いつつあるのだ。ありがたいことである。

あれはいつのことであつたか古い日記帳でもとり出さねば明らかでないが、私がまだ子供あがりの頃であつた。二、三年旱魃に見舞われて、三国山、部落で一番高い標高二百餘の山上へ、薪を一束づつ持ち部落の一戸から一人が登つて雨乞いの火を焚き、般若心経を唱えるのに同行したことがある。山頂から望むと周辺の村々の山上でも、雨乞いの火を焚いているのが、はるかに美しく目に映ったのが、つい昨日今日の夜のできごとのように思い出されるのが、もう六十年ばかりも昔のことになっている。

高野山奥の院御廟朝前の聖火を、部落の代表者が貰ってきたり、美浜町三尾の龍王神社へ部落中がそろつて、砂ぼこりの遠い道を雨乞い祈願に参ることも、このあたりの村々の雨乞い習俗の一つであつた。南紀土俗資料（大正十三年刊）には雨乞踊歌二編が収録されているが、私がおぼえてから雨乞踊の話はすでに聞いていないし、丹生郷土誌にいう「松明に点火し、連夜田畑の周辺を巡回云々」は記憶にない。

人間は生活をどん底まで切りつめると、火がなくても生きるだけは生きられる。しかし水がなかったなら死を待つより外はない。それほど水は大切なものである。各地に雨司神社や雨乞山が今もあるのは其のためである。近年灌漑、水利施設の進歩で村の森かげにひっそり鎮ります雨司さんや、人里から離れた雨乞山が次第にうとんじられつつあるが、忘れてはなるまい。

美山村の古跡めぐり

「紀州新聞」 昭和五十三年九月十七・二十三日掲載

平家落人部落と王丸谷の牢獄

小谷 緑草

昭和五十三年七月七日、中津芳太郎さんと清水長一郎さんが、川原河の加門大安さんの案内で、美山村の古跡見学をするというので、私も同行させて貰った。

かねてから中津さんは民話を、清水さんは碑の調査を続けている。中津さんは日高短歌会長で、清水さんは日高郡郷土史研究家の筆頭である。私は日高郡内の伝説や史実を小説に書きたいと思っている。

巽三郎さんは私に「くだらんもの書かんと、郷土史の論文に専念せえ」と怒る。紀州新聞の源地の若旦那は「緑草が女と縁を切ったらあかん、女の話を書いて呉れ」という。私は郷土史も小説も捨て切れないでいる。

戦後私は、清水さんの書斎通いをして、天井に届くほど積み上げてある郷土資料を写させて貰った。昭和（一九五四年）三十四年に「牧野兵庫頭」というのを借覧した。その中に、丹生村猪内川出身の毎日新聞記者西瀬英一さんの「牧野兵庫父子の哀史」という一文があった。私はそれを読んで小説に書くため、美山村李の牢獄跡を見学したいと思っていた。その念願がやっと叶ったのである。

この哀史を詳細に書けば、原稿用紙数百枚の分量であるが、ミニスカートをまくり上げるように端折って、梗概を書くと、次の通りである。

紀州徳川家初代頼宣が、本宮で金弥という可愛い子ちゃんを見つけ小姓にした。金弥は才知にすぐれ、頼宣の寵愛を受けてトントン拍子に出世して、牧野兵庫頭長虎と改名し六千石の家老になった。

慶安四年（一六五一）五月、由井正雪・丸橋忠弥等の幕府転覆陰謀事件が発覚した。押収された一味の連判状に、頼宣の虎の印が押してあったから、大騒動になった。

俗説では、牧野兵庫が一味に荷担し、虎の印を盗み出したという悪人説や、陰謀に荷担したのは頼宣で、兵庫は主君の罪をかぶって捕らえられたのだという忠臣説もある。

南紀徳川史には、兵庫が藩の老臣と口論し脱藩して捕らえられたので、それは、正雪事件の前年の十一月ということになっている。

しかしこれまで、多くの史家がこの南紀徳川史の記事に疑問を持ったようである。私も兵庫忠臣説で小説を書いてみたい。

捕らえられた牧野兵庫夫妻は、三男王丸（三太郎）、四男藤丸（鈴丸）、五男千代丸と共に日高郡李村（美山村）の王丸谷に幽閉され、長男新蔵、二男伝蔵が日高郡本川村（中津村三佐）の獄に入れられた。

それから一年後に、兵庫だけ新宮藩に預けられ、更に半年後田辺藩に移され、その年即ち承応元年（一六五二）十月病死した。殺されたという説もあるが、墓が田辺の法輪寺に現存している。

金弥が頼宣に召出された時十五才で、それを寛永十一年（一六三四）に頼宣が熊野巡航した時とすれば、兵庫は数え年三十三歳で死んだことになる。

王丸谷に投獄されたとき、藤丸は三歳、千代丸は赤ん坊であつた。千代丸の乳母は、李村の井原辰右衛門の妹で、一生獄で母子に仕えたという。

元禄十二年（一六九九）二月、牧野藤丸は牢番を殺し、牢を破って近江の大津まで脱走したが、紀州藩まで連れ戻され、切腹を命ぜられた。牢獄生活五十一年、五十四歳であつた。

藤丸が破牢したとき、母も乳母も既に死んでいたが、兄の辰之進（王丸か）と千代丸がまだ生きていた。今も美山村に墓や遺品が残っているとのことなので、私はそれをみたいと念願していたのであつた。

その朝六時に芳養駅から汽車にのり、道成寺駅に下車すると、すぐバスが来た。中津さんが乗っていた。次の千津駅から清水さんも乗り込んで来た。

バスは県道上初湯川御坊線を猛烈なスピードで走る。御坊と日高川奥地を結ぶ主幹道路だが、それにしても狭すぎる。やっぱりこの沿線から県議を出さんとあかんと思う。

推薦候補を誰にしようか。郵便局長なら皆知っているが、私は政治にはうとい。龍神上御殿のお綾さん、下御殿の鈴枝奥さん、滝頭の今北商店の若奥さん、高津尾の高尾よねさん……え……それから、西川好次郎さんに西川清定さん、この六人のうち誰の応援演説に行こうかと考えているうちに、川原河に着いた。

すぐに中津さんに案内されて、加門大安さんを訪ねた。お名前は子供の頃から知っていたと思うが、お目にかかるのは、はじめてだ。

国定忠治みたいな人かと想像していたが、大学教授みたいな人だった。教授の案内で、私立大学みたいな立派な建物にはいつて行つた。ここが開発センターだそうそう。次々エライさんが出てきて中津さんと清水さんと話している。私は小さくなって、ネコをかぶって、廊下を通る娘さんのボインにみとれていた。隆起した線が美しい。なるほど美山村だ。名山だ。

玄関の突き当たり、鹿が立ちどまって、こちらを見ている。立派な角だ。民家に飛び込んで来て捕らえられたという。猪の子、リス、鴨緑江の筏もある。清水さんは、その筏がほしいという。私は、どうせ盗んで帰るのなら鹿にしようと思った。

中津さんが写真機を出して来て「この写真機電池切れてるんやけど、川原河に入れてくれる店ないだろうか」という。

「なんで御坊で入れて来なんだんや」

「氣イついたん、ゆうべ十時ごろやつた」

中津さん、桜紙持たんと、女の子連れてモーターへ這入るんやろか。

エライさん大勢と同乗したマイクロバスは、川上バスを渡り右折して皆瀬を過ぎ桂木峠にかかった。私は地図と車窓を交互に見つめていた。右手に加門大安大学教授の顕彰碑があった。エラインだナ国定忠治より名前もええワ。

峠の頂上にトンネルがあった。半分素掘りだ。峠を下ると待望の李だ。ところがバスは李部落を通り過ぎ、法事峠を登りはじめた。

李下で冠を正さず通りすぎるのか、それとも法事に招かれてから王丸谷へ行く気か。気が氣でないが、乗りかかったマイクロバスだ。瓜田に車輪をふみ入れようと、坐っているより外はない。法事峠にもトンネルがあった。

法事ではお茶も出ず、初湯川もノンストップだ。お茶はさつき、前の席のエライさんが魔法瓶をひっくり返して、僕の足元に初湯川のように流れて来た。

いよいよこれは、只事ではありませんゾ。川上一家がなぐり込みの助ッ人に私たちを何処かへ拉致するらしい。頭のニブい私も、今頃になって、ハハンと氣がついた。さつき開発センターで中津さんが紀州新聞を見せてくれた。それに五輪の塔を調査すると出ていた。七輪はサイラを焼く時、女房が使っているので知っているが、五輪のことなど私にわからない。五輪霧中だ。

上初湯川小学校前で停車し、ブツブツと鳴らしたら、ヒゲの男前が乗り込んで来た。川上一家では定めし名のある人物だろう。酒を呑みねえ、すしを食いねえと云うかも知れない。これで、なぐり込みの一団は、私たちをふくめて九人になった。あとで知ったのだが、このエライさん方は、文化財保護審議委員さまだそうだ。私は、将官の乗る特

別列車に同乗を命じられた一兵卒の如く、小さくなって坐っていた。

バスは走り続ける。上初湯川部落を過ぎると、「七人塚」という木の立て札があった。きれいな字だ。親切な建て札だ。

私の後の席に座っている清水さんに誰かが話しかけている。

「みんな系図を馬鹿にするけど、真実も書いてある……」と云っている。私の日頃の持論と同じことを云っている。私は寝食を忘れないで、紀伊の国の諸家の系図を集め、それによって、紀伊戦史年表という三文にもならぬものを作っている。しかし今はルーツブームだ。小づかい稼ぎに偽系図作成会社を設立し、小使兼社長に就任した。どうかごヒイキに、まいどあり。

さて、後の席の系図札賛者が太刀ならぬ名刺を振りかざし私の席へ襲撃して来た。

「ヤアヤア近くに坐っていて、よく聞け、我こそは平城天皇第×代の後胤三十木兵之助の遺系井原写真官一雄なり、いざ尋常に勝負勝負」と呼ばわったり。ゆれるバスの中だが、相手にとって不足はない。私も桓武天皇の後胤池ノ大納言の孫、小谷城の一族だ。

「まあ傍に坐わんなはれ」

そして、その荒武者から、井原家系図を借りる承諾を得た。

中、庄という部落を過ぎると「二股五郎斬死の地」という立て札があり、和田、鉢という二部落を過ぎると「石降又左衛門斬死の地」という札が立っていた。

いずれも平家の落武者をこの山奥まで追い詰めてきた源氏の討伐兵だ。七人の討伐兵が逆にあつち、こつちで平家の落人に殺され、死体はさつき通り過ぎた七人塚のところのドン瀏へ蹴り込まれたのだそう。その時の血で今でも七人瀏は赤い。

何しろ落人は、お姫様を連れていたから、エエトコ見せようと奮闘したらしい。桓武平氏の子孫である私にとって嬉しい話である。

鉢部落を過ぎたあたりから、谷の樹木が更にうっそうとして来た。バスは、初湯川沿いの林道を谷奥へと走り続ける。

吉本さんという職員が、バスを運転してくれているのだが、この人美山村随一の運転のベテランだという。さぞかし女の子にもてることだろう。

樹林の中に合歓の大き木がみえる。電柱みたいな幹だ。花が咲いたら美しかろう。合歓の花に似た夢みるような女の子を連れて、この山道を肩を並べて歩いてみたい。

女の子が立ち止まって私と向き合った。引き寄せようと思ったたら幻がさめてバスがとまった。道端に「清井の上」という立て札があった。ここから谷へ降りて、向山へ登るのだという。谷底へは、鴨越えの逆落としてみたいな道だ。川上一家の面々は、バスで谷底へなぐり込めるかどうか討論した。

ええい面倒なりと、吉本広美ノ守畠山重忠、バスにひと鞭呉れて、急坂を下りはじめた。イナヅマ形の急坂を下って、無事川向こうに停車した。

ここから山頂へも、トラックが登れる幅員の林道があるが、地球の表面を猪が掘り返し、七・一八水害が三度襲来したような石コロ道の急坂である。

印南川ほどの谷川に、清水が満々と流れ下っている。ドラム缶で持ち帰って、お粥さんを炊いたら旨かうかいと思う。

梅雨明けの強い陽差しの中を、徒歩で登りはじめた。加門教授だけバスに残られた。

七・一八水害の大崩れを防災工事した山の迫から、豊富な水が落下している。道端に釣鐘草のような花が咲いていた。提灯花というそう。清水さんは蛍草だという。もう一人の学者はカラスノシオンベタンゴだという。美山村の鳥は、提灯花の下にもぐり込んで、上向きに小便を飛ばすのであろうか。鳥の面に小便という話は聞いたことがない。道の上も下も、山一面杉・桧の植林をしている。もう茶碗のまわりほどの太さだ。御坊の中川藤吉さんの持ち山だそう。中川さんは御坊のお邸で、ケヒョン踊りの稽古ばかりをしているんやと思ったが、国家百年の大計を樹て、為になることをしてくれてはりますワ。

数百回登ったとき、前方右手の杉木立の中に五輪塔がみえた。ここが、私たちを拉致してきた目的地、平家落人部落跡「瀬ノ上」であった。

寿永二年（一一八三）都を追われた平家は、西海に逃れ、同四年三月壇ノ浦で亡んだ。生き残った人々は、熊本県の五家荘・宮崎県の椎葉・徳島県の祖谷山等人跡未踏の山奥に分け入って隠れ住み、落人部落をつくった。

平重盛の嫡男維盛が、屋島の陣屋を脱出して、熊野の色川に隠れ、のち古坐、龍神奥等を経て、有田奥の上湯川に移り住み、その子孫小松氏が、今も住んでいる。

今年の一月、私は紀州新聞に「生きていた維盛」という小説を載せた。しかし私は、美山村初湯川の奥に、平家の落人部落があることを今まで知らなかった。

五輪塔は五基で、完全なのは一基である。その五輪塔は、地・水・火・風・空をあらわす別々の石を積みかさねたもので、方々でよく見かける一石を五輪方にしたものより少し大きい。私たちは、その周囲に坐り込んで、昔を想像し語りあった。付近には落やドクダミが生えていて、道を隔てた上は、真竹の大竹藪である。

壇ノ浦の戦いのあった前の年、三十余名の平家の落人が初湯川を分け登ってきて、七人塚付近で源氏の追っ手を全滅させ、この瀬の上に隠れ家を作った。その子孫がふえて、江戸時代に上のお屋敷に十八戸、下のお屋敷に十八戸、計三十六戸あったという。

五輪塔は掘り出してから、数回位置が変わったので、元の位置がわからなくなったが、竹藪の中に寺の段があり、この辺に寺やお宮があったという。

伝説によれば、この瀬の上から笛や太鼓の音が聞こえたとのことで、落人たちが奉じてきたやんごとなき姫君を慰めるため踊ったのだという。阿弥陀踊り、一名シヨンガイ踊（笙絃踊）という盆踊りが今も伝わっている。

一行は、そこから更に、大竹藪の上まで登り、杉林の急勾配を下ってみた。山の斜面は畑のような段々になっている。各段は、山を取り巻くように果てなく続いており、幅は一間乃至数間で、石垣は崩れて四散しているが、段は水平で、畑というより田であつたらしい。今は全体杉林である。

寺か宮の据石だつたらしい石も転っている。幾段も下りて来たとき、一カ所に石を積み上げた所があつた。この下に何か埋めてあるゾと勇みたち、石を取り除きにかかったが、学者の一人が、山師の小屋の跡だと云つたので中止した。

都で貴族生活をしていた平家の人々が、この山にこれほど広い田畑を開拓するのに、血のにじむような苦勞をしたことであろう。

その子孫が、山の生活に馴れ切り、平和に暮らしていた時、天保の飢饉が来た。食い物がなくなり、野山のものを食い尽くし次々に死んで行つた。痩せおとろえた女が幼い子供を抱きしめ、破れ障子にすがつて、「ギシギシ食いたい」「トロロイモ食いたい」と泣きながら、小判をくわえて死んだという。

たつた三軒だけ、下流の鉢部落の辺まで逃れて生きのびた。それが筒井、中塚、杉谷家の先祖だという。

この「瀬の上」とは初湯川谷のどの辺にあたるのか地図を出してみた。そして八斗蒔峠の北斜面の中腹だろうと推定した。谷向かいに石堂山らしいものが見えた。

瀬の上は、昭和十年（一九三五年）から十七年にかけて、自然林を伐つたが、その頃まだ石垣の完全な箇所があつたという。昭和二十五、六年ごろ植林したのだそうだ。

車で待っている加門さんのことが気にかかり、下山した。川で思い切り水をのんだ。十一時三十分乗車して、元来た道を引き返した。途中中ノ庄の観音堂に参拝した。この堂は中谷という谷の入口の右手の山麓にあつた。

天保飢饉の時、生きのびた三軒が持ってきた刀や宝物が沢山あつたが、七・一八水害で流失し、鰐口一個だけ残つた。それが観音堂につるされていた。

杉谷家の先祖は、瀬の上の杉谷大明神の神主で、お湯釜を一個持つて来ていた。その釜に「杉谷大明神、大風天皇」の銘があった。近年まで上初湯川小学校の上の阿弥陀堂に置いてあったが、青年達が学校の下の川原で、酒盛をした時使用し、ほったらかしておいたので流失したという。

加門さんの話によると、百年程前、瀬ノ上で椎茸の天然栽培をしたことがあった。椎茸を生やす原木は、四、五尺位の長さに切り、原木の切り口を叩くと、椎茸の自然菌が付き易いという。これをボタ打ちと云い、時化の日に打つと効果があるので、時化打ちともいう。

ところが時化はめったにないから、山に濠を掘って水を溜め、水にひたしてボタ打ちをする。この濠を作るため瀬の上の段を掘っていたら、金の仏像が出て来た。その時原木作りの人々の炊をしていた平松太助の弟の銀次郎という十五、六歳の少年が、その仏像を所有していたが、後年九州へ出稼ぎに行く時、持つて行ってしまったという。

上初湯川小学校の応接室で弁当を戴く。応接室に「温故知新」の額がかかっていた。加門さんの見事な字である。今日は古きを訪ねまわっている。新しきを掘り出したいものだ。

宮地校長先生が、古き文書の写しを一枚出して来て、読んでくれという。原書は加門さんの実家の前田家にあるという。大急ぎで解読文を書きなぐった。安政三年（一八五六年）の寺請一札であった。この山里で古きを訪ね回れば、いろいろ出て来そうな気がする。

弁当をすませ、運動場入口の上手にある集会所で、古いランプを幾つか見せて貰った。ここは民具館を兼ねているらしい。把手の下に電球のようなホヤのついた奇妙なランプがあった。ホヤの側面に、カンテラがついている。夜道に持参すれば、足元が明るかろうと思った。

それから学校の前の山に登った。竹藪の中の小径を登って行くと、右手に前田家の墓地があった。この辺では一軒一軒別々に自分とこの墓地を持つているのだそう。

立派な宝篋印塔が四基並んでいた。墓地の下の畑にあったのを移し上げたのだという。苔を落として字を読もうとしたら、半袖の瘦腕に蚊が幾匹もぶら下がった。この辺の蚊も、天保の飢饉らしい。急いで山を降りた。

一時四十七分乗車して、法事峠を越え李部落に入った。愛川沿いの道に突き当たった三叉路が狭く、バスが右折できない。前は川の断崖である。

「危ないゾ、一旦下もへ下ってから戻って来たらええ」と、誰かが云ったがもうおそい。バスは二進も三進も動かなくなった。吉本さんはみんなをハラハラさせながら、前へ後へと、バスを一寸刻みに動かし、やっと方向をかえて走り出した。

愛川沿いの道は狭い。一、二キロほど走って停車した右手に王丸谷があった。石垣をきれいに積んだ段々田が谷奥に

続いている。狭い谷の両側も奥の行きづまりも屹立した高い山で、牢獄を設けるのには格好の谷である。

清水さんにたのんで、王丸谷の全景を写真に撮ってもらった。七・一八水害に、この谷の田が全滅し復旧したそう。谷川沿いの径を上って行くと、車道から五枚目の田の左手の山際に、牧野一族の墓が見えた。田ノ甫径を向かい側に渡り、五寸幅ほどの墓参専用道路を一系列のテクシーで、蟹の横這いさながらに伝って行く。田の上にのしかかった高い径で下は田だ。墓は急斜面にへばりつくように置かれてある。

昭和九年^{一九三四年}毎日新聞に掲載の西瀬英一さんの「牧野兵庫父子の哀史」には「……獄舎の跡はすっかり水田になっているが、なほ荒涼極まる谷底である。的場区長が腰の鎌で丈なす雑草を刈り尽くして呉れると、高さ九十^{サテ}の苔むした墓石が一基現れた。……延宝八年十一月二十四日賀宝輪慶信女霊位の文字が判読される。……李の里では乳母の墓とよばれている。……更に北の入口に近い雑草を刈って貰うと同じような石塔と六地藏が現れた。天和二年^{一六八二年}三月二十七日董覚信女霊位と判読される。この基石は高さ七十七^{サテ}……この地藏尊こそ兵庫と其の子を形どったものではなからうか。勿論この墓こそ、乳母に先たれたる事二年後空しくなった兵庫頭の内室の墳墓であろうと思はれる」とある。この記事を書いたころは、墓が下の田の傍らにあったが、七・一八水害後、ここに移されたという。乳母の墓は水害で流失し、内室の墓と六地藏が並んでいる。

名残尽きない王丸谷を後にして車に乗り、さっき登ってきた川沿いの道をしばらく下って停車した。道の左手に、寺本という雑貨店があった。この店の近所の家に、藤丸遺品の鈴があるそうだが、家の人が川向かいへ仕事に行って留守だという。店から電話をかけてもらい清水さんと二人で、店の座敷に腰掛けてドリンクをのんでいると、外で誰かが私を呼んでいる。出てみると、下の道路に年輩の婦人が立っていた。

「この女の人の家に藤丸のお椀があるのですが……」

「遠いのですか」

「王丸谷からちよつと奥です」

私一人のため、戻って戴くのは恐縮だ。

しばらくすると、若い奥さんが川向から帰って来てくれた。その奥さんの案内で店の奥の山の小径を登る。登り切ると思いがけない程広い屋敷があった。断崖の下は愛川で、よい眺望だ。城の殿様になったような気持ちになる。愛川はアタイ川とよむ。「あたいかわいいの？」と女に甘えられているような名だ。

座敷に上がらせてもらって、小箱に納めた鈴を拝見した。高さ五・五^{サテ}の真鍮の鈴で、藤・松・竹・鶴・亀を彫刻してある。カラカラと可愛いらしい音がする。三十木矢之助が、鈴を庭に持ち出し、紫の風呂敷をバックにして、写真撮って呉れた。

鈴のある井原家は、千代丸の乳母の子孫で、さつきバスが難行した三叉路の向かいにも、同じ子孫の井原家があるという。乳母もこの若奥さんのような美人だったのだろうと思う。

バスは又、王丸谷の方へ走った。先程の年輩の婦人も同乗している、待っていて下さったらしい。王丸谷の入口を過ぎ、数百^ミ走ると、西垣内という小さな浅い谷に栗林家があった。全くの一軒家だ。こんな優雅な環境で、主と二人^ニ住居したら、さぞうれし^カろう。

座敷に上がらせてもらい、机に並べられた四個の蓋付碗を見せて戴く。どれも外側が黒、内側が朱色である。同行のエライさん説明によると、漆器のこの朱色は、優秀作品でないと出ないという。四個とも実にも蓋にも外側の黒地に、丸に三ツ柏の紋を三つずつ白線で描き出してある。これも矢之助氏が写真にとってくれた。

栗林家の先祖は、王丸谷の獄に勤務し、牧野一族をいたわった。それでこの碗をもらったのだという。むかしからこの邸に居住しているのだそう。裏山の斜面畑に一面にコンニャクを作っている。おふくろさんが作るコンニャクはおいし^カろうと思う。

帰り途、李の小字小串の木瀧川の傍の小山の裾の墓地の中に、雑草に埋もれた藤丸の墓があった。この墓は後世になつて建てられたもので、台石をふくめ高さ八十^セである。正面に「牧野藤丸之墓」右側に「李講中」とある。

伝説によると、乳母が藤丸と千代丸を連れて李の実家に帰る途中、藤丸が持病の癩で苦しみはじめ、そこへ追っ手が来て、藤丸が斬り殺され、乳母と千代丸は大庄屋玉置弥助にかくまわれたという。

三歳の藤丸に癩の持病があったとは考えられないし、前述の如く藤丸も千代丸も生き永らえているのだから、ここで斬り殺されたのは、別人だろう。

桂木峠を登り切ったトンネルの入口で停車した。左手の山の急斜面に横一文字につけた平坦な小道を歩いて山の尾をまわると遍照寺があった。はるか下を愛川が流れるすばらしい眺望である。

本堂の住職が坐る座布団の左側に、牧野千代丸寄進の念仏鉢が置いてある。「京六条住丹下播磨大椽貞的作」
「享保十^七乙巳^七歳七月十七日」
「愛川村遍照寺奉掛施主牧野千代丸建方李住辰右衛門孟包」の銘がある。直径三十八・二^セの釣鉢である。建方とは、千代丸の名前だろう。

坐敷で冷たいものをご馳走になりながら、曼陀羅のような大きな掛絵図と、大般若経の経文を拝見した。エライさん達が畳にひろげた掛絵図を囲んで、長時間協議していた。門外漢の私にこの絵図の値打ちがわからないが、由緒ありげな彩色である。エライさん達は多分、国宝に指定の打ち合わせをしたのであろう。

大般若経は数十冊の木版で「日方天喜山阿弥陀寺什物法印乗直代、弘化二年^{八四五年}岡屋久右衛門寄進」と筆書の付記があり、更に「日高郡愛川村遍照寺什物、法印若杉周照代、明治十一年^{八七年}求之、為施主上初湯川村杉谷為蔵先祖代々菩提也」

とあり、別冊を開くと、他の施主名も出て来た。これは、日方の寺にあったものをこの土地の人々が数人で買い求め寄進したらしい。

寺の入口の左手に、柃木の老樹があった。小山豊さんが「これは、天然記念物だ」と云ったという。一見すると葉が姥芽櫨に似ていてトゲがない。しかし、少し出ている若葉はまさしく柃の葉だ。植物でも老化すると、人間同様トゲがなくなるらしい。

桂木トンネルを抜けると、下り坂の左手に、立派な道しるべ石があった。清水さんが車から降りて写真をとる。「右あたいた川左神場温泉」とある。この石は山の上の方の峠径にあったのを下ろして来たのだという。

清水さんは、路傍の地藏さんや庚申さんなどをよく見つける。私は道を通る観音さんばかり眼につく。

観音さんの郷土を探索学問は、汲めども尽きぬ味わいがある。石の仏さんなど何が面白いんだろう。おかしな男だ。けど彼は、日高郡随一の郷土史家である。(チトほめとかんとナ)

午後五時、川原河に帰りついた。吉本さんご苦勞様でございました。まだエライさん方にいろいろお聞きしたいことがあるが、もうお疲れだ。七重の膝を八重に折り、厚くお札をのべて別れる。それから加門さん経営の大黒屋に泊めて戴いた。中津さんは、かあちゃんが待っているからと云って、バスで帰った。

二階の特等室に通された。先日、御坊市役所の市史編集室で、美山村見学を打ち合わせた時、中津さんに、清水さんと私の宿の手配をたのむと、「お前らみたいな子供二人ぐらい、広い美山に寝るところある。心配すんな」と云った。中津さんは私たちの宿の世話をしておいて、今ごろはバスにゆられて帰っているんだろう。ご苦勞なこつチャ。

二人は座敷に寝ころがった。清水さんが

「今日の見学記をお前書いとけ」という。

今ごろになつて何を又カすか。そんならそうと、最初から云えばストトンとメモしたものをあんまりナ。

上初湯川小学校で戴いた育友会の「ふるさとの花」という冊子に、「山祭り」というお伽話がのつていた。それには「山神様は女神様だから、村人が木のチンポコをこさえてお供えする」と書いてある。それなのに美山村文化財保護審議委員のお歴々は、チンポコの話などおくびにも出さず、石部金吉が石橋を渡るようなかたい話ばかりして呉れたのである。もし、もっとやろこい話を聞かしてくれていたら、美山村の文化財が光り輝き、山の女神がボインを揺すぶって笑いころげ給うような迷文が書けたものをと、残念でならない。イゴキヲツケロ。

閑話休題バスは走り続ける。いやもうホニ宿についているのだったワ。

風呂にはいり、よい気分になつて一献傾けた。その昔、清水さんと私は御坊でのみ歩き、そのあとで喫茶店荒らしをやった。御坊の街の電柱で、清水さんのオシッコのかゝっていないのは一本もない。しかし清水さんの酒量も落ち

た。

数本の銚子で二人ともアーラご機嫌になり、街へお茶をのみに行くことにした。宿で喫茶店のあるところを聞くと、おふみさんが、ご案内しますとついて来てくれた。川上橋とは反対の方向に行き、右に曲がったから、「下を向きに歩いているんですね」と、おふみさんに聞いたら、清水さんが

「アホこれカミ向いて行っているんや」という。私は日高川の流れから考えて、川下向きだと思うのだが、おふみさんは

「上向きです。しかしこの辺では、向こうの方を下といいます」と、下に上るようなことをいう。

翌朝清水さんと論争した。清水さんは「あの道は熊野川へ行く道や。僕のおはん熊野川や。熊野川は川原河の上や。ほやさか上向きや」と云った。

それにしても、二人の客の異なった意見に対し、大岡越前守みたいな賢答をして、どちらの顔も立てるおふみさんはかしこい女神さんだ。惚れた。

喫茶店への道は思ったよりも遠かった。清水さんは「もうお帰り下さい」としきりに云う。帰られたら迷子になる。帰るのなら清水さん一人で帰ればよい。その方がよい。道は薄暗いのだ。

道の左手にそれらしい灯が見えて来た。「喫茶スナックもみの木」と看板が出ている。「一緒にお茶でもどうぞ」とおふみさんにいうと、清水さんは、今になって「どうぞどうぞ」とオベンチャラをいう。

私が先頭にはいったから、清水さんは躊躇するおふみさんの手をシカット握ってはなさなかつたんだろつ。いやおふみさんは店のマダムに用があつたらしい。とにかく一緒にはいって呉れた。

隣の席でカラオケで唄っていた四人組が、「おふみさん、おふみさん」とまねいた。私はこれまで「おふみさん」と旧知のように書いて来たが、白状すると、この時はじめて彼女の名を知ったのである。生まれてはじめて今さつき逢ったばかりである。

四人組は威勢のよい若衆で

「性教育は、われわれピーチクAの課題ですが、これが難問題でして……」と清水さんに話してる。そのすきに、私はおふみさんを独占した。

「あんたお酒のめるの」

「少しでしたら」

「宿に帰ってのみませんか」

「お仕事すんでからにして下さい」

「きつとですよ」

おふみさんがうなずいた。私は、まだ飲み足りないし、おふみさんから、美山の女神情話を聞いておきたい。県議候補に推薦の打ち合わせをしたい。

さつき宿を出る時、電話で連絡してあった三十木矢之助ウジ来て呉れたが、酒は飲めぬという。大庄屋が酒を飲めぬでは、宴会政治はつとまるまい。ジューズ一杯のむため川上橋を渡つて来て下さったとは恐縮。

宿に帰ると清水ご老体はすぐおやすみ遊ばされたが、若さにピチピチの私は、早くおふみさん銚子をもつて上がつて来ないかなアと、ワクワクしていた。十時過ぎになって、宿の奥さんが上がつて来た。

「おふみさんと一杯やると約束してまんねんけど、まだお仕事でつか」と聞くと。

「アラッ、そうでしたの、今さき帰りましたけど……」

その夜私は、ふとんを抱いて「おふみさん、おふみさん」と言いながら眠った。こないに書かないと気分が出ないので書いたが、実は「おふみさんお酒」の「お酒」を省略して書いたので、もう少しのみたかったのである。

翌朝、朝ご飯を持つて来てくれたおふみさんに、

「ゆうべ奥さんに、あんたがもう帰つてしもたとだまされてん」というと

「アレ、私嘘など申しません。あのとき、たしかにおふみさんは帰つたあとでした」

朝ご飯を持つて来てくれたのは、おふみさんではなく、奥さんだったのである。女の人の顔はまぶしいから、私はなかなかよう覚えん。間違えたのだ。はずかしかったが這入る穴がなかった。

歸りに、三十木矢之助氏から井原家系図を借りて帰った。私は三十木矢之助伝も書きたいと思ひ資料を集めている。七月十日月曜日、ドシャぶりの雨の中を系図を返しに行った。おふみさんに一目逢いたかったが勇気がなかった。美山村の名山は雨に煙っていた。

交通雑話

車の先曳き犬

「交通と公害」 昭和五十三年十月十一日掲載

本紙の第何号であったか、私は人力車について小文を載せたことがある。いまはもう人力車をおぼえている人も次第に少なくなつたが、思い出すと自動車や殺風景なオートバイなどところがいい、のんびりとして懐かしい。

私が若いころ御坊の茶免橋のすぐ南隣に人力車夫の溜り場があつて、いつも四・五人の車夫が客待ちをしていた。

ちようど現在のタクシー待合所のような風景であった。ただタクシーとちがうのは、その人力車溜り場には幾匹かの洋犬をつないでいたことである。洋犬は人力車の先曳きに使役された。街を通ると、よく客を乗せて走る人力車の前を、細い紐でつながれた洋犬が、赤い長い舌を出しながら走っていた。犬はめいめいの車夫に大事に飼育されていた。もともと忠実な動物だから車夫を扶けることが大きく、車夫にとっては貴重な存在であった。

筆者の近所に私よりも二つ年下の友人があり、この友達の姉婿がいまの日高町比井で車夫をしていた。まだ鉄道が通じていないところで、比井港は汽船の発着港として、旅館もあり繁盛をしていた。時々この車夫が人力車を挽いて友人の家へやってきた。あるとき友人の家で、この車夫の飼い犬に手を出して咬まれたことがある。子供の私は物めずらしく愛撫するつもりで頭に手をやったのだが、犬は比井港から当時まだ改修されていない小坂峠を越え、小熊まで車の先曳きをし、疲れて機嫌を悪くしていたのだ。ほんの軽く咬んだだけで傷も何もしなかったが、びっくりして泣いたことが記憶にのこっている。

ところが、この犬の先曳きが動物虐待だと欧米諸国から抗議が出て、大正十三年二月、犬の先曳き禁止令が出て、犬の値段が下がったと当時の紀南新聞の記事にみえる。それまでは力の強いおとなしい犬が車の先曳用として、人力車夫間で、かなり高価で売買されていたのである。また大正十三年十二月十一日の田辺新報・第一八四七号に

和歌山巡り 十一月四日

犬の先曳き 山崎生

と署名して、

犬の先曳きは大正十三年四月(?)から禁止されているが、先曳きの禁止は却って人間の虐待となるばかりでなく、経済的にも不利益である。云々。

の記事がある。川崎生とあるのは多分田辺新報の記者の一人であろうが、どんなことにでもいろいろの見方のあるものだと感じる。

人力車・犬の先曳き、いまはすっかり忘れられた小さい事がらながら、やはり交通史上記録しておくべき、もしろい事件であろう。夏の炎天下土ほこりのする道も人も喘ぎ喘ぎ人力車を挽いて走る光景が、六十年近く距てた今も、何かの拍子でふつと瞼の裏にうかびあがることがある。

写本をみて

「紀州新聞」昭和五十三年十一月二十二日掲載

先日ある会合の席で、某氏から家蔵の江戸時代に書かれた紀州関係の紀行書を借覧したいと頼まれた。

あいにく私はその会合の夜から風邪気味で、そのままにすぎたが、十一月八日どうやら元気も出たし、おだやかな小春日和だったので、久しぶりに廊下の和書類をとり出してみた。

出てきたものを順不同に並べてみると、

紀南名勝志 六卷

熊野巡覧記 三卷

熊野紀行 一卷

紀路草 上下一冊本

熊野独参記 一卷

紀州志略 正統各一卷

熊野詣紀行 上下一冊本

などであつた。ながい間地方史に関心を寄せながら貧しい冊数であるが、私にはどの一冊にもふかい愛着がある。中には古書屋で手に入れたものもあるが、そのおおくは恩師芝口常楠先生からお借りして私が、こつこつ写筆したもの、あるいはこれも地方史研究の大先輩・故和田喜久男氏から借りて筆写したもの、一部芝口先生の自筆本もまじつてゐる。

いまこれらの内容を一つ一つ披露するには頁数の制約もあるし、場所も当を得ない感じがするためさしひかえるが、中には紀行者が絵図をまじえたのもあつて面白い。例えば下富安村の頁には、

下富安村

人家多し茶屋あり。右八幡宮・辻堂。左川あり、如意輪橋、土はし也。

富安王子、右にあり。この王子、善道寺権現といふ。ゆらふきの外さやあり。宮居よし、左りに標石あり。として道標の絵が描かれている。

また藤井のところでは、

「ふじゐ村、人家多し。土橋を越へて右へまがり日高川の端へ出。はるか堤つたひに同じ川の下なる、あまたのわたし場へゆく、此間並木の松原也。右に小松原しま村など見やりて行。

また

あまた村、茶店あり。人家多し少し坂をのぼる。左の岡を藤巻の山といふ。

おくに熊野権現の社ありそれより坂はしを越ゆれば

北塩屋村、人家多し。宿あり。

塩屋王子、この王子の在処、里人に尋ねしかども夫としれがたし。美人の王子といふ社ありといいしかとて夫さへ尋ねるにいとまあらざりし也

ざっと、この調子で道々の村々を述べながら熊野三山に到るのである。

これは前掲の熊野詣紀行の中の一部に当たるが、この熊野詣紀行は林信章の著で、その自序によれば寛政十年三月（一七九八）信章が二、三人で熊野参詣をした時の道中記である。したがって時代的には余り古いものではないが、途中の風景が目に見えるようで、国鉄紀勢線が電化し、国道四十二号線に自動車が増える現在とくらべると、興味が尽きたい。

なお此の本の伝来の由縁について本書の末尾に、

川井不関子先生寛政十年三月熊野詣へ同伴の林信章道の記也。則川井より借て写し置也

寛政十一年六月吉日

影 馴 亭

右複写の上県立図書館へ納本す

昭和四年十二月十九日
（一九二九年）

岡田 春潮

和歌山県立図書館蔵写本ヲ複写す

昭和七年七月十八日

中 根 七 郎

右中根子の写本を借りてうつす

昭和十五年三月廿五日

宇 井 縫 蔵

右宇井氏の写本を借りてうつす

昭和十六年一月五日

芝 口 常 楠

右芝口氏の写本を借りてうつす

昭和二十四年九月五日

清 水 長 一 郎

つまり家蔵の熊野紀行一二八頁はこれだけの人の手を経て、いま私の書箱に納まっている訳で、これら先人の努力がなければ熊野詣紀行に、私は恐らくめぐりあえなかつたであろう。わずか百頁余りの小冊にも、これだけの因縁がまつわりついている不思議さに、いまだ驚きをおぼえる。昭和二十四年の写本からでも、もうかれこれ三十年ちかい歳月が流れる。あのころの若さ、がむしやらしさが古い本をみていくうちに、ふっと頭の片すみにうかんできた。

交通雑話

馬力車とトラック

「交通と公害」昭和五十三年十一月四日掲載

本州と四国を結ぶ瀬戸大橋の起工式が、十月十日に行われた。世紀の大事業ともいわれ大いによろこぶべきであるが、いろんな事情があつて一部に反対もあるらしい。何事も難しいものである。これとは違^{二九三〇年}うが昔、馬力業者とトラック業者が利害をめぐつて、時の警察署長に陳情合戦をしたことが古い新聞にみえる。昭和五年四月十五日の紀南新聞である。

貨物自動車の乗り入れを

ドシドシ許可されたい

山産物の品価を益々墜すと

丹生の代表者等警察へ陳情

と四行の見出しで、

「本郡丹生村の馬力挽き業者はさきに濫りに村内へ貨物自動車を運転されることは我々営業者の生活を脅かすのみならず村内の道路を破壊すること極めて大きいから今後許可されている貨物自動車のほか特別許可を与えられないようにされたいと御坊警察署へ陳情するところあつた。よつて御坊署でも同人等の意向を参酌して此の方面へのトラックを余り許可しない方針をとつていたが、同村方面ではこれがため生産品が滞貨し、その運輸に大なる不便を来したのか、昨十四日午前十一時元村長川口音次郎・小山盛一氏ほか二名の山野・和佐方面の有志は御坊署に山田署長を訪問、馬力挽業者はさきに村内へトラックをみだりに村内へ進入させぬよう陳情があつたらしいが、これがため村内の生産品の滞貨をみるに至り運輸に大混乱を来している。これでは疲弊しつつある山村をますます疲弊せしむるから、この際許可を願ひ出たものにはドシドシ許可され、その生産品を速やかに市場に出すように取計らわれない。さもなくば折角の製産品が滞貨して、非常な損害を受けねばならない」

「という意味の陳情をなす所があつた為、これに対し山田署長は意のある点は充分察知し得る。よつて今後なにぶん意に副うよう取計らうと答えて別れた。因みに同村に許可されているトラックは山三組だけであるが、山産物の多い同村では到底この山三組だけでは足りないため、他のトラックの乗り入れをなるべく多く許可されたいと云うのであるらしい」

新聞記事はこれで終わっているが、各戸に乗用車・軽トラックが普及している現代から考えて、まことに今昔の感がある。

交通雑話

荷入れ

「交通と公害」昭和五十三年十二月七日掲載

トラックが普及して婚礼の風景も、すっかり変わったが、私どもが子供の時は箆笥も長持も、すべて人足が運んだものであった。

荷入れの日は花嫁の衣装を納めた荷物が、男たちによって婚家に運ばれるのだが、まず出発に当たって祝宴があり、ほろよい機嫌になった仲間のうちの一人が、嫁の家の表で、

祝いナームでたの此の長持はヨウ

行つたナー来やせん戻りやせんヨウ

と歌う。何しろ箆笥も長持も花嫁の衣類その他が、ぎっしり詰まっているので重い。それを二人が担い棒で肩にするのだから、なかなか体力がいる。所々で一息を入れる。その時は青竹を適当に切ったのを担い棒のささえとする。これを一般に息杖とよんでいた。

まだ、のんびりした時代であった。テレビやラジオは云うまでもない。田舎には電話さえ数える程しかなかった。村で嫁入りがある、嫁取りがあったのは大ニュースで、口から口へと村中に伝わった。少し大家の婚礼があれば、村の夫人たちは、早くからその日を待った。

その時分は披露宴も料亭を使うことはなく、婚家で行われた。今度の嫁入りには箆笥が幾竿あるような、長持が幾つあるそうなど前々から評判になった。いよいよ結婚荷入れの当日になると、道中の道々に村の夫人連中が筵を敷いて待ち受け、荷持ちの一行が見えたと口々に、「しよも、しよも」と声をかけたのを覚えていた。「しよも、しよも」は「所望・所望」という事である。こう声をかけられると、やはりこれにこたえねばならぬ。そこで一行中で歌に自信のあるものが、息丈で肩をやすめ得意の歌をはじめるのである。大正十三年^(一九二四年)刊行の森彦太郎編の「南紀土俗資料―土俗僅語」の部に、こうした長持歌が十三篇おさめられているが、まだこの外にも、荷持衆の機転で、即席に歌われた長持歌がいくつかあった筈である。

もちろんいまのように單車が走ったりトラックが地響きをたてて、のし廻る時代でなかった。歌い手も聞き手も、

ゆつくり楽しむことができた。

戦後のことだがもう古い昔になる。私も一度荷入れのトラックに同乗した事がある。せまい道でトラック同志が出合った途端に相手のトラックがかなり長い道をバックして嫁入り道具を積んだトラックを通してくれた。長持歌にある。

……行ったら来やせん戻りやせん

を文字通り実行してくれたのである。運転手に聞くと、これは日本国中どこでも同じく一種の不文律になっているという話であった。大きなトラックを乗りこなす荒男にも、一面こうした優雅な不文律が今に伝えられているとは、なかなかほのぼのとした温かさを感じさせるではないか。

写本をめぐる話

「紀州新聞」昭和五十三年十二月二十二日掲載

徳富蘇峯（猪一郎）と書いても、もうどんな人であつたか知らぬ人の方が多いのではないかと思う。実は私も蘇峯の半生の歩みの一部しかみていない。

無理もない。たいていの事柄を収録している広辞苑にさえ、彼の弟で小説家であつた徳富芦花（健次郎）のためには、数行を費やしているのに、蘇峯はまったく無視されているのだ。あの第二次世界大戦当時、連日のように新聞紙上で激しい調子で戦意の昂揚を叫んできた颯爽とした姿をおぼえているものには、少し不当すぎはしないかという気がする。

事実、彼には等身をこす著述があり、私はあまり好きではないが大ジャーナリストであり、文章家であり、読書家でもあつた。ともあれ私の乏しい蔵書の中にも、現代はほとんど顧みられないが彼の著書「近世日本国民史」や「読書九十年」がまじっている。蘇峯は書名の「読書九十年」のように、非常に長命の末ひっそりと世を去つた。時が時なら新聞紙上で大きく書きたてられ、その功績をたたえられたはずであるが、時代はすっかり変わつていたのだ。

前置きが思わず長くなつたが、この大ジャーナリスト、大読書家の蘇峯は、自然大変な蔵書家でもあり愛書家、蒐書家でもあつたという。何にあれ蒐集も度をすぎると狂にちかくなる。それがまた私どもの貧書生とちがい、やせても枯れても天下の徳富蘇峯である。眼のむけ所も高いし、そうざらにある古書を狙いはしない。さらに知名度も重い、ねらわれた者は拒む訳にはゆかない。ちよつと読みたいから貸してほしいと頼まれると、蘇峯先生の御申し出とあつて、むしろ光栄に感じながら、わざわざ持つて行つたものだ。ところがいつまでたつても本は返してくれない。しば

れを切らして催促すると、ああすぐお返しするよばかりで本は戻らない。たまりかねて勇氣あるのが蘇峯邸まで押しかけたが、私どもとはちがう。本は堂々とした大きな書庫にすでに納まっ^ていて手がとどかない。蘇峯はこんな手口で大ぶん稀^き觀書を集めたという。

、いつ、どこであつたか、こんな意味の文章を読んだことがある。もちろん無責任なゴシップ記事であつたから真偽のほどは定かではないが、相手の藏書家には氣の毒だが、愛書家蘇峯の面目を伝えて面白い。

実は私の身辺にも、これと似た話が二つ三つある。借り主であつた方が、ご高齢ながらご健在なので名前はあげない。とにかく和歌山県の地方史界の大先輩である。故芝口先生のご家藏の「麟徳記」を借用した。「麟徳記」は紀州徳川藩祖、頼宣公の徳行を録したもので、上・中・下三卷に別れ、芝口先生はこの未刊本を誰かから借りて筆写して、余白に、

この写本は紀藩士村岡良毅の著、良毅は第九代治貞公香巖公治宝公に仕へ、後には家老として菊間詰を命ぜられ千五百石に昇進弘化四年（一八四七）に至つて致仕すといふ昭和十八年九月（一九四三年）これを写す。

芝口常楠

と、記されている。

ところが相手の借り主はいつこうに返さない。会合などの席で顔を合わすと、

「あの本、今日持つて来るつもりであつたのに忘れて申し訳ない。帰ったら直ぐ郵便でお送りします」

というばかりで、いつまで待っても送つてこない。芝口先生は温厚な律氣な方であつたが筆まめであつたので、度々手紙や葉書で催促するのだが、梨のつぶてで返事すらない。せつかく苦勞した筆者本である。愛着が益々ふかくなる。こんな状態が二・三年も続いた。

たまりかねたか、ある日先生を訪ねた私に、この経過を面々と話して嘆かれた。若い私も、これを聞いて大いに憤慨を感じたものの、何しろ相手は当時、県下地方史界の大物で、私自身もこの先生にはいろいろご指導を頂いた関係もあつて、そうずけずけと物をいう訳にはゆきかねた。あれこれ思案のあげく、これは同じ地方史界の大先輩で、当時さかんに地方新聞紙上で活躍しておられた井上豊太郎先生にお願いしてはと思いついた。先生はまた弁護士を本業とされていたことは読者もよくご承知であろう。芝口先生とご相談の上、井上先生に弁護士という肩書きで返本の交渉をお願いした。井上弁護士は快諾の上、直ぐ手紙を書いてくれた。効果は贖^{しよくめん}面であつた。数日を経ず「麟徳記」は返送されてきた。

私は早速芝口先生からその本を借りて筆写した。「麟徳記」下巻の末尾に、

昭和三十四年二月十九日清水写之

と書写の年月日を記してある。ちょうど二十年ばかり以前の話である。当時この一書をめぐって悲喜を共にした芝口先生も井上先生もすでに故人になられて久しい。もう一つ芝口先生の蔵書「日高郡農具圖繪」の貸し借りについての秘話もあるが、これはまた機会があれば書きたい。

一冊の本

「紀州新聞」昭和五十四年二月二十二日掲載

西欧に、「友を失わんと欲せば金を貸せ、本を失わんと欲せば本を貸せ」という意味の言葉があるのを何かで読んだ記憶がある。

私は人様に御用立てするほどの金も本も持っていないが、少年時代から文学ずきの上、中年以降、地方史に心をよせるようになったので、文学書や地方史関係の書籍が身边に少しばかり並んでいる。

まだ私が二十歳になるかならぬかのころ、尾崎紅葉の「金色夜叉」を読んだことがある。当時流行していた演歌「金色夜叉」に刺戟された結果と思うが、やたらにむつかしい漢語をまじえた文語調のこの小説は、子供あがりの私にはよく理解できたとは思えないが、そこは若さの無鉄砲さで、ふり仮名をたどりたどり、しやにむに読んだ。

周知のようにこの一編は、箕輪家の華やかな歌留多会にはじまり、寛一とお宮の月下の熱海海岸の別れが、ひとつのクライマックスになるのだが、高級な文学作品の味わいなどはわかる筈はなく、こんなシーンに若者らしい感激をし、春陽堂発行の変形判布表紙の「金色夜叉」を大事に書架にかざっていた。

ある日、近所の青年が是非読みたいと、この一冊を持っていた。本は間もなく帰ってきたが、夏のことで灯火で読んだとみえ、頁をくると中に一杯小さい虫がはさまれていた。背綴じもすっかりくずれて手垢にまみれていた。私は今でも本を大切に扱う。数少ない蔵書の一冊が、みるも無惨な姿で戻ってきた。五十年前の悲しみを私は今も忘れられない。

以来、私は本の賃借に神経を使うようになった。乏しい蔵書であるが時々、借り入れの申し込みを受けることがある。相手の親疎にもよるが、そんな場合はたいてい図書館に行くようすめて引きさがって貰う。図書館にない場合は、云いにくいが簡単な借用書を書いて貰い、自分も日記帳に記入しておく。けち臭いがそうでもしておかぬと月日がたつと、誰が持って行ったか忘れてしまうのだ。

昭和九年^{一九三四年}、岡山市の中国民俗学界が発行した桂又三郎編の「和歌山県日高郡農具絵図」と題する、時たま図書目録

に顔を出す、ちよっとおもしろい本がある。教科書判五八頁の小冊で表紙は活版印刷であるが、本文は謄写版印刷であるからあまり部数は出ていないと思われる。凡例によると本書原本は明治十七年^(一八八四年)、和歌山県庁が調査したもので、愛知県の岩瀬文庫に写本が載せられおり、それを複製したものという。内容は書名の示すとおり和歌山県の明治十七年代の農具の図録で総点数、六十五点を数える。

私はこの本を一度どこかでみて是非手に入れたと思った。その後、古本屋へ立ちよるごとに注意し、古書目録にもよく気を配った。古書目録では二、三度みかけて注文したが、その都度残念ながら売り切れましたという返事が来た。和歌山県も日高郡というきわめて限られた地方の農具図絵が、どうしてそう売り切れるのかと葉書をみて地団駄をふんだが何とも難い。

ある時ゆきつけの和歌山市の古本屋でこの本を、やっこの思いで手に入れた。二十数年前の話である。頁をくると蔵書印が二つ押してある。一つは「鬼洞文庫」とあって、これは未知の方であり、もう一つは「南紀楽天莊蔵書」とあり、かつて井上豊太郎先生の愛蔵されたものとわかり、二重の歓びを得た。まだ先生がお元気のころであつたが、私は先生にはこのことを話さずに終わつた。本書は私が昭和三十年代、矢田村誌編集の際、大いに役立った。

もう古い話になるが故・芝口常楠先生もかつて本書を所蔵しておられた。ところが同じ地方史研究仲間の片山隆三氏がそれを借用されたまま、いつこうに返しにこないとひそかに嘆いておられた。私は片山氏にも親しくしていただいたので、時々日の出町のお宅へ伺った。なる程、芝口先生の云われる「日高郡農具絵図」が机上に置いてある。よほど芝口先生の嘆きを伝えようかと、咽喉まで出かかったのであるが、後輩の私としてはためらわれた。そのうち両氏とも逝去された。片山氏の机辺にあつた「和歌山県日高郡農具絵図」は、その後どこへ行つたであらうか。

交通雑話

都市と田園

「交通と公害」昭和五十四年一月十日掲載

昨年暮れの十二月十日に所要があつて名古屋へ行ってきた。

どちらかと云うと、私は生来わりあいこまめな性で、大阪や和歌山へよく出かけたものだが、やはり年令のせいであらう、やはり出不精になった。国鉄紀勢線が電化してから、はじめての旅行であつた。道成寺駅八時二分発快速に乗る。御坊駅から座席がとれた。十時十三分天王寺駅に着くと、改札口で次男が待っていた。

いつもは新幹線を利用するのだが、近鉄にしようかと次男が云う。近鉄が名古屋駅まで二千八十円、新幹線「こだ

ま」が三千五百円という。今は勤めをやめて余生をおくる私には、近鉄の方が一時間ほど長くかかるというが、それほど急を要する用件ではない。またこれまで度々名古屋に往復しているが、ほとんど新幹線ばかり乗っていた。変わったコースもおもしろいし、第一料金の約千五百安いのが魅力で、難波まで地下鉄で出て近鉄特急に腰をおろした。全車指定席なので座席の心配もない。途中、大阪市内で本町・鶴橋で停車するほか名古屋までノンストップである。

大阪市を離れて間もなく、車掌が熱い「おしぼり」を配ってきた。私は車窓を流れる風景を眺めながら、国鉄の三千五百円と近鉄の二千八十円のちがいを考えてみた。なるほど時間的には一時間余の差がある。新幹線の建設には莫大な費用がかかっているだろうが、名古屋までの乗車料金千五百円ちかい相違には、国営と私営との、てっとり早く云えば「親方日の丸」式の考えの違いが、この結果ではないかと感じた。名古屋駅には午後二時すぎに着いた。目的地が市の東北端にあたる不便な所なのでタクシーを利用した。大阪でも京都でも大都市はどこも同じことだが、信号待ちのためなかなか車は思うように進まない。二十分ばかりかかって、やっと訪問先に着いた。

私は名古屋で一泊して附近を歩きまわり、日高地方のように山川の美しい空気の澄んだ、農村に住むものの仕合わせをしみじみと痛感した。

家を出ると、そこに直ぐ山があり清らかな日高川が流れている。家と家が程よい間をおいて点在している。家々がゆったりした間取りをもっている。大都市にくらべると不便な点も多いのは事実だが、計算するとプラスの面がまだ大きい。私たちはこの私たちの先人がのこしてくれた大切な遺産を大事に護って、子や孫たちに伝える義務がある。働き場所も重要だが環境の破壊はもっと大変である。一度壊したなら取りかえしがつかないのだ。日高地方は永遠に田園都市であってほしい。名古屋へ行つてきてそれを痛感した。

交通雑話

昔のダム補償問題

「交通と公害」昭和五十四年二月五日掲載

難航中の美山・龍神両村にまたがる椿山ダム補償問題も、ようやく地元と県当局の話し合いに入ったと伝えられるが、五十年ばかり昔にも龍神村柳瀬発電所の堰堤問題で、大紛糾したことがある。即ち昭和四年（一九二九年）十一月二十一日の紀南新聞に、

再三再四中山路村民が当局に嘆願している上柳瀬堰堤問題は、日を経れども解決の曙光を見ず、区民は日夜善後策を講じているが、時あたかも本月十七日泊本県内務部長の来村を知った区民は、この好機によりしく民意

を伝えんと待ち構えていた。部長の一行は龍神村の所要を終り、帰途ひそかに堰堤を見聞し、そのまま自動車
で帰庁すべく車を仕立てた。かくと知った村民は大挙して自動車を包囲した。これらの区民は決して不穏当な
行動ではなく、内務部長の袖にすがって嘆願したものであった。それでも自動車は発車する気配をみせたので、
区民の俠骨児某君（名を秘す）は県道の中央に寝返って「耕地は日に日に水没し今や飢餓にさらされている。
飢え死ぬのも車にひかれて死ぬるも一つだ。通らば通れ」と絶叫した。

これには随行の係りも色を失った。大衆は内務部長を捉えて放さぬ。やむを得ず部長は車を降りて言葉をやわ
らげ、「君たちの哀情はよくわかった。改めて村長はじめ有志は一度県庁へ来られたい。当局としてもよく考
えておく」と述べた。この言葉で区民も諒解して無礼を謝して解散した。

当日はちやうど三山路小学校の連合運動会があり、数千の観衆が集まっており、この騒ぎで大勢の村民が殺到
して、一時は運動会どころではなかった。何にしても平和な山村を救済することが急務である。一日も早い解
決を希望する。

大要、以上のような記事である。

いつの時代でも新しい事業をおこしたり、開発にはいろいろな摩擦を伴うが、今回の椿山ダムにしても御坊火力発
電にしても、関係者は充分話しあいをして、悔いを後世にのこさぬようしてもらいたい。

交通雑話

強力者の話

「交通と公害」昭和五十四年三月八日掲載

近年は運搬機具の進歩で、重い物は機械や車で運搬して人の力を、あまり要しないが、昔は人の肩や背を使うより
方法はなかった。したがって昔の人は粗食であつたが、腕力が強く、また辛抱つよかった。

筆者が青年時代などは米一俵六十kgを担げぬようでは一人前の男でないと云われた。まだテレビもラジオもなく娯
楽施設もなかった。暇をもてあました青年たちは、夏の夜や休日には、よく神社の境内や青年会場に集まって、土俵
や力石を担いで力自慢をした。その時代の力石が今でも時々みかけることがある。

日高町比井の人で若い時は錦山の「しこ名」で鳴らした角力取があつた。いまでも中志賀公民館前に「かたげ」石と
よばれる、まん丸い二つの石がある。昔の青年がこの石を中心に担ぐ競争をしたものという。小さい方は七七kg、大
きい方は九六kgあるが、だいぶん欠けているので、以前は一二〇kgぐらいあったらしい。小さい方は担ぐ人はあつた

が、大きい石は目方も重く、形もまん丸いたため手にしにくく、めったに担ぐ人はなかった。ある年の正月休みのこと、青年たちが集まって石担ぎの競争をしていた。折から正月のあいさつ回りに行った錦山が通りかかり、「ちよいと貸してくれないか」というと、羽織を脱ぎ高下駄のまま、大きな方に手をかけたかと思うと軽々と持ちあげて肩にのせ、のこのこと歩いたという。（日高町誌）

もう一つ、力石の話。

昔、川辺町入野に安倍川という「しこ名」で、宮角力などをとった強力者がいた。あるとき安倍川は三尾村の龍王神社にあった「若連中」と書いた力石に、わざと腰をかけた。三尾の若衆たちが怒って「酒で洗い清めるか担ぐか二つに一つ」と詰めよると、安倍川はこの力石を担ぎあげ、龍王神社の後ろの山から海へ投げこんだ。しかしこれを見ていた若衆たちも、安倍川の大力に恐れて、誰も手出しをする者はなかったという。

（紀伊日高民話伝説集・矢田村誌）

交通雑話

道成寺の石段

「交通と公害」昭和五十四年四月五日掲載

ここから鐘巻十八町、六十二段のきだはしを、上りつめたら仁王さん

これは古くから日高地方で、手まり歌として少女たちの間で、唄い続けられてきたものの一部である。

私はある会合の際、この歌の初めの「ここから鐘巻十八町……」の「ここ」は一体どこであろうかと話した所、ある人が、「それは御坊市・出店の大きな石の道しるべのある所とちがいますか」と答えた。なる程、道しるべの立っている出店だとすると、この歌の通り十八町ぐらいの距離になる。それに道標も建っていることだから、某氏の云うように手まり歌「道成寺」の「ここからは」現在の出店通りと考えて、まず誤りはあるまい。

続いてこの歌の「六十二段のきだはし」であるが、道成寺の「きだはし」が古くから六十二段であったことは、いろいろの資料から大体うなずけるが、現在の^{（一九七八年）}のように切石の立派な規模に再興したのは、江戸時代の初期の延宝五年（一六七七）のことであることが、昭和五十三^{（一九七八年）}年夏の道成寺古文書調査によって判明した。

道成寺には数千点に近い古文書が伝えられ、現代の文章にすると、（数行脱行あるか？）およそ右のような趣意書で、延宝五年の年月が記されているから、今からざっと三百年ばかり昔になる。このよびかけに応じた人は

川辺町土生

六人 六段

御坊市 島

二人 二段

御坊市御坊

一人 一段

〃 千津川	三人	三段	〃 小松原	五人	五段	〃 藁	一人	一段
〃 松瀬	一人	一段	〃 吉田	四人	四段	美浜町和田	九人	九段
〃 小熊	二人	二段	〃 財部	一人	一段	〃 吉原	二人	二段
〃 若野	一人	一段	〃 上富安	一人	一段	日高町萩原	二人	二段
〃 鐘巻	三人	三段	〃 北吉田	一人	一段	〃 池田	二人	二段
〃 中津川	一人	一段	〃 出島	一人	一段	〃 高家	五人	五段
御坊市藤井	六人	六段	〃 岩内	一人	一段	〃 茨木	一人	一段
合計	六十二人	六十二段						

昔の村別によると、二十四ヶ村の人々の浄財によって改修されたのである。
 私たちがいつも何気なしに上る道成寺の石段は、三百十年の昔、二十四ヶ村六十二人の人々の浄財によって築かれたことを、一度考えてみてほしいものである。

会者定離

「紀州新聞」昭和五十四年四月二十二日掲載

もう大分ふるい話になるが、私は一月十二日の小谷緑草君の随想「銀六さん」で、五味銀六さんの急逝を知ってアツト驚いた。

五味さんとは小谷君と同じように御坊あるこう会で知りあったのだが、それがいつどこを歩いた時か思い出せない。五味さんはいつもゴム長靴をはいておられ、口数の少ない方であった。家の方へも数回みえられたが別にこれという用件があった訳ではない。ぼそぼそと低い声で話されては帰られた。きつとお一人でさみしかったのであろう。まったく渋いおつきあいであった。

昨年十一月中旬であったと記憶するが五味さんが来宅された。五味さんはいつも何の前ぶれもなしにみえられ、風のように去ってゆかれるが、この時は椿山ダムの着工のため居宅が水没するので、川辺町あたりへ出てきたいというお話しであった。

ついで十二月二十五日、下山路局消印の葉書がとどいた。

前略、寒さの折柄御身ご大切に。

お元氣の様子何よりとおよろこび申し上げます。私もお陰さまでまあまあというところです。寒がりやですか

ら、これからが大変です。酒も大分弱くなりましたが飲みます。飲んでさめてきたら又々寒いので困ります。話変わりまして椿山ダムがいよいよ出来ることになりました。私の家も水没です。下流の方へ出て行く考えです。まだどこときまっておりませんが、どこかよい所があればと思っております。先ずは右まで。

という文面で、龍神村小家五味銀六としてある。今年の年賀状も下さっている。五味さんはこの葉書を投函された五日後の、十二月三十日急逝された。一年に一、二回お目にかかるか、かからないのおつき合いであつたが、いままその温容が瞼の裏にうかんでくる。

一月二十五日、川辺町山野の小山民造氏の葬儀に会葬した。小山民造氏と書いても、どのような方かご存知ないかも知れぬが、古い地方史の研究家で、戦後、御坊に南紀郷土学会や南紀史蹟顕彰会が出来た折、いち早く参加された。小山氏も五味さんのように、あまり口数の多い方ではなく、例会の席でも、他の会員のやりとりを、じつと聞いておられることが多かったが、晩年に郡内でも類書の少ない山野区誌A五判六一六頁を、氏の友人・森下為吉氏と編集刊行された。

山野区誌は昭和^{（一九六八年）}四十三年がたまたま明治百年に当たるところから、昭和四十一年二月の山野区の初集会の席上、明治百年事業の一つとして区誌刊行のことが区長から提案可決されたものである。明治百年の記念事業は各地でさまざまな形で行われたが、区誌を刊行された例はあまり知らない。もつともほかに南部町埴田区誌・大判謄写版刷り・四四三頁・浜野大吉編著・昭和三十七年五月二十九日発行があるが、日高地方で公刊されている区誌は、この両誌だけではないかと思う。因みに山野区誌は昭和四十三年十二月八日の刊行である。

きくところによると、今度南部町でも南部町誌刊行の計画があるというから、埴田区誌も大いに活用されるであろうが、私も現在、川辺町誌編集作業の中で、小山・森下両氏の山野区誌から大きな恩恵をうけている。

話をもとにもどして小山民造氏は明治^{（一九〇一年）}三十四年八月、丹生村（現川辺町）山野にお生まれであるから、私より八年の先輩に当たる。大正^{（一九二二年）}十年三月大阪市の明星商業を卒業、その後東京の成溪実業学校へ入学したが一年余で退学して、大阪の大正製材所に入社、戦争によって郷里に帰り農業に従われた。小山氏は青年時代文学に興味をもたれたようで、折ふしのお話しの中でも、よく誰彼の小説を話題に持ち出されたりした。

小山氏はもともおだやかな性格で、いっお逢いしても終始にこにこ笑顔を絶やさなかった。最晩年は高血圧症を患われたもののあまり意に介しておられず、この分なら川辺町誌の完成もみられると楽しみにしておられたというが、ご期待にそえず申し訳ない。

小山氏は常に町の文化向上にふかい関心をよせられ、ご遺志によってご逝去後多額の御芳志が、ご遺族から町の楓樹文庫へ贈られた。楓樹文庫は平井栄太郎前川辺町長が亡くなられた後、ご遺族から町文化発展の資としてよせられ

た浄財を基金に設立したもので、個人ではちょっと購入しにくい全集や叢書類を集めているものだが、その後、町補助金や有志のご寄付によって次第に充実しつつある。

仏教の方で生者必滅会者定離という言葉がある。人と人との出逢いはまことに不思議なご縁によるが、不思議なご縁によって結ばれ親しんだ人々にも、やがて永遠にお別れを告げる日が必ず訪れる。昨年末から今年に入って、五味・小山とよき両先輩を失った私の悲しみは大きい。御二方のご冥福を心からお祈りする。

交通雑話

旅の伝説

「交通と公害」昭和五十四年五月四日掲載

現代のように交通機関が発達しては、旅に関する伝説もすっかり忘れられてしまったが、私がまだ子供の時は、旅行するということでもほとんど歩いたもので、旅の途中の伝説というか民話というか、のんびりした話がいくつかのこっていた。

私の祖母は明神川からきた人だった。自然、私は子供のころ、よく祖母につれられて若野の渡しを渡り、下和佐から柿木峠を越えて立石を通り、祖母の里である明神川へ行ったものだ。大正時代の柿木峠は細い山道で、両側の山の木ももつと茂って淋しかった。祖母の話では昔ここに天狗さんがすんでいた。時々、誰にも姿がみえないのに、木の上から「ワハハハハ」と大きな笑い声がきこえてきた。これは柿木峠の天狗さんの笑い声であったという。

また山の奥の方で、風もないのにドースーンと大木の倒れる音のすることがあった。これも天狗の仕業で人々は、これを天狗の大木倒しとよんだとも話してくれた。

御坊市湯川町富安に「うと口池」という池がある。ある時某という男が朝も暗いうちに和歌山へ行くため池のほとりの道を通った。するとどうしたことか、池の方から三味線や太鼓をいれて大散財している音がきこえてきた。不思議に思うて池に近ずくと、池の表には青畳が敷つめ、大勢の人が飲めや歌えと宴の真つ最中で、中からお前もいっしょにはいれと、さそいの声を盛んにかけてくる。某も根がすきな道とあって大いに心が動いたが、何しろ急ぎの旅の途中である。帰りによることにして道を急いだ。

翌日、用を終わつての帰り道、期待をもって池の堤へ上つてみると、昨日とはうって変り畳を敷きつめてあったはずの池には、溢れるばかりの水がたたえられていた。そこで昨日のことは、昔この池で水死した亡霊の仕業であったかとさとり、もしあの時亡者の口車に乗って散財の仲間入りをしていたなら、そのまま池の底へ引きこまれたのであ

ったのか、危ないところであったと思わず身ぶるいをしたという。

また、もう十年ばかり以前に亡くなった人だが、私の村に楠山種蔵という方がおられた。温厚な性格であったが、なかなか胆のすわった人物であった。ある時楠山さんが所用のため和佐へ行った。話が少しながくなって、帰りにはもう日が暮れていた。若野の渡しを渡り白岩の上まできた。白岩渕というのは若野と小熊の境界に近い所で、片方が日高川の深い渕をなし、片方は雑木林でちよつとさみしい場所であった。

ここまで歩いてきた楠山さんの前後が急に真つ暗になった。道がどこか川がどこか見当を失って、一步も先へ進めなくなつた。しかし胆の太い楠山さんは、このとき少しもあわてず、待てよ！とおもむろに腰の煙草入れをとり出し、その時分のことで巻煙草など持っていなかった。煙管に刻み煙草をつめて、ゆっくり一服吸いつけた。するとどうであらう今まで、まっくらであつた周囲がうち明るくなって道も見えてきた。白岩の狐か狸のいたずらであつた。

交通雑話

だりにつかれた話

「交通と公害」 昭和五十四年六月七日掲載

最近きかないが、昔はよく「だりにつかれた」という話を耳にした。

「だりにつかれる」とは山仕事の途中で、急に空腹をおぼえて、動いたり歩いたりできぬようになったり、旅をしている途中で不意に体の力がぬけてしまい、歩けなくなる状態をいう。つかれるという以上、何か悪霊がとりくので民俗学辞典には大体

ひだる神につかれたといい、仏教的には餓鬼につかれたということ、その実体は死霊、特に非業の死、疫病によつて死んだ十分に浮かばれずにいる類の仕業と信じられている。

と記されている。

私の近所に大勢の下男・下女をおき、手広く米穀商を営み、田畑も数おおく持っていた家があつた。

ある日その下男の一人在塩屋村まで使いに行つたことがあつた。たしか大正十二・三年一九二三・四年ごろであつたと記憶する。

下男は伊奈常之丞という昔の武士のような名前の男であつたが、酒の好きな威勢のよい好人物であつた。さてその伊奈常之丞が元氣よく出島堤を下り、天田橋を渡つた途端、急に体中の力がぬけ空腹感をおぼえ一步も前へ足が進まなくなり、そのまま路傍へへたりこんでしまった。いわゆる「だりにつかれた」のである。やがて、その注進がきて大騒ぎしたことを今も私はおぼえている。

「だりにつかれた」場合は、掌に米という字を書いてなめたり、粥などを食べるとすぐ元気をとり戻すというし、山稼ぎなどの折は辯当を食べても、必ず一粒二粒を残しておけば、「だりにつかれない」という俗言が山村地方にあったという。

さきに伊奈常之丞が「だりにつかれた」場所は天田橋を渡った場所で、民俗学辞典の記すように、昔からおおくの旅人がゆき通うた街道にあたり、中には旅の途中で故郷の空を望みながら、窮死した人もあったに違いなく、その亡霊が威勢がよいがひとのよい伊奈常之丞にとりついたのかも知れぬ。

国道四十二号線を絶え間なく自動車疾走する現代から、とうてい考えられない不気味ではあるが、ちよつぱりユーモラスな実話である。

古書談義

「紀州新聞」昭和五十四年五月二十二日掲載

もう古いことになるので、何時ごろどうしてかわりをもつようになったかは忘れたが、私は二十年ちかく「日本古書通信」という、ちよつとかわつた雑誌を読んでいる。

「日本古書通信」は週刊誌判の大きさを毎号六十四頁・その半分の三十二頁を古書をめぐる随筆や特殊出版物の紹介で埋め、後の三十二頁には五十店ほどの古書店の古書目録をのせているから、その時々古書価もわかり、本のすきな人には興味がふかく便利な雑誌である。

私は子供のころから本が好きであった。自分で働くようになったら本を買いたいと、よく思ったものだ。そのため四十代や五十代の時分は、新刊書・古書と買い集めて老妻にだいぶん苦勞をかけた。しかし今は年金生活の身の上、そのようなゆとりはないし、第一に身辺に雑書が累積して置き場所に窮する始末となり、自然よくよくほしい本でないと、買うのを控えることにしている。それでも「日本古書通信」をみるのは楽しく、毎月発行の日が待ちとおしい。

そんな訳で私と古本屋のつき合いは割合に久しく、今でも毎月いくつかの古書店から古書目録を送ってくるが、「日本古書通信」や古書目録がとどくと、私はいそいそと赤ペンと目録をもつて別室に入り目を通す。時々「ほう、この本いつの間に、こう値上がりしたのか」など嘆声をもらしながら、目録の中に自分の蔵書と同じ本が出ていると赤丸をつけ、ほしい本が目にとまると、買う買わぬは第二段として二重丸でしるしを入れる。結構たのしい作業で、いつも時間のたつのを忘れる。

佐藤春夫の晩年の作に「極樂から来た」と題する長編がある。昭和（一九六〇年）三十五年六月二十二日から百七十三回にわたつ

て、東京朝日新聞夕刊紙上に連載したものを、翌三十六年二月二十日に講談社から定価千円で発行され、御坊の書店へも出まわっていた。法然上人のご一代を描いてたもので行文は莊重な調べをもち、作者もかなり自信作としていたようである上、二頁に一ヶ所ずつ芹沢銈介の挿絵がまたすばらしい。

私は御坊の書店で何度か手にとり買うべきかどうか迷ったあげく、また明日にでもしようと元の本棚にもどしたが、やはり未練がのこり翌日出かけた時は、もう売れていた。あわてて方々の書店をさがしたが手に入らず、古書目録でみて注文したものの、その都度売り切れていた。

それがようやく四度目か五度目の注文で古書店から手に入れた。定価千円のものが古書価格で三千円ちかくについたが、今では一万円をはるかに超える。しかしどのように値上がりしたところで古本である。土地や有価証券の比ではなく、もともと古書でもうけようなどは心がけがよくないし、算盤に合うものではない。

今年三月号の「日本古書通信」に、日高地方と縁のふかい近代の墨匠といわれた、南部の鈴木梅仙翁が明治十九年に著述刊行した「墨苑清賞」の広告が出ていた。これは梅仙翁が研究した中国の墨の歴史と墨の良否、墨に関する逸話をおさめた小冊で、めずらしいものである。私はかつて梅仙翁の嗣子で南部在住の鈴木謙次郎医伯のお宅で、一度拝見したことがある。謙次郎医伯蔵の「墨苑清賞」は、もともと井上豊太郎先生が古書店で入手し、一読の後これは私が所蔵するよりも梅仙翁の嗣子である貴下のもとにおく方が、よりふさわしいとわざわざ贈られたという、美しい因縁つきの本であった。

私は地方史に関心をよせはじめてから間もなく、日高人の著作をできるだけ集めたいと志した。もち論「墨苑清賞」も絶えず注意していたのだが、古書目録でみるのはこの時がはじめてであった。大げさに形容すると胸がおどった。早速、速達便で注文した。「墨苑清賞」など余り知られていない小冊が、そう右から左へと売れるはずはあるまいと、一抹の懸念があつたものの軽く考えた。注文の葉書を出してから本のとどく日を待った。

しかし期待はずれた。一週刊ばかり後「御注文の書籍は、残念ながら売り切れしました」という冷たい返事がきた。ひよつとするとと思うた危惧が適中したのである。しまった電話すべきであったと悔やんだ時はもうおそかった。

それにしても世の中は広い。このような特殊な本をさがしている人が外にもいるとはと、ほとほと感心したことであつた。

紀行「花扇子」

「紀州新聞」昭和五十四年六月二十二日掲載

人の一生にはいつも運と不運がついてまわっているような気がするが、人と本とのめぐりあいも運・不運に左右される場合がある。

人様が見たなら「何だこんな下らない雑本」と笑われるに違いないが、私は大ぶん以前から「花扇子」という紀行書を愛蔵している。

「花扇子」は上・中・下の三巻に分かれ、半紙約二百数十枚に土生村（現川辺町土生）の瀬戸理左衛門俳号如扇が、宝暦十一（一七六一）年から明和四（一七六七）年にかけて、四国・西国・山陰・山陽・九州・北陸・坂東・奥羽と各地を俳諧に遊びながら霊場巡拝の旅を続けたおりの旅行日記に旅行中吟をまじえたもので、日高地方の人々の旅行記としては、もつとも古いものの一つではないかと思われる。

実は私が如扇の名を知ったのは「花扇子」を手に入れるよりも前のことで、川辺町土生の来迎寺墓地に理左衛門の墓が安置されていて、それに「四方に香を配れや法の冬至梅 如扇」の句が刻まれていることを、いつか本紙の碑巡礼でとりあげたこともある。

もう二十年ちかくも昔になろうか。たまたま和歌山市へ出かけた私は、所用をすませて行きつけの古本屋へ立ちよった。ひとわたり書棚の古書をみているうちに、なにやら曰くありげな帙入りの和書が並んでいるのが目についた。おやつ？と軽い気持ちで二、三枚めくった。和本のことでパラパラと調子よう頁をくる訳にはゆかないが、三巻目に終わりにちかい文中に「土生村・来迎寺云々」と記してあった。続いて「四方に香を配れや法の冬至梅」の句も書かれてあり、私は思わずアツト息を呑んだ。

瀬戸理左衛門の如扇が前に述べたように、宝暦十一年から足かけ七年がかりで諸国の霊場巡拝をしてからおよそ二百年、和歌山の古書店で筆者・理左衛門の自筆本と私が、ぱったりめぐりあうとは、まったく思いがけぬことであつた。

もし私があの日、和歌山市へ行かなかつたなら、行つたとしてもこの古本屋を訪ねなかつたなら、例え店に立ちよつにしてもこの本を手になかつたなら、「花扇子」は恐らく永久に如扇の生地私の手に入る機会はなかつたにちがいない。

「花扇子」がどうして和歌山市まで流れたかは知るべくもないが、思うに理左衛門の旅行記「花扇子」はきつと郷里へ帰リたかつたのであろう。それでなければそううまく私の手に入る筈はない。偶然と片づけてしまえばそれまでであるが、私はそこに一種の運命的な縁というものを強く感じる。

ともあれ私はいつか「花扇子」の全文を活字にしたいと考えているが、いまその初めの方の一部を抄録すると、

―七月十二日発足せしに小熊の若甥・玉置光順、志賀村ノ甥稲葉左近右衛門兩人幸成哉、熊野詣致さんと同道

して、同月十五日本宮ニ着し大願成就を祈り、木津呂坊ニ而始めて奉納経し侍りき、夫より新宮へ九里八丁川舟に乗る。舟賃六十六文、四国行者ニハ四十文也。本宮より三里下りて小舟村、此所川の落合也。本宮の方より流るる川は大峯山上、西ノのぞきの方より出てドロ川、天ノ川十津川を経て出る。又一方ハ大台が峯は和州吉野山の奥ニ而大川三方ニ分かる。一ツは吉野川、一ツは伊勢の宮川、一ツは新宮川也。右三ツの内川舟凡そ十里上下する也。尤も本宮川も大台峯よりの川筋も舟の通路同前也といへり―中略―夫より新宮に着舟、大権現并に神ノ蔵に納経し此夜は宇久井村に宿し翌日、浜ノ宮、那智山……………後略。

ざっとこのような調子で長い回国の詳細が記されている。

熊野三山を参拝した如扇は新宮から折りかえして日高の地で二人の甥と別れ、一人旅を続けて有田から和歌山近在の神社仏閣に詣で七月二十六日には根来寺で納経し、

生国をけふぞいつみの初嵐

と吟じて泉州に入る。しかし泉州の六ツ尾村にいたって日が暮れ、宿をさがしたが、村の法度でどこでも旅人は泊めぬと断られ、やむなく村はずれの小祠の境内で野宿する羽目になったとあり、現代の観光旅行からは想像もできぬ厳しい旅であったことが知れる。

一冊の古書との出あいを記すつもりが、ペンがすべって、ついよけいなことまで書いた。年齢のせいかも知れぬ。

交通雑話

昔の旅記から

「交通と公害」 昭和五十四年七月九日掲載

私の手もとに「花扇子」と題した古い旅日記がある。

馬から二百年ばかり昔土生村（川辺町土生）^{（一七六一一年）}に瀬戸理左衛門という人がいたが、俳句が上手で俳号を如扇と称した。

この理左衛門が宝暦十一年^{（一七六〇年）}から明和四年^{（一七六七年）}まで足かけ七年がかりで、俳句を作りながら日本中の靈所巡拝をした。「花扇子」はその時の日記でところどころに俳句がはいっている。

何しろ二百年も昔の人が書いたもので、むつかしい文字もあるが、ゆっくり読んでゆくと、当時の旅の様子がわかっておもしろい。如扇は先ず熊野三山に参詣し、引きかえして和歌山、海南附近の神社仏閣を拝み、さらに根来寺に詣で、七月二十六日の夕方泉州に入った。泉州はいうまでもなく今の大阪府の泉南・泉北の両郡のことである。

暑い夏の日もそろそろ傾いてきた。宿をとらねばならぬ。理左衛門は道ばたの家で宿の様子をきいた。そうすると

この村に宿はないが、この次の次に六ツ尾村という村があり、そこに以前から旅人を泊める家があると教えてくれた。やれうれしいことをきいたと道をいそいだが、もう日がすっかり暮れてしまった。

幸い六ツ尾村の入り口に何宗か分かれぬが小さなお寺があつたので、先ずここへ立ちよつて教えられた宿のことをきいた。すると和尚が云うには、「なる程その家は、以前によく旅の人を泊めたが、今では村の申し合せて誰が行つても泊めないことになった。それでこの村へ来た巡礼や旅の人は、もう少し行けば小さな神社があり、その境内で野宿をする。貴殿もそこへ行つて一夜を明かしなさい」と引つこんでしまった。

仕方ないので和尚にきいた宮をさがした。なるほど和尚の言葉どおり宮はあつたが、宮とは名ばかりでとても軒下は寝られそうもない。

どうしたものかと考えたが、よい思案もない。ようやくのことで宮の後ろの方へ手さぐりではいると、少しばかりの平地があつた。そこで背中に負うていたオイ(蚊)をおろし、中から紙でつくった蚊帳を木の枝へかけ渡し、その下で眠ることにした。

理左衛門の旅日記の七月二十六日は勿論旧暦であるから、今の太陽暦でいえば大体八月の末に当たる。また蚊が多かつたと思うが、すっかり疲れていた理左衛門は、蚊の襲撃ぐらいは気にして居られず、朝まで一息に眠った。即ち「花扇子」七月二十六日の条に

：終日の道にくたびれ前後を知らず。ただ一イビキにやつてのけ、夜はほのぼのと明ければ往還へ出、一膳食を買い食し。

と書いてある。現在の観光旅行からは、まったく考えられない、きびしさである。

あとがき

一、やっと清水長一郎遺文集（7）の入力が終わった。

一、いつもの事ながら、こんな無駄なことをと思いの方もおられると思うが、膨大な遺文の中には、父が子供のころ古老から聞いた話や、当時の世相・郡政・村政はもとより、災害のこと、御坊周辺の文化、文化財に関することが記されていて、昭和六十年前後に各市町村で刊行された市町村史には記載されていない庶民的な目で記録されていることが遺されている。

一、歳のせいかな寒波の襲来が早いように感じられ、まだ十一月も半ばというのに、我が家ではストーブの火入れ式すませた。

また、夏にはもう少し近くを通れば、大きな被害をもたらした台風が二個も接近し、人生七十余年でいろいろ経験した。

せめてボケズに、長一郎遺文集続編、および書写本を続けてネットに公開したいものである。

一、今年は春に日高川町議選・十一月に和歌山県知事選・十二月に思いもよらなかった衆議院選挙と選挙の多い年である。

平成二十六（二〇一四）年十一月二十日

清水 章博